

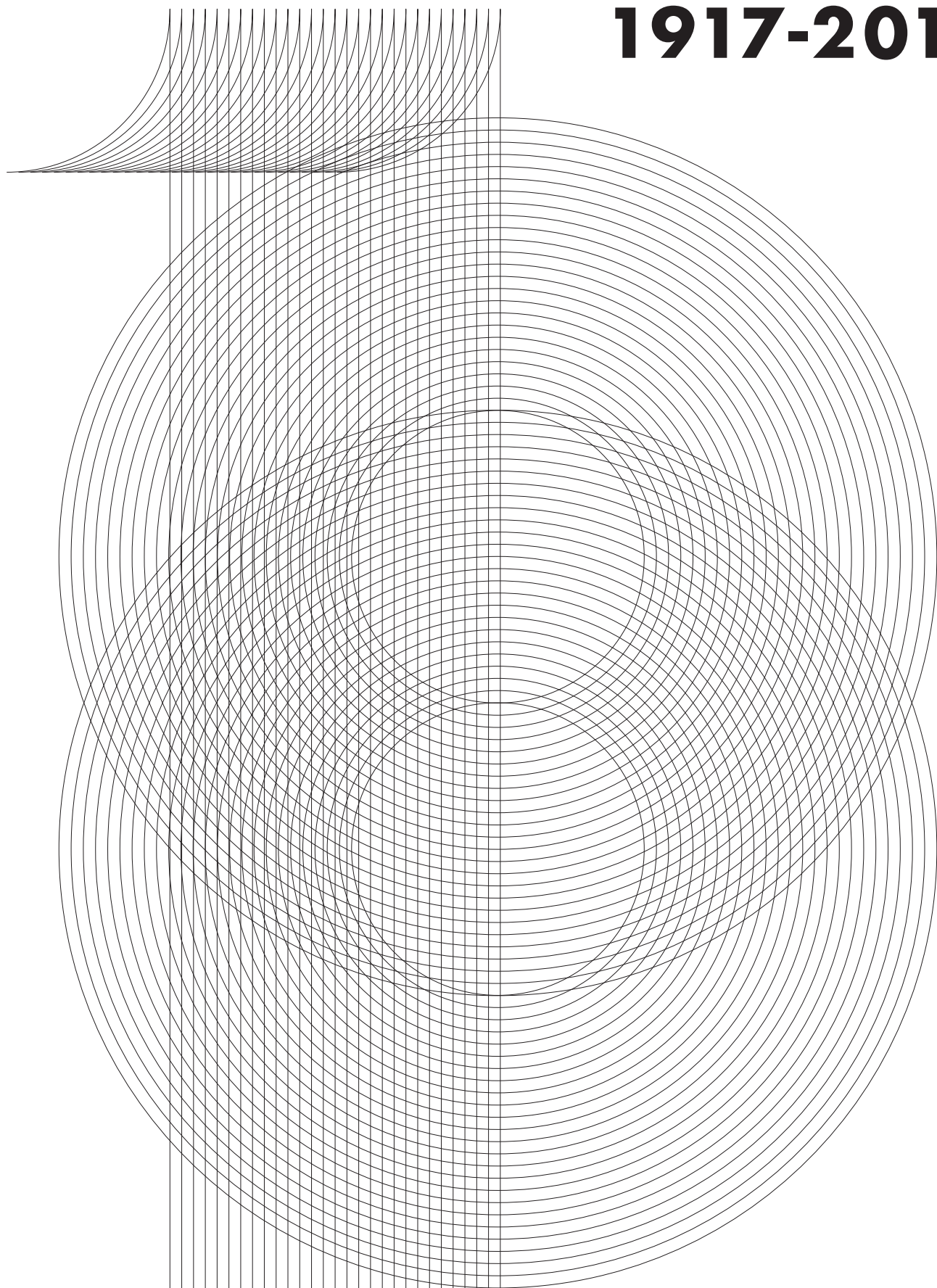
日本建築協会100年史

1917-2017

Centenary History of
The Architectural Association of Japan

日本建築協会

日本建築協会100年史 1917-2017



Centenary History of
The Architectural Association of Japan

日本建築協会

序

1917年（大正6）に設立された日本建築協会は、2017年（平成29）3月30日に100周年を迎えた。設立の翌年、竣工直後の大阪市中央公会堂で第1回の総会を開催した。長年ご支援いただいた個人及び団体会員の皆様にご参集を賜わり、100周年の記念式典をこの同じ場所で開催できたことに感謝申し上げる。

まちづくりに燃えた片岡安以下38名の関西在住の建築界のリーダーたちは、「我が国の建築界の堅実な発展」を目指して関西建築協会を設立した。翌年74名の建築家が集まり第1回総会を開催し、その翌年日本建築協会へ改名した。1926年（大正15）には建築関係の最初の公益法人となった。当時、行政の中心こそ東京にあったが阪神の経済活動は京浜を越えていた。それ故、産業の発展に伴う街の成長拡大にインフラ整備が追いつかず、生活環境が悪化し始めていた。健康で文化的なまちづくりが建築家の責務であることを認識していた彼らは、日本建築協会に建築家を結集し、建築と社会をつなぐ場、実践力のある組織として活動した。そして市街地建築物法（後の建築基準法）や都市計画法の制定に尽力する。箕面桜ヶ丘住宅改造博覧会を開催して、住環境の改善の姿を具現化し協会の役割を社会に示した。設立以来毎月発行する機関誌『建築と社会』は2017年（平成29）の3月号で1140号になる。関西における代表的建築の紹介に加えて、村野藤吾氏の「様式の上にあれ」や、關一^{はじめ}氏の「田園都市」等の著名な論文が種々収録されてきたものであり、今日では関西の近代建築の貴重な研究資料となっている。

戦争の混乱期を潜り抜け、焦土と化した都市の戦後復興に迅速に貢献するため、1947年（昭和22）の創立30周年に定款を変更し、「建築関係各部門の連携協力によって、建築に関する学術・技芸・事業の進歩発達を図ると共に、建築を通じ広く社会に貢献する」団体となった。そして今日の建築関係の行政・教育・研究・設計・施工・建材・販売に携わる個人や法人を等しく正会員として迎え、相互の交流と研鑽により専門家として各々の役割を発揮し、講習会・講演会・見学会・出版・各種の顕彰等の活動を通じて建築に関わる技術の向上と、健全で文化的な社会の形成に貢献する団体として発展した。

この年に早くも地域の特質を生かして活動すべく、京都・中国（広島）・東海等の支部が設立された。当時のリーダーたちの行動には驚嘆する。その後、経済界の浮沈の影響を受けながらも発展し、1970年（昭和45）の万国博の年に会員数はピークを迎えた。しかし近年に至り、少子高齢化の波に揉まれて退会者の増加と、若い会員加入者の減少が進んだことに対応し、インターネットによる新しい情報の拡大と迅速化、そして心の通う魅力的なコミュニティとしての場の提供を図るなど改善を進め、会勢の回復に努めている。

現代はグローバルで多様性の時代である。多発する自然災害とその復興、持続可能な地球環境の維持、歴史や文化遺産の再評価と活用などさまざまな社会の要請に対して、私たち建築人は応えてゆかなければならない。こうした今、さまざまな職能の会員が集う本協会の社会的役割が改めて見いだせるのではないか。その一つとして次世代を担う人材の育成は、建築と社会をつなぐ結節点の役割を担う日本建築協会のテーマでもあり喫緊の課題である。U35（35歳以下の会員）の活動や青年技術者、工高生デザインコンクールの顕彰、若い研究者の発言の場の提供等を強化し「新しい地平」を目指したいと考えている。

日本建築協会は創立以来「建築を通じ広く社会に貢献する」ことを目指し、多彩な活動を続けてきた。この100年史は、日本建築協会が積みあげてきた歴史の記録である。本書を紐解くことによって歴代先輩の苦心の跡をたどりつつ、日本建築協会のはたしてきた役割を理解していただくとともに、今後の建築界の発展のための一助として役立てていただければ幸いである。

この100年史の完成を機会に「日本建築協会100周年記念事業」にご協力、ご援助いただいた各位に対し心から感謝の意を表すとともに、編纂に携わった委員をはじめ関係者のご努力に改めて謝意をささげる。

今後とも日本建築協会の活動へご参加、ご支援賜りますことをお願いし発刊のことばとしたい。

2017年3月

一般社団法人日本建築協会会長 香西喜八郎

日本建築協会100年史 1917-2017

Centenary History of
The Architectural Association of Japan

目次

序	香西喜八郎	03
第 1 部	日本建築協会100年の概要 石田潤一郎／石川祐一／平井直樹／玉田浩之／三宅拓也	05
第 2 部	座談会	
1	座談会 回顧と展望——坂本勝比古先生を囲んで 坂本勝比古／佐野吉彦／山形政昭／設楽貞樹／和田康由	23
2	座談会 大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代 上田篤／鳴海邦碩／小林郁雄／天野直樹／大井昇二／設楽貞樹／橋爪紳也	32
3	座談会 21世紀を拓く建築 本多友常／鈴木毅／安原幹／横山俊祐	42
4	座談会 支部活動をめぐって 香西喜八郎／高松隆夫／篠原佳則／長瀬博一	51
第 3 部	年表（1917 - 2017） 安達英俊／酒井一光／豊田充広／吉永規夫／和田康由	57
第 4 部	協会活動の記録 日本建築協会事務局	89
執筆者一覧		92

第 1 部

日本建築協会100年の概要

第1章

日本建築協会の発足と当初の活動

石田潤一郎

1 「関西建築協会」設立前夜

20世紀を迎えるころ、すなわち明治30年代半ばから、大阪において洋風建築が急速に普及する。それに伴って、それまで両手で数えられるほどであった建築家の数にもわかに増していく。多くは帝国大学建築学科の出身であったが、年齢や職種を異にして意思の疎通は円滑ではなかったようだ。1907年（明治40）ごろ、片岡安が唱道して「オキナ会」という親睦団体が作られる。その名は大阪のオ、京都のキ、奈良のナをとったものである。しかし、次々と増える若い世代は、「オキナ会は名前のとおり、年寄りばかりだ」と敬遠しがちであり、自分たちだけの懇親組織を持つこととなる。その動きは明確ではないが、1911年ごろに「ボンボン」を自称して「建坊会」が結成され、その中の、大正年間になってから大学を出た世代が1916年（大正5）ごろに「大正会」をつくった。また1917年ごろには「建坊会」の論客だけで「水曜会」を結成する。

1917年1月30日、建築学会通常総会が開かれる。そこでの会長選挙で、それまで延べ17年間会長職にあった辰野金吾を落選させようという工作が進められていた。佐野利器はじめ若い世代が、建築界に権勢を振るう辰野を追い落とそうとしたのだ（結果的には辰野が当選した）。この出来事は、関西の建築界には直接の利害はなかった。しかし、東京にいる「中堅」たちが抱いている強烈な変革の意志を知って、「明治建築界」の構造が変わろうとしていることを知らされることとなる。

『日本建築協会雑誌』の1919年1月号と2月号に、「野人生」という筆名の作者による「回想録」という文章が載っている。中身はというと、関西建築協会（以後、協会とも表記）設立の経緯を新入会員に教えるという設定の一種のノンフィクション・ノベルである。1917年2月11日に「〇〇会」が建築学会に関西支部を置くべしという提案をしようという会を開いたが、その後、検討するうちに、関西建築協会設立へと転じたのだ、と説明されている。「〇〇会」が建坊会であることはのちの回顧談などから明らかである。

建坊会が建築学会支部建議を議論した際の出席者は波江梯夫、大林賢四郎、池田實らであった。つまり、片岡安はここには関与していない。しかし、実は片岡はこれに近い提言を同時並行的におこなおうとしていたのである。1917年初頭、片岡安は「同窓建築技術家に告ぐ」という小冊子を建築関係者に頒布する。

その趣旨は、都市問題が惹起し、オフィスビルという新しい建築型の成立を見、鉄筋コンクリート構造が一般化する——という時代の転換点にあって、建築家は「相連盟して」「その意思を交換」するための「建築協会を組織」せよ、というのである。

片岡が新たな職能団体を組織しようとし、「建坊会」が建築学会の関西支部を立ち上げ



図1 片岡安

ようとしたのは、それまで建築界の意思を束ね、導いてきた建築学会がその性格を曖昧にしてきたからである。学術団体としての活動が中心になるにつれて、実務面への関与は減少し、社会へのスタンスも時代に即応しなくなっていたのだ。

一方、自営建築家を糾合して日本建築士会が1914年に発足していた。片岡もその理事を務めていたが、同会においては建築家の職能の確立がその目的のほとんどすべてであって、建設業者や建材メーカーの社員は排除されていた。それに日本建築士会の中心人物たちは都市問題にはほとんど関心を持っていなかった。かくして、片岡は社会的発言をする拠点をもう一つ別個に作らなければならないと思い定めた。そのとき彼の念頭にあったのは単純な職能別の団体ではなくて、商工会議所のような企業家団体ではなかったかと思われる。当初、会頭に後藤新平を据えようとしていたことが示すように、行政への働きかけをはっきり主眼にしているからである。

2 日本建築協会の誕生

危機感がつのる中、「建坊会」が建築学会関西支部を構想したのは、片岡にとって願ってもない好機であった。彼は、若手を呼び集めて、関西の建築家全体を糾合して大きな団体にまとめるべきだと叱咤する。直ちに片岡と、彼の所員で若手の代表格だった波江梯夫との連名で、関西在住の建築家52名に呼びかける。その際の趣旨は「関西の建築家の団結を謀り相互の意思を疎通して建築界の向上発展を期する」というものであった。1917年（大正6）2月27日、39名を一堂に集め、5人の委員を選出して団体の創立案の作成を委嘱することの合意をとりつけた。この創立委員（池田実・片岡安・武田五一・波江梯夫・設楽貞雄）は、3月17日に会則案を得たが、それは親睦団体の性格を主にしてい、名前も「関西建築倶楽部」とするものであった。これに対し、若手の「水曜会」から「建築クラブでは物足らぬ」という意見がでて、3月30日の創立総会の場で「関西建築協会」という名前になり、会の目的も「我が国建築界の堅実なる発展を期

し……将に鳴らんとする曉鐘第一の金剛杵たらんと欲す」と大上段に振りかぶったものに決まった。

会の名称が最後に決まるというのは建築家を組織することのイメージが人それぞれに分かれていたからであろう。しかし、片岡安は「建築協会」に明確な二つの機能を期待していた。「同窓建築……」の文言を借りれば「内に於いては建築に関する大観小察殆んど其の粹を集むること」、「外に向かつては社会を指導して、都市建築の大改造を促す」ことの二つである。発足した関西建築協会はその構想に沿った社会的運動体となる。

協会内に設けられた委員会のテーマは、片岡らが、協会という道具で何をなそうとしていたかを教えてくれる。すなわち「現行関西に於ける建築取締規則改正の研究」「都市建築法規」「仕様書及び契約書案」「細民住宅問題」「建築に関する災害及び時事問題の調査研究」「建築に関する迷信伝説の研究」などである。今まさに生じている問題をわがこととして捉えていることがわかる。「都市建築法規」については次に述べるとして、「細民住宅」をとりあげたことにも目を向けておきたい。不良住宅改良といった社会政策が一般に重要視されるのは、1920年の米騒動によって社会的格差が暴動となって国家を揺るがす事態が現実化して以降のことである。その3年前——第一次大戦による好況が猛烈なインフレを引き起こす前——に、片岡安がこうした視点を持ちえたのは、彼が、どうすれば建築家は「対社会的に活路を求」めることができるかを考えつづけていたからにほかならないだろう。

新組織「関西建築協会」の名前が世に出たのは、都市計画法規制定の運動においてであった。発足直後の1917年4月、協会は大阪市都市改良調査委員会から「都市建築条例の調査」を依頼されたのである。次いで1918年1月、関西建築協会の名において「都市建築法令調査会設置に関する建議」を作成し、建築学会・日本建築士会・都市協会にも働きかけて4団体合同の形をとって、翌2月6日に後藤新平内務大臣に陳情におよぶ。

この攻勢に内務省は動かされ、新しい都市法規の制定をめざして調査会を発足させる一方、当面の措置として大阪ほか6大都市程度の範囲に東京市区改正条例を準用することを決める。1918年3月8日いわゆる「準用法」が議会に提出され、同月25日に成立の運びとなる。この準用法は翌年には都市計画法に取って替わられる短命の法令であるが、それでも東京市区改正条例と同様の制度を求め続けてきた大阪にとって、30年以上にわたる夢の実現であった。

1918年1月には「日本建築協会」と改称し、1920年にいって、機関誌を『建築と社会』と改題する。この誌名は片岡の思考をひとことで束ねたタイトルであり、片岡安自身も協会という機関を用いた活動にかなりの手応えを感じとったことがうかがえるのである。

3 住宅改良の夢

当初の目的であった都市・建築法規の制定が成功裏に決着したのち、協会が次の目標としたのは郊外住宅の問題であった。

協会設立時の片岡の関心はもっぱら都市とそこに建ち並ぶオフィスビルに向けられていたかにみえる。しかし、住宅問題を軽視していたわけではない。1918年（大正7）6月という早い時期に、大阪市の依頼を受けて「職工住宅」の設計図案を作成し、1920年3月には大阪住宅経営株式会社の委嘱によって「改良住宅」の設計懸賞競技をおこなっている。こうした前段階を経て1921年2月に発案されたのが「住宅改造博覧会」だった。

さっそく1等作品を建設展示するという条件でこの年と翌年に「改良住宅設計図案」のコンペを行う。また、博覧会の方式も、会場それ自体を住宅団地とし、土地付きで売り出すものであった。1922年9月、大阪北郊・箕面市の桜ヶ丘において「住宅改造博覧会」が開催された。約1万5000坪の敷地に25戸を建設し、2カ月間展覧に供するもので、総事業費は約27万円を要した。内容も斬新なら、事業規模も大きかったから、日本建築協会は準備に忙殺された。まさに「釣竿で鯨を釣ったようなもの」だったのである。しかし、会員たちが自画自賛するように「あの影響が……建築界全般に及んだ」「文化住宅なるものを促進した」「見物人は……延10万人」と、その成果は大きかった。

1932年（昭和7）には、協会創立15周年を記念してふたたび住宅博覧会を遂行した。今度は堺市大美野と伊丹市緑ヶ丘が会場となり、いずれも今日まで続く良好な住宅地となった。1942年には、創立25周年の記念事業として大阪電気軌道株式会社が経営する奈良市郊外の菖蒲池住宅地において厚生住宅展覧会を举行し、戦時中にもかかわらず、24戸を建設した。

4 「社会の教育」に向けて

創立15年目に、「協会の意義」を問われた片岡安は「大なる目的は……建築家が集まって社会を教育する、社会の為に尽くすことは建築家の社会に対する義務であり、その使命である」と述べている。その言葉どおり、協会設立当初から広く都市と建築に関して啓蒙的活動を盛んにおこなっている。特に大阪市中央公会堂を主たる会場とした「通俗建築大講演会」は、1918年（大正7）12月の第1回が2,000人、その後も1,000人内外の聴衆を集めている。ちなみに第1回の内容は、關一「都市住宅問題」、葛野壯一郎「家相論」、片岡安「大阪市区改正について」、佐野利器「デモクラシーと建築」、直木倫太郎「大阪港の将来」という堂々たる布陣である。

また技術者向けの講習会も1920年から1931年（昭和6）までコンスタントに開かれた。鉄筋コンクリート技術の講義が中心だ

が、安井武雄による「内外美的装飾工法」、松本儀八による「家具の意匠構造様式の関係」などは聞いてみたかったと思わせる。

1923年9月1日に起きた関東大震災に際しての協会の活動はめざましいものがあった。片岡安以下調査委員会を組織して、東京に8名、湘南地方に7名を派遣した。その調査結果を京阪神3都のほか名古屋、岡山、堺で講演し、各地とも1,000名前後の聴衆を集めた。1924年10月には『関東震災火災視察記』を出版している。同時に組立式の仮設住宅を考案し、二度にわたって建設した。初回は延べ5,000坪、2度目は2万ないし3万坪という。また義援金1,000円を集めて大阪府に託している。

1925年5月23日の但馬地震、1927年(昭和2)3月7日の北丹後地震にあたっても視察員を派遣して、震害を調査し、市民向けの講演会をおこなって被害状況を解説するとともに、耐震耐火建築の宣伝をおこなった。

創立15周年を迎えた1932年、片岡安はそこまでの歩みを振り返って「会員が向こうみずであって熱があった……直ぐ効果が見えぬことを長い間今日までも尚やっている……建築協会が社会に対する責任を、使命をどうして尽くそうと云う全体の空気は一定不変である」と自らに喝采を送っている。

日本建築協会が存在意義を高めていった軌跡は、その会員数に如実に表れている。発足時には正会員74名であったものが、5年後の1922年(大正11)には正会員だけでその3倍以上の249名、准員や名誉会員などまで含めた総数は894名を数えた。1926年には正会員は400名を超え、1942年には戦前期最多の1502名に達した。

第2章

日本建築協会における歴史へのまなざし

石川祐一

1 日本建築協会と歴史的建築への眼差し

日本の近代建築の歴史は、西洋の建築文化をひたすらに受容するところからはじまったが、19世紀末以降、古社寺建築の保護、あるいは民家調査などに見られるように、近代化によって失われつつあるものへの評価や保存の動きも顕在化してくる。従来、近代化への志向のみが指摘されてきた日本建築協会の活動においても、歴史への眼差しや近代化への抗いの志向が見出せる。それは協会の特質として評価すべきものであり、1章を割いて、細かく見ていきたい。

(1) 制度としての歴史への関与

日本建築協会の啓発活動として、1920年代より住宅改良や建築の耐火耐震化に関する講演会がしばしば催されているが、一方で古社寺に関する講演会や見学会も確認される。こうした協会内における伝統建築への関心の拠点となった建築家として、武田五一、松室重光、天沼俊一らがあげられる。

昭和戦前期までの時期においては、今日では専門分化している設計、歴史研究、文化財修理の分野はいずれも建築家の領分であり、そのすべてを包括する建築家が存在していた。1897年(明治30)に古社寺保存法が制定されると、重要と考えられる古社寺建造物を「特別保護建造物」として指定し、保護する制度が確立する。同時に近代的な意味での建造物の修理事業が開始されるが、それらの多くは帝国大学での正規の建築教育を受けた建築家が担うこととなる。歴史的建造物の多い関西にあっては、建築家と文化財修理技師とを兼ねる人物が輩出する。

武田五一(1872-1938)は、卒業論文に茶室の沿革を取り上げ、日本建築史への造詣を有したことで知られる。京都府技師としても金閣や平等院鳳凰堂の修理を手掛けている。こうした日本の伝統建築への理解は、播州清水寺根本中堂・大講堂(1917年)や圓教寺摩尼殿(1933年)などの伝統意匠を用いた寺院建築の設計においてはもちろんのこと、稲畑勝太郎邸洋館(1915年)、旧下村邸門(1918年)のようにモダンデザインを伝統的な意匠によ



図2 武田五一

って変奏するかの如き作品にも反映されている。なお、『建築と社会』（1929年）には武田による沖縄民家についての連載が見られ、武田の関心が民家に対しても向けられていたことが分かる。

松室重光（1873-1937）は、京都府の技師としてキャリアをスタートさせ、京都府庁舎など新築設計のかたわら、京都府内の寺社建築の修理に携わり、その調査成果を踏まえた日本建築史の構築を模索していたとされる。設計においても、彼の代表作の一つである旧武徳殿（1899年）のように、日本建築の意匠を再構成する作品を残している。



図3 松室重光

天沼俊一（1876～1947）もまた、奈良県や京都府で古社寺の修理に携わり、京都帝国大学において日本建築史研究を行う一方で、本能寺本堂（1928年）や金戒光明寺本堂（1944年）など歴史研究の成果を反映した社寺建築の設計を行っている。

（2）在野からの歴史への関与：本間乙彦と池田谷久吉

日本建築協会の機関誌『建築と社会』においては1927年（昭和2）から特集号の編集形式が採用された。この時期に編集常務として活躍するのが、本間乙彦、池田谷久吉、伊藤正文、岡田孝男、新名種夫、小林清らであった。彼らのうち、ことに歴史的建造物に関する記事に熱意を注いだ建築家として本間と池田谷をあげることができる。本間や池田谷は、武田や天沼らのようにアカデミズムや文化財行政に身を置く存在ではなく、あくまで在野の一個人として歴史に眼差しを注いだ建築家であった。日本建築協会はそうした草の根の建築史家の重要な拠点となった。

i 本間乙彦

本間乙彦（1892-1937）は、東京高等工業学校建築科卒業後、大阪、東京での設計の仕事を経て、1924年（大正13）から1929年（昭和4）まで市立大阪工業学校（1926年より大阪市立都島工業学校）教員として勤務する。この間、1927年には日本建築協会の評議員となり、『建築と社会』の編集に大きく関与している。本間はこの時期、同誌において「郷土建築（郷土記念物）」の保存を論じているが、同論考は『建築と社会』の「郷土建築」特集へと展開し、協会の歴史的建築に対する取り組みに大きな影響を与えていく。

都島工業在職中の1927年に本間乙彦事務所を開設し、同校退職後には本格的に設計業務を手掛ける。同時期の作品として渋谷五郎と共作の芝川ビル（1927年）や小川ビル（1930年）などが

知られている。

本間の活動において特筆すべきは、民家を評価する眼差しである。本間は1931年から約2年間、月刊『住宅』の編集に携わった。1934年頃より同誌に近畿周辺の民家や農村景観を取り上げる記事を寄稿し、1935年より36年まで「美しき民家」を連載した。民家や農山村風景の美しさを評価し、それが失われてゆくことを哀惜するこの連載は、翌年、『美しき民家』として刊行されている。戦前期までの民家研究は、民家採集とその分類をベースとしたものであり、本間が行ったような民家を探訪して記録した成果は、民家採集の調査に十分に寄与するものであったと考えられる。本間は、建築家として、民家採集から民家の持つ空間への評価と現代住宅への展開へと向かう。民家の大きな軒下や土間空間を採り入れた自邸（1933年）や、囲炉裏を採用した大西邸（1937年）などの作品を残している。それでも、寺社建築の分野で行われてきた痕跡調査の手法を用いた復元的な研究がなされるようになるのは、1950年代を待たねばならなかった。

ii 池田谷久吉

本間と同様に在野の立場から古建築に関わったのが池田谷久吉（1897-1956）であろう。池田谷は市立大阪工業学校（現大阪市立都島工業高校）を卒業後、大阪紡績工場建築の技師や、市街地建築物法の施行を受けて改組された大阪府警察部建築課などに勤務する。そして1926年（大正15）には池田谷建築事務所を開設している。

大阪府勤務の頃より近畿地方の古社寺の調査に没頭し、各所に論考を寄稿している。中でも『建築と社会』に発表された「法隆寺五重塔と空洞の調査研究」（1926年）は同塔心礎下の空洞の存在を指摘し、学会においても注目されるものとなった。やがて法隆寺の再建・非再建論争へも身を投じることになり、奇しくも『建築と社会』が建築史学の大論争に関与することとなった。

池田谷は、「古寺巡礼」「古建築行脚」と題する一連の論考を『建築と社会』等に発表しており、それらは1928年（昭和3）に著書『趣味の古建築』として刊行もされた。また、1934年には大阪府の史蹟名勝天然記念物調査員に任命されている。池田谷は戦後も設計活動のかたわら古建築の調査研究を続け、ことに郷里の泉州地域においては名だたる郷土史家としての地位を築くこととなった。

池田谷建築事務所が関与した設計業務のうち、最も多いのは社寺建築であり、成田山明王院本堂（1934年）、金光教玉水教会（1935年）などがあげられる。こうした受注は池田谷の古社寺に対する素養なしには可能とならなかったであろう。また、復元とは言い難いものの岸和田城の模擬天主（1953年）の設計を可能にしたのも古建築に対する深い造詣によるものといえる。

大学アカデミズムによって育てられ、法令と行政組織に支え

られる建築史研究はおのずから国家的要請を帯びて、寺社を第一とし優品主義をとりがちであった。在野に属する本間や池田谷の民家や古社寺についての取り組みは、保護の対象となる国家的制度によって成立しているアカデミックな調査研究からは抜け落ちてしまう領域を補完する役割を果たした。

2 『建築と社会』における「郷土建築」保存論

日本建築協会を舞台とした彼らの活動の中で、もっともめざましいものが「郷土建築」の称揚とその保存のアピールであった。本間乙彦は1928年（昭和3）、『建築と社会』に「我らが父祖の建築文化記念物を保存せよ」を寄稿する。この中で本間は、住宅建築、あるいは明治期に建築された洋風建築などを「郷土記念物」として取り上げ、神社仏閣等が保護の対象となっているのに対して、「郷土記念物」がその価値を顧みられることなく消失していくことを指摘して、その保存を訴えている。翌1929年、『建築と社会』は「郷土建築」を特集する。「郷土建築」とは本間の述べた「郷土記念物」と同義で、その事例として民家や町家を取り上げているが、明治期の洋風建築にも言及されている。「郷土建築」特集は1930年と1931年にも掲載されている。

本間が述べるように、戦前期の文化財保護制度が対象としたのは古社寺、城郭といった伝統的かつ宝物的な建築であった。古社寺保存法等を改組して1929年に制定された国宝保存法は個人所有物件へも対象を広げたが、民家建築として指定されたのは小川家住宅（京都府）、吉村家住宅（大阪府）の2件のみである。いずれも規模の大きい上層民家である。庶民建築としての民家が本格的に文化財指定されるのは、高度成長を経た1970年代を待たねばならなかった。また、明治期洋風建築の重要文化財指定は、1956年指定の旧造幣寮鑄造所正面玄関と泉布館が最初の物件である。

庶民建築である民家、あるいは近過去の遺産であり伝統建築という概念からは外れる洋風建築を評価し、その保存を主張す

る視点は、戦前の宝物保存的でかつイデオロジカルな性格とは異なる。「郷土建築」保存論は戦後の文化財保護、とりわけ地域文化財への評価を先取りするものであったといえる。

本間は、新しい都市空間を築くための自らの設計活動が歴史的な建造物を壊すことによって成立していることについてジレンマを吐露しているが、こうした意識を共有する建築家たちは少なからず存在していたのでは

ないか。彼らの共有するジレンマが、日本建築協会による「郷土建築」保存論に現れていると言えよう。制度としての文化財保護の枠組みを大きく超えて、いまだ国家によって認知されていない領分であった遺産の保護に取り組んだという点に、国家的制度を担う組織とは異なる日本建築協会の性格が表れているといえよう。

おわりに

本間や池田谷らの設計活動は、都市の近代化や市街地建築物法による建築業務の管理によって需要を得たものであるともいえる。近代化のために失われていくものを評価し、保存を訴えるというジレンマは、他の建築家たちも共有していた意識であり、近代化の過程を肌身で感じる体験であったはずである。制度に組み込まれた学会や、職能の維持を目的とする組織とは異なり、アカデミズムから在野の活動家までを横断的に包括するという性格を有した日本建築協会は、近代化に対する建築家のジレンマを具体的な活動に変換する場となったのではないだろうか。制度に組み込まれた歴史研究や文化財保護からはこぼれ落ちてしまう歴史への眼差しにベクトルを与える役割は、同協会の成果として評価されるべきものである。

主な参考文献

- ・植松清志「建築家・本間乙彦について」『大阪人間科学大学紀要13』2014年
- ・大草一憲、櫻井敏雄「建築家池田谷久吉の経歴と設計活動の概要」『泉佐野市史研究第7号』2001年
- ・酒井一光「建築家・本間乙彦と『郷土建築』保存論」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2003年



図4 『建築と社会』郷土建築号、1929年4月号

第3章

戦時体制下における日本建築協会の活動

平井直樹

1 「非常時」への転換

日中戦争が始まった1937年(昭和12)は建築界にとっては、明から暗への転換の年となった。この年、建築量、主要資材の生産量において、第二次大戦前の最大量を示したが、時局の悪化とともに、一般の建築活動は縮減の一途を辿ることとなる。国内では、1937年10月に「鉄鋼工作物築造許可規則」、1939年11月に「木造建物建築統制規則」が施行され、統制が強化されていった。

毎年、『建築と社会』1月号では、協会の会長であった片岡安が年頭所感を掲載しているが、1938年には急激に変化する時代を反映した「非常時に直面する新春の建築界」を記している。この中で片岡は、建築に関わる者がその専門的知識と技能を活かすべき仕事として、とくに内にむけた「都市武装の実現」と、外にむけた「大陸の勢力圏内に於ける各地の建設工作の急設」をあげた。また、1941年には「迎春の辞」で、こうした課題に加えて、「国民大衆の福利増進の基礎をなす住居の安寧を期する事」の重要性を指摘している。

2 「都市武装」実現への取り組み

1937年(昭和12)10月の防空法施行にあわせて、内務省計画局に防空課が新設され、防火防空に関する国家的な施策が実行されていったが、協会による「都市武装」の実現への取り組みはそれに先行する形で進められている。

1934年9月、日本建築協会は当時の内閣総理大臣岡田啓介や主要都市の首長に宛てて、「都市武装に関し防火防空建築物の普及促進に付建議」を行っている。その内容は、現行の防火地区を拡大させるとともに、耐火建築物に対する資金面での方策(補助金の交付や低利資金の融通、家屋税の減額など)を打ち出すことを要請するものであった。また、1940年10月には「重要都市における建築物の防火方策急施に関する建議」を行っている。当初は長期的かつ大局的な見地から「都市武装」の促進を訴えたが、遅々として対策が進まないまま緊急性が増していく中で、より現実的な既存木造家屋の防火改修事業の必要性を説くに至っている。

協会における「都市武装」の取り組みを先導したのは、1934年に特設委員会として組織された都市武装促進委員会であった。委員長は、大阪の建築行政の先駆者であった池田實(1934～

36、40～42年)、後に協会の会長となる竹腰健造(1937～39年)が務め、委員には、井上新二、古宇田實、波江梯夫、坂静雄、安井武雄、村野藤吾、森田慶一、今林彦太郎ら錚々たる面々が名を連ねている(年度により異なる)。

防火防空建築の普及や促進に関わる協会の事業は、『建築と社会』における都市武装特集(1934年)、防火改修特集(1942年)などの出版活動のみならず、防空大講演会(1934年)、京阪神防空演習への参加(1937年)、日中戦争での爆弾による建築物の被害状況調査および報告会(1937・38年)、防空関係法規に関する講演会(1939年)、空襲の実相と防空建築に関する講演会(1940年)、実爆弾並実焼夷弾投爆演習への参加(1941年)、8地域巡回の都市防空講演会(1942年)、防火改修技術講習会(1942年)など多岐にわたる。また、都市武装促進に関する懸賞論文およびポスター「都市武装促進」図案募集(1934年)、都市防空建築トーカー脚本募集(1935年)、市民防空壕展出品図案募集(1941年)、家庭防空施設図案懸賞募集(1942年)と様々な角度から懸賞募集に取り組んでいる。

より社会に開かれた活動として、一般の人々が集まりやすい百貨店で開催された「市民防空壕展覧会」(1941年)、「建築と防空展覧会」(1942年)があげられる。後者は、協会創立25周年事業のひとつである。「防空なくして国防なし」をスローガンとし、「住宅防空」「都市防空」「建築的防空」「防空資料」「協会廿五年記念展」の5部から構成されるものであった。都市の分散計画や都市空地の利用といった公的なスケールでの防空対策から、偽装、灯火管制、防火改修、防護室や防空壕、対比施設といった個々の施設や建物における具体的な対処法まで示された。

3 住宅問題に関わる活動

戦時体制下においては、工場労務者をはじめとする労働者のための住宅不足が深刻な問題となっていた。国の対策としては、1939年(昭和14)から始まる軍需工場を中心とした厚生省の労務者用住宅供給事業が先行したが、1941年には住宅営団法および貸家組合法が施行され、住宅供給の新たな枠組みが整備されていた。

『建築と社会』でも、1940年6月に住宅問題の特集し、住居標準の考え方について述べた高山英華「国民住居の標準」、経済的側面に着目した小宮賢一「景気変動の住宅企業に及ぼす影響」、住宅設計における社会的視点の重要性を説いた奥井復太郎「住宅論の社会的性格」など多角的な視点をもたらす論考を掲載している。量的側面ばかりが目立って、質的側面が置き去りにされかねない状況の中で、最低および適正な住居標準の探求にもとづく「国民住居」の確立を目指す建築界一般の動きと軌を一にするものであったといえる。

協会による注目すべき取り組みとしては、1942年11月28日～12月6日に、創立25周年事業のひとつとして開催された菖蒲池厚生住宅展がある。関西急行鉄道菖蒲池停留所（現近畿日本鉄道あやめ池駅）に近い大池（現蛙股池）の南側を実際の敷地として、8社（上田組、大林組、岡本工務店、木村組、清水組、双星社、竹中工務店、藤木工務店）の出品による24棟の「模範的厚生住宅」を実際に建設して展覧会を開催するとともに、会期終了後には分譲して実際の住宅地を形成するというものであった。

開催に先立って、設計図案の懸賞募集を行っている。この懸賞で求められたのは、「様式の質実なる、平面の利便なる、設備の快適なる、構造の安全なるは言を俟たざるところ、現下の国際情勢に対応し、資材不足勝の折柄、容易に入手し得べき材料を用ひ、100平方米迄の比較的余裕ある国民住宅の理想案」であった。100㎡という床面積は、営団住宅の基準であった厚生省の住宅規格協議会による標準規格の約30～80㎡を超える面積であると同時に、木造建物建築統制規則による制限を受けない最大限度であった。つまり、当時の法的枠組みの中で実現しうる「国民住宅」のあるべき姿を実際に建設してみせるということであった。中西六郎が幹事長を務める住宅展覧会幹事会が審査にあたり、集まった105点から入賞3点、佳作5点が選出され、実現に移された。入選案のひとつは、建築工芸技術研究所に通う女性による案であり、その点でも、召集にともなう男性技術者の不足から女性の建築技術者の養成を目指したこの時代を反映するものであったといえる。

4 新建築体制と合併問題

時局に応じた建築界の新体制問題について協議するため、四会連合（建築学会、日本建築協会、日本建築士会、建築業協会）から委員が集められ、1941年（昭和16）3月、佐野利器を委員長とする建築連合協議委員会が設置された。本協会からは、井上新二、片岡安、鈴木一幸、竹腰健造が委員を務めた。協議委員会には、5つの専門委員会が設けられ、それぞれ、建築行政機構、官庁営繕ならびにその他営繕、建築設計監督業務、建築施工組織、建築技術家団体について検討された。協会内にも新体制委員会を置いてこれに対応している。

このうち、建築技術家団体に関する協議において、協会と建築学会とを合併して新団体を組織する方向性が定まる。こうした経緯について、竹腰健造は「協会は社会にサービスするのをモットーにしている、学会は学問ばかりやっているとウケが悪いので協会の仕事の真似をし出した。又協会も学問的な事をやり出し、両者がだんだん似て来たので新体制の問題が起きて来た」と回想している。ただ、新団体の具体的なあり方については、二者の間に大きな隔たりがあった。まず、その体制について協会が主張したのは、関西と同格の関東支部やその他の全国

支部を設置して地方無視とならないようにすること、本部は支部により維持されること、事業は会費主義とすることなどであったという。

最も大きな問題となったのは新団体の会名である。1942年11月に「建築新体制要綱」の成案を得るに至ったが、新団体の結成に関する要綱は別冊で、会名も「日本建築学協会（仮称）」となっている。協会側は「日本建築界」を候補とし、「学」を入れることに強い抵抗を示したため協議が難航した。先にあげた竹腰の言葉からもうかがえるように、この主張は、建築学会とは異なる学者、設計者、行政関係者、施工業者、建設資材メーカー等が一体となった団体として、建築に関わる実践的あるいは啓蒙的な活動を通して社会に貢献することを重視してきた協会としての思いを反映したものであった。

1943年2月以降、両会から委員と幹旋役を出して、同年6月まで7回の協議を重ねた。以後の折衝のためには合併後の財政計画が必要ということで、それぞれ立案を進めることとして協議を中断する。1944年3月に8回目の協議会を開催したが、やはり会名で紛糾し、いったん協議会を打ち切る。

しかし、大阪府特高課から出版事業整備要項に基づいて『建築と社会』誌の発行停止を命じられるに及んで、同誌を1944年3月号で終刊とし、以後『建築雑誌』へ統合することとした（終刊号の実際の刊行は記事内容から見て4月以降で、以後、1946年11月までは冊子形式の「会報」を6号発刊）。1945年1月に建築学会会長小林政一が来阪して片岡安と会談し、会名を「日本建築学会」とすることなどで一応の合意を見た。その後実行委員2名ずつを出して協議を進めたが、「戦争がひどく、敵艦隊台湾沖に現る、というのでそれ所ではなくなった」（「35周年記念座談会」での中西六郎の発言）。合併協議が正式に停止するのは終戦後の1945年11月のことである。

小結

1937年（昭和12）以降の日本建築協会の活動は総力戦体制の中に組み込まれたものとなっていった。上に見た防空対策や小住宅の改良をはじめ、戦時規格委員会の設置、新興木構造住宅の講演会開催などいわゆる「職域奉公」が活動の中心となる。そうした中、古建築の見学会が1943年11月まで継続しているのは、協会がなお国家とある距離を保っていたことを感じさせる。また1942年、43年の『建築と社会』誌において、住宅営団がその標準平面集に7.5坪の労務者住宅を加えたことを批判する記事が複数掲載され、あるいは唯物史観の筆法をもって桂離宮の限界を指摘する論考が見出せるところに、関西の建築界の持つ自由さを見ることができる。

はじめに

太平洋戦争の終結を迎えてからの20年間は、戦後復興期を経て高度経済成長期に差し掛かる時期に当たる。大阪・神戸などの大都市は爆撃を受けたことにより、それまでに築いてきた都市空間の多くを失ったが、関西の建築界は都市復興の事業に邁進し、その後、朝鮮戦争による特需景気を迎え、東京オリンピックを控えた景気を背景に建設ラッシュに至る。戦後混乱期から、「もはや戦後ではない」と宣言され高度経済成長の軌道に乗り始めたこの時期に、「広く社会に働きかける団体」を標榜する日本建築協会はどのような取り組みを行ってきたのか。その足跡をたどってみたい。

1 戦災復興と日本建築協会

終戦後の再出発

終戦直後の日本建築協会は大きな変化の時を迎えていた。創設時から初代会長として協회를リードしてきた片岡安が1946年（昭和21）8月に没し、第2代会長に竹腰健造（在任：1946年8月～58年3月）が就任した。竹腰は会長就任の挨拶で、当時の建築業界の問題として以下の三つを挙げている。1）都市復興の問題、2）国民住居の問題、3）占領軍施設の建設、である。特に都市復興に当たっては、建築に関心を持つ諸団体が一丸となって取り組まなければならないと考え、1947年末に協会の定款を改訂し、それまで「建築家ヲ以テ会員トス」となっていたものを改め、建築技術者、施工業者、材料業者、設備業者を会員に加えることにした。これはわが国の建築界の発展を促進させようとの意図を込めてのことであった。戦時中の統制によって廃刊を余儀なくされていた会誌『建築と社会』も1947年3月に復刊し、協会は再出発した。その間の1945年12月と46年7月には復興院などに宛てて、戦後復興についての建議をおこなっている。

占領軍施設の建設

復刊して間もない協会誌の誌面には、占領軍将校用アパートや兵舎の改修および新築などが並ぶ。協会員によって阪神地区の接収住宅の改修やディペンデント・ハウス（占領軍家族住宅）、その家具デザインなどが報告されている。浜寺公園に建設された進駐軍家族住宅（図5）の見学会を1947年（昭和22）5月に催



図5 浜寺に新築された占領軍家族住宅（米国国立公文書館所蔵111SC-342342, 1949年3月4日撮影）

したところ、予想をはるかに超える200名近い参加者が集まったところにも、関心の高さが表れている。実際に神戸ベースの技師として施工に関わった協会員はアメリカの住宅設備、量産方式の技術の高さを評価している。また、大阪府占領軍宿舍用家具生産協力会で指導員を務めた協会員は、占領軍施設を建設した経験がわが国の技術水準を国際的なレベルまで高めることに寄与し、終戦直後の危機を乗り切る助けになったと指摘している。このころ関西では、民主的な都市復興を理念として掲げる連合軍総司令部（GHQ）経済科学局の職員を講師に迎え、都市と住宅問題の講習会も開催されるなど、アメリカの情報にも敏感だった。

モデルとしてのアメリカ

戦後の日本は、太平洋戦争を通して目の当たりにしていたアメリカの技術力から率直に学ぼうとした。建築技術については



図6 アメリカ博覧会（米国国立公文書館所蔵111SC-378186, 1950年5月14日撮影）



図7 大阪CIE図書館(米国国立公文書館所蔵111SC-378184、1950年5月2日撮影)

施工方法と材料が注目され、鉄骨構造や建材としてのアルミニウムが注目を集めた。その後も協会誌には現地を視察した国内のゼネコンからアメリカの施工技術やデザインの新傾向についての報告が続き、最新のアメリカの住宅事例も定期的に誌面で紹介されるようになった。そう

した中、西宮でアメリカ博覧会が開催された(図6)。アメリカの中流階級の住宅街が大林組や竹中工務店のモデル住宅により形成され、モダン・リビングのイメージを伝えた。協会は1950年代半ばにリチャード・ノイトラやウォルター・グロピウスを招いた講演会を開催し、国際的な潮流を広く伝えることに寄与した。

連合軍総司令部の一部局である民間情報教育局(CIE)は、日本占領下の文化面の情報収集と行政指導を行い、教育制度改革などを実施した機関であるが、民主化政策の一環として各地に図書館を設置し、アメリカの図書・雑誌を自由に閲覧できる環境を整えていた(図7)。CIEによる民主化の理解の促進はデザイン面に影響を与え、特に商業建築に与えた影響は大きかった。アメリカの物質的な繁栄や精神、そして戦後アメリカのデザインにも学びつつ、わが国の再建を目指していくことになる。

わが国の建築デザインは戦後に急速に流れ込んだアメリカ文化を吸収する中で徐々に変化していく。後述するように日本建築協会は多くの住宅博覧会を举行しているが、そこでの出展作でも堅羽目板張りの外壁、片流れ屋根を用いたマルセル・ブロイヤー調の意匠が目立った。

しかし一方で、安井武雄は「近頃はアメリカのデザインが日本に多いが、もう少し落ち着いてデザインしなくてはいけない。近頃の日本のデザインは上滑りしている」(『建築と社会』1951年8月号)と当時の心境を吐露している。渡邊節もこれに同意しており、表面的な模倣から離れ、日本のデザインを再考することが一つの課題になっていた。

2 都市と住宅の復興

戦災復興の都市ビジョン

終戦直後の課題は都市と住宅の復興であった。1946年(昭和21)には「明日の都市復興」論文および「大阪市区公館地区」復



図8 神戸元町ジュラルミン街 昭和21年10月完成、12月に営業再開(神戸元町商店街所蔵)

興設計案の懸賞募集をおこない(入選者決定は1947年2月)、1947年2月には大阪市長と近藤博夫を講師に招いて「都市復興講演会」を举行している。一方、座談会「これからの建築はどうあるべきか」(1948年)では、元戦災復興院総裁の小林一三を迎え、当時の課題が議論された。第一に挙げられたのが建物を不燃焼にすることである。次に経済性を考慮し、小規模都市を計画していく必要があるとしている。住宅については、封建的な面を払拭し、居室面積も大きくし、生活様式を変えて椅子座にすること、そして大量生産の技術を導入していくことが求められるという意見も出された。ここで小林は市民の意思を行政機関に訴えることの重要性を強調しているが、これは協会が力を入れて取り組んだことであった。座談会では当時の都市復興のビジョンが提示されたが、戦災復興期における喫緊の課題は商業建築と住宅の復興である。次の段階として、ようやく都市美や建築美を考えることができる。復興が進んでいたのは主に商業建築であったため、長期的な視点で建築・都市の姿を構想し、建築家が社会的な責任を果たしていくことが望まれた(図8)。

住宅については、1946年2～3月に大阪市天王寺動物園で開かれた「復興住宅展」を後援し、1947年には大阪府による「復興住宅展」の設計案の審査の委嘱を受けて、西山卯三・村野藤吾・小林清らを審査員として選考をおこなった。同年12月には宇治山田市での「平和博覧会復興住宅」設計懸賞事業を後援している。1949年8月にいって、日本建築協会の単独主催で「これからの住宅展」を開催した。これを皮切りに住宅展覧会を復活させ、1950年に「伸びる住宅展覧会」、1952年に「これからの住宅展」を開催した。これらは百貨店内で模型とパネルを展示するものであったが、1952年11月の「羽衣住宅展示会」は協会35周年記念事業として、実物28棟を建設するもので、戦前の住宅改造博覧会、あるいは大美野、あやめ池などでの住宅博覧会の復活となった。

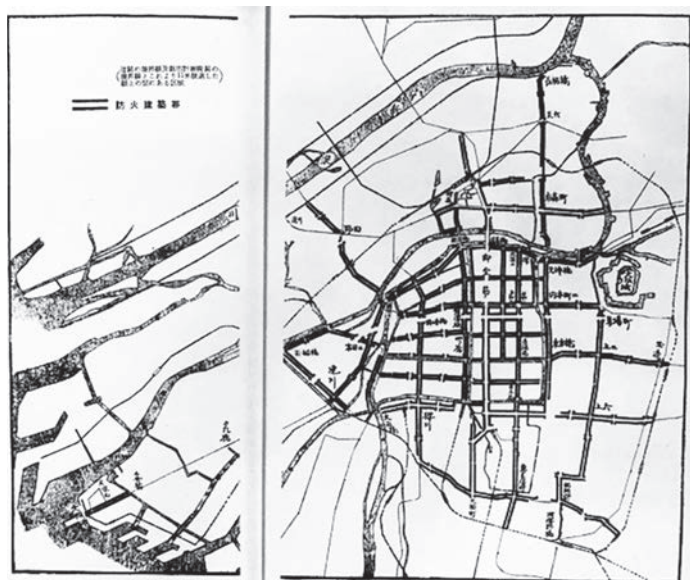


図9 大阪市防火建築帯図『建築と社会』1952（昭和27）年、第33輯第12号

都市不燃化の促進

戦後5年たってもバラックが建てられることも多く、当初思い描いていた不燃都市の建設にはまだ程遠い状態であった。協会は被災率を軽減させることを目指し、都市不燃化の推進に取り組んだ。1952年（昭和27）2月、日本建築学会、都市不燃化同盟等の機関とともに「防火建築帯造成促進に関する陳情書」を提出した。「耐火建築促進法」が施行された年に『建築と社会』では都市不燃化特集が組まれ、大阪市の防火建築帯の計画が紹介された（図9）。

1953年には建設省・大阪府などとの共催で「燃えない都市建築展」を難波の高島屋において実施している。なお、耐火・耐燃材を含む建築材料については、1949年に建材審査委員会を設置して、優良品に対して優良証明書を発行し、さらにその周知をおこなうこととした。これによって、戦後続々と出現した新建材の向上を図り、粗悪品の排除・改善の道筋を付けた。

3 現代建築における伝統とビル建設ブーム

現代建築における伝統の問題

戦後まもなく、建築評論家の濱口隆一は『ヒューマンイズムの建築——日本近代建築の反省と展望』（1947年）を上梓し、日本の近代建築のあり方を問い直した。国際的な建築を目指す以上、わが国の近代建築は日本的なものにはなりえないとし、人間性を重視した国際的な建築へと展開するべきだと論じた。日本建築を国際的なものへと方向づけ、世界の近代建築運動へと接続させた意味は大きかったが、1952年（昭和27）から「伝統」の問題が建築ジャーナリズムで取り沙汰されるようになる。ブルーノ・タウトによる桂離宮再評価に続き、ウォルター・グロピウスの訪日を契機に日本的なるものを振り返る気運が高まり、ニ

ューヨーク近代美術館に建設された吉村順三の書院造が人気を博すなど、日本の伝統を考える機会が増えたことも影響している。1957年ごろまで続く、いわゆる「伝統論争」は日本建築協会にも及ぶ（「日本の現代建築における伝統の問題」『建築と社会』1954年7月号）。西山卯三は「民族的伝統と国民的建築」（『建築と社会』1955年1月号）と題する論考の中で、のちに積極的に見出されるものとして「伝統」を位置づけ、国民の直面する課題に対して真摯に向き合うことで国民的伝統を発展させることができるとする。近代建築の発展を冷静な目で見直す機会となった。

ビル建設ブーム

1950年（昭和25）に朝鮮戦争が勃発すると、繊維、機械、金属部品の海外需要が増大したことによって日本国内は好景気を迎え、ビルの建設が急増する。これは、当時戦災によって事務所建築が極端に不足していたこと、特需により多くの国内企業に経済的な余裕が生まれたことが背景にある。また、同年5月に臨時建築制限規則等の法令が廃止され、「建築基準法」及び「建築士法」が公布されたことにより、建築の量を規制するものから質を担保するための規制へと移行したこともビル建設ブームを後押しした。日本の工業界の中で最も特需の恩恵を受けたのは繊維業であった。いわゆる「糸へん景気」は日本の建築業界にも及び、紡績工場や関連の事務所、銀行等が次々と建設された。

こうした機運の中、1954年から1958年まで「コンクリート技能講習会」を催した。また1957年からは「現場管理実務講習会」が始められ、名称を変えつつ今日まで受け継がれている。若い世代の育成という点では、戦後の学制の変化にあわせて、1952年度から工業高校の優秀卒業生の表彰を開始し、1955年には「工高生デザインコンクール」をスタートさせた。社会人に対しては、1954年に「青年建築家」（1968年から「青年技術者」）の顕彰が開始された。また1957年からは事業委員会内に「若い会員の集い小委員会」を設けて、意見交換や見学会の機会をつくっている。

おわりに

戦後の日本は建設資材が不足する中で都市の復興が進められていたが、1949年（昭和24）のドッジ・ラインに基づく緊縮財政により復興計画は縮小・変更を余儀なくされ、建設工事は一時減退した。ところが、朝鮮戦争の特需景気によって建築業界はにわかに活発化した。戦後の混乱期を脱した1950年代後半から、協会は住宅改善のための啓蒙活動、建築技術の調査研究、行政機関への提言に加えて、技術革新の成果を普及させる活動を多様化させ、高度経済成長への準備を整えていくことになる。

第5章

高度経済成長期以後の日本建築協会

三宅拓也

1 超高層建築時代への対応

日本の経済成長に同調するように、1960年（昭和35）に前後して、新朝日ビル（1958年、高さ45m）、関電ビル（1960年、高さ45m）、新阪急ビル（1962年、高さ41m）などの高層ビルが次々と大阪に竣工した。御堂筋にオフィスビルが建ち並び、高さの揃ったスカイラインが形成され始めたのもこの頃である。『建築と社会』1963年12月号で「超高層建築」特集が組まれたのも、都市化進行にともなう土地の高度利用を叫ぶ時勢を反映してのことであった。

当時の建築基準法においては31mの絶対高さ制限があり、前述の高層ビルはいずれも建築基準法第57条の特例的な適用除外を受けて実現したものである。その後、オフィスビル需要を受けて法改正が進められ、絶対高さ制限から容積制限へとシフトし、超高層建築の時代へと突入することとなる。ただし東京では、オリンピック関連施設の建設が急務であったためか、既存ビルを増築した東急会館（1954年、高さ43m）以後、高さ制限を超える高層ビルの登場は1964年のホテルニューオータニ（高さ72m）を待つこととなる。大阪駅前の第一生命ビルディング（1953年、高さ41m）が開いた高さ制限を超える高層建築時代は、1960年代前半の大阪で醸成されたのである。

それゆえに、大阪市の中之島高層地区構想に基づいて計画され、当時の高さ日本一の高層ビルとして竣工した新朝日ビルは新時代の里程標となった。『建築と社会』もこれに注目し、1958年6月号で毎日大阪会館南館（1958年、高さ31m）と合わせて特集を組んだ。特集誌面は計画から竣工後の管理に至るまでを追った記録性の高い内容で、専門的な情報も含まれる。先端技術と知見の共有を図る特集の姿勢は協会が主宰する見学会にも現れ、1950年代後半から1960年代にかけて高層ビルを中心に建設現場への見学会も実施された。

関西建築界は神戸商工貿易センタービル（1969年、高さ110m）によって超高層建築時代を迎え、1973年に竣工した大阪大林ビル（高さ120m）と大阪国際ビル（高さ125m）がこれを決定付けた。『建築と社会』はそれぞれ特集号を組み、「高層建築問題」特集（1970年6月）で提起された課題への解答例を示すかのように、各分野の解説とともに関係者の座談会を通じて要点を解説した。そこでは高層化の一方で進められた工程管理や設備制御へのコンピュータ導入についても取り上げられている。

時宜を得た『建築と社会』における記録性の高い特集や見学

会・講習会の開催は、増加の一途をたどった会員による活発な交流もあり、業界における技術や経験の蓄積・共有に寄与した。協会50周年をきっかけに1968年に編纂・発行され増補・改定が続けられた『建築データシート』もこれを大いに助けた。こうした知見は、1960年代における先述した高層ビルや日本生命保険本店（1962年）や御堂ビル（1965年）をはじめとする軒高31mの「伝統的」高層ビル群、1970年代に本格化した大阪駅前市街開業や阿倍野再開発事業などにも還元されていくこととなる。

2 千里ニュータウンと日本万国博覧会

都心部で建築の高層化・高密度化が進む一方で、スプロールの近郊開発が起こった。その対策として、大阪府北部の千里丘陵では都市スケールの開発事業が進んだ。1958年（昭和34）に開発決定した千里ニュータウン（1962年第1期入居開始）と、1965年に会場決定した日本万国博覧会（1970年開催）の建設である。『建築と社会』には計画段階から完成後のフォローまで記事が掲載され、都市計画関連の特集も続いた。

日本万国博覧会の開催に関連して、日本建築協会はいくつかの重要な役割を果たした。ひとつは日本万国博覧会協会から委託を受けたコンストラクションガイドの作成である。日本建築協会は1966年2月に「EXPO '70 日本万国博コンストラクションガイド制作委員会」（委員長：浦辺鎮太郎）を組織し、諸外国に配布される公式ガイドを9カ月で完成させた（図10）。もうひとつは、万博期間中にお祭り広場を主会場として開催された第2回日本建築祭において日本建築協会が事務局となり、東畑謙三会長が日本建築祭委員会委員長を務めたことである。日本建築祭は建築関係8団体（建築業協会、全国建設業協会、全国建築士事務所協会連合会、全日本建築士協会、日本建築家協会、日本建築学会、日本建築協会、日本建築士会連合会〔50音順〕）による連合大会である。その第1回は東京オリンピックを記念して国立屋内総合競技場で

開催された。いずれの役割も、大阪を拠点に分野横断的なネットワークを組織してきた日本建築協会への期待がもたらしたものである。

万博後の建築界は、経済不況に加えて建築基準法改正などへの対応も迫られ、忍耐の時代を迎える。協会の会員数も年々減少し、1976年の創立60周年も記念事業は見送られてささやかな祝賀会のみに留まっ

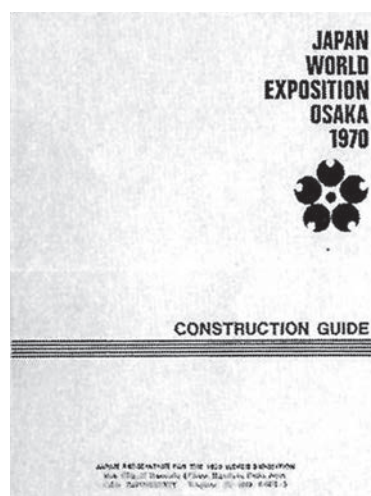


図10 EXPO '70 日本万国博コンストラクションガイド

た。それでも、1970年に『建築と社会』への掲載が開始された法規委員会による「法令コーナー」、1975年に同じく開始された建材委員会による「新建材紹介コーナー」など、堅実な活動で業界を支え続けた。なかでも若い会員の集い小委員会は活発に活動し、東孝光・山崎泰孝・安藤忠雄らを迎えた講演「若手建築家に聞く」(1975年)、ヤニス・クセナキスによる講演「建築と音楽」(1976年)、二川幸夫の講演(1980年)など、多彩な企画を実現させる。会員の高齢化が危惧される中、事業委員会も青年会員の活動に期待し、これを積極的に支援した。

なお、協会の分野横断的なネットワークは会勢の維持進展についても期待された。1971年に組織された会勢委員会によって建築クラブが復活し、月一度の朝食会は会員交流の場となった。

3 歴史的環境・自然環境の保全

都市化の進行と郊外開発は、歴史的環境・自然環境に対する影響も大きく、日本建築協会の諸活動でも保全問題が話題となった。とりわけ歴史的環境をめぐるのは、1959年(昭和34)～61年に設置された近代建築調査委員会の活動、1962年の創立45周年記念出版『ふるさとのすまい：日本民家集』(毎日出版文化賞受賞)、『建築と社会』の特集「民家の系譜と保存計画」(1969年10月号)や「歴史的環境保全」(1974年1月号)など、様々な形で継続的に取り組まれた。1973年の第1次石油危機後には、建築の省エネや景観問題なども取り上げられるようになる。

特筆すべきは近代建築調査委員会の活動である。政岡基次の呼びかけによって瀧澤真弓を委員長として組織された同委員会は、西日本に残る明治建築を主対象とした「近代建築調査委員会報告」を『建築と社会』に1960年1月号から連載する(図11)。この連載は全62回を数えた。なかでも神戸・川口の洋館を網羅した1962年2月号は、「居留地建築」特集として誌面の中心を占めた。瀧澤は連載開始時に「遅巧よりも拙速をとる」と語っ

たが、近藤豊、林野全孝、坂本勝比古を主とする委員らの報告は、外観写真だけではなく時に小屋組内部や棟札、原因が掲載されるなど学術的価値をとまなうものであった。日本建築学会有志が明治建築研究会を結成するのが1960年、同学会内に明治建築調査委員会が組織されるのは1962年のことである。開発の裏で失われつつあった近代建築の意義を社会に向けて発信した近代建築調査委員会の活動は、近代建築保存黎明期において価値あるものであった。

4 1980年代前半の都市と建築：21世紀への視点

万博に始まり石油不足に終わった70年代を経て幕を開けた1980年代前半の建築界は、インフレの影響による不況を引きずり、住宅建設をはじめ厳しい時期を迎える。『建築と社会』1月号巻頭に掲載される会長の新年挨拶も暗い論調が続き、明るい話題といえば関西国際空港と関西文化学術研究都市の二つの国家的プロジェクトの進行であった。

1970年(昭和45)のピーク以来、会員数の漸減が問題となっていた日本建築協会は協会の活性化を図るため、近畿建築会館から大阪駅前第三ビルへと移転(1983年12月)し、協会創立70周年を前に大きな転換期を迎えた。協会創立60周年記念出版『建築技術選書』(1978年)全37巻が出揃う1983年には企画委員会を設置して「21世紀に向かって協会はいかにあるべきか」を討議し、翌年の『建築と社会』1984年1月号で特集「21世紀の関西」を組むなど、来るべき21世紀を視野に入れた活動を展開した(図12)。実際の事業にも変化が見られ、1984年からは調査研究業務を受託するようになる。都市の人口動態や住宅需給モデルの調査といった住宅建設に関するものを中心に、行政・公社・企業からの依頼を受けて調査研究を実施した。

各委員会は1970年代からの活動を着実に継続した。こうしたなか、『建築と社会』には作品作風小委員会が企画編集する



図11 「近代建築調査委員会報告3」宝山寺客殿(獅子閣)

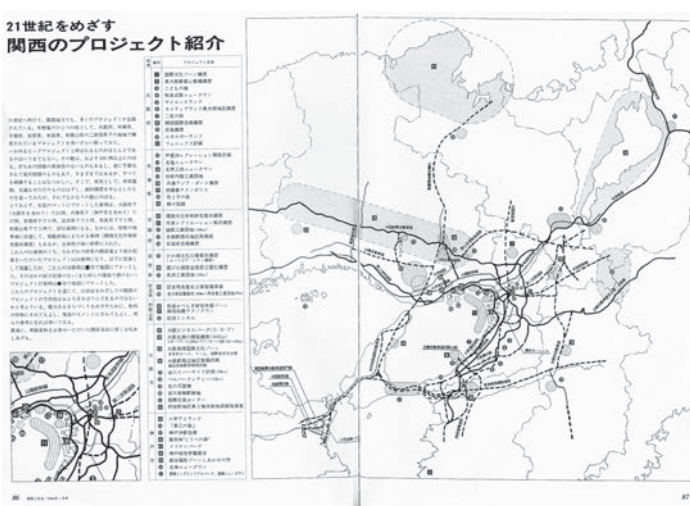


図12 「21世紀の関西」特集：21世紀をめざす関西のプロジェクト紹介

「GALLERY：まち・建築・ひと」が1985年1月号から巻頭に加わり、ひとつの建築を「作品」として紹介するようになる。こうした「作品」をめぐる建築デザインへの関心は、1986年6月号の「現代デザイン：ポストモダニズム10年」特集へとつながる。1985年に安井武雄や村野藤吾の特集が組まれたことも、モダニズムから一線を画した自由な建築への関心を示すポスト・モダン時代への応答であるとともに、東京を中心に均質化する建築界に改めて大阪のアイデンティティを示すものであっただろう。その機運は1987年の「創立70周年記念号」における向井正也による記念論文「大阪モダニズム変容の70年」および別冊写真集『大阪モダニズムの精華』（写真：東出清彦）にも見て取れる。

5 社会・世代をつなぐ：社会活動と表彰・懸賞事業

日本建築協会は、建築を社会へと開き、市民と建築をつなぐ活動も展開した。戦後復興期を経てこうした活動が充実し、やがて定着していった。

1950年代から住宅に関するカースライドを製作し、テレビ番組を企画してきた住宅委員会が、1964年（昭和39）から1981年まで開催した「よろず相談住宅展」もその一つである。年1回の同展は協会が派遣する相談員が市民から持ち込まれる住宅に関するあらゆる相談を応えるもので、マイホーム需要と相まって活況を呈した。

1969年には北浜の地下道に協会のショーウィンドを設置し、2～3カ月ごとに、「大阪の建築・今と昔」、「街を緑に」、「大阪にも超高層ビル時代」などの建築写真主体の企画展示を開催して市民にアピールした。ここでは1977年までに32回の展示を実施している。協会創立50周年事業「関西の建築50年回顧展」、

同70周年記念出版『住まいの絵本』（1986年）もこうした活動の延長に位置づけられる。

『建築と社会』では1982年8月号から連載「関西の昭和生まれ建築家」が始まり、1987年7月には登場した50名をまとめた臨時増刊号を発行するに至る（協会創立70周年記念出版）。若い世代に光をあてる一方で、熟達の建築家や設計事務所の特集が組まれたり、「大先輩に聞く」といった企画が登場し、世代を超えた交流を

後押しした。

1967年に協会創立50周年を記念して開催された「大阪城公園内に建つ休憩所のデザインコンクール」も、若い才能を世に出すこととなる。これは大阪城公園に実際に建設される休憩所を対象として大阪市の協賛を得て実施されたデザインコンクールで、当選を勝ち取ったのは事務所設立前の安藤忠雄であった（図13）。

日本建築協会の表彰・顕彰事業は若い世代を対象としてきたが、協会創立70周年を記念して1986年に創設された「日本建築協会賞」は個人や団体を広く対象とした。同賞は建築に関わるあらゆる分野において社会に貢献した業績を顕彰し、公共の福祉に寄与することを目的としたものである。第1回以来、数年ごとに日本建築協会賞と同特別賞を授与してきたが、受賞者とその業績の多様さは、分野横断的な日本建築協会の性格をよく表している。

小結

1960年代の高度経済成長は社会的・文化的な変動をもたらし、国家的イベントに向けて建築界は活況を呈した。都市化が進行するなかで、建築は技術革新に支えられて高層化・高密度化していくこととなる。しかし1973年（昭和48）の湾岸戦争を契機に石油危機が勃発し、1975年度に実質成長率が初めてマイナスを記録すると、石油危機が拍車をかけた建設資材の高騰と長引く経済不況によって建築業界は1980年代半ばに至るまで長い苦境を迎えた。

この転変の時代においても、協会は大阪に拠点を置く業界団体としての存在感を示し続けた。それは日本万国博覧会に関与したというだけでなく、時代に合わせて更新され続ける技術や法制度の共有を主導し、都市問題への機敏な反応をみせた点からも窺える。これはすなわち、各委員会がそれぞれに主導する出版物や『建築と社会』のコーナー連載、見学会、講習会などに象徴される堅実な活動の継続と集積の成果でもあった。業界の景況に沿うように協会の会員数も変動したが、会員間や協会内外との交流で会勢の維持に努めた。こうして培われた知見や人的交流が、関西建築界の成長を支えたのである。

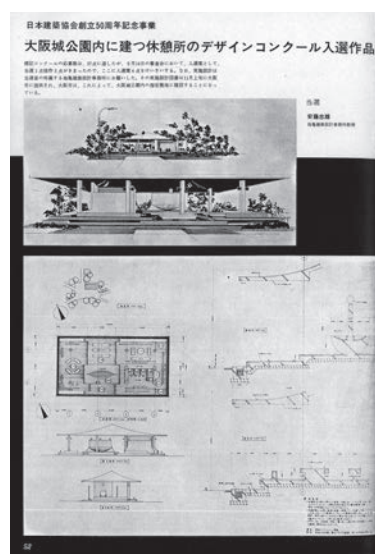


図13 大阪城公園内に建つ休憩所のデザインコンクール入選作品（安藤忠雄による当選作品）

第6章

20世紀末から今日まで

石田潤一郎

この章では、1980年代後半から現在までを俯瞰する。この時期の前半はバブル景気によって染められ、後半は平成不況と阪神淡路大震災といういわば現在進行形の問題によって規定されている。

1 好況下の建築

1973年（昭和48）からのオイルショック、1980年からの第二次オイルショック、1985年からの円高不況と、日本経済は低成長を余儀なくされてきた。1987年にいって、のちに「バブル景気」と呼ばれる——今となっては神話的な——好況が到来する。われわれはその結末を知っているのだが、その時代の人々は当たり前のことながら、目の前の好景気を素直に喜んだ。『建築と社会』1988年1月号に掲載された佐野正一会長による挨拶は、こう書き出されている——「何年かつづいた不況のなかで、建築界もさえない歳月を重ねておりましたが……内需拡大に転じて以来、住宅建設、公共投資をきっかけに……、建築界は今年しばらく遠のいていた明るい雰囲気を出したようがあります」。

この好況は建築界に二つの大きなうねりをもたらした。一つは、1970年代後半に知られはじめたポストモダニズムを広く具体化したことである。『建築と社会』誌上では積極的に取り上げられることは少なかったが、日本建築協会がこの趨勢から無縁だったわけではない。1988年5月から「話題建築を聞く」という講演会が始まるが、初回が「橋の博物館」（倉敷市）の上田篤、第2回が「りりぱっとはうす」の遠藤剛生、さらに8回目の「鰻谷チルドレンミュージアム」の若林広幸という作品の選択には、この時期の会員の関心のありようがうかがえる。見学会においても、たとえば安藤忠雄の「ライカ本社ビル」には287名が参加するといったところに時代の潮流を見ることができる。

好景気は一方で巨大プロジェクトを次々と実現した。見学会の対象を追っていくと、1、2年のうちに、神戸オリエンタルシティ、大阪ビジネスパーク、大阪花と緑の博覧会、関西新空港などが次々と実現していったことが確認できる。1990年5月には「東京話題建築見学会」が挙行されている。対象は都庁舎、日本電気本社、東京サレジオ学園など、今でも著名な6件で、あらためてこの時期の建築界の熱気を想起させる。

1994年から『建築と社会』誌では1年に1度、1作品1ページのスペースを用意して会員から掲載作品を募る企画を開始す

る。96年度に「私の建築作法」の特集名が定着して、今日に至っている。これは1980年代末からの「作家性」の重視の傾向が『建築と社会』の編集に反映した顕著な例であろう。

2 周年記念事業

1987年（昭和62）3月に創立70周年を迎えた時点では記念出版として『昭和生まれ関西の建築家50』『なっちゃんのたんじょうび』『住宅近代化への歩みと日本建築協会』を刊行している。『昭和生まれ関西の建築家50』に関しては第5章で触れているので、ここでは後2書について概略を述べたい。『なっちゃんのたんじょうび』は川村みづえ作の「住まいの絵本」である。『住宅近代化への歩みと日本建築協会』は1922年（大正11）に開催された住宅改造博覧会を中心とする歴史書である。「住宅改造博」は日本建築協会の初期における最大の事業であり、70周年記念事業として、その歴史を伝え、遺産を再評価する企画が立てられた。INAXギャラリーによる展覧会とともに、他の住宅博覧会を含めた収集資料を復刻し、論考と資料解題と併せて刊行したものである。

1997年の80年史記念事業はバブル崩壊の中で企画されたため、70周年に比べて簡素化が図られた。1996年に出版委員会委員の執筆による『先輩からのメッセージ——建築を志す人々へ』が刊行され、1999年に『日本建築協会80年史』がまとめられる。年史編纂は当初の企画にはなかったが、1996年末に略史編纂の方針が立てられ、長谷部朗郎委員長、坂本勝比古80年史資料研究会代表の下で執筆が進められた。1999年3月に刊行されたそれは235ページに及ぶ大冊となった。2007年の90年史記念事業としてはデザインアイデアコンペ「都市の魅力をつくる——中之島の将来を考える」を実施したほか、第7回「日本建築協会賞」表彰がおこなわれたが、出版企画は設けられていない。

3 顕彰事業・出版事業の継承と拡大

従来からの顕彰制度に加えて、2000年からは「読者と選ぶ『建築と社会』賞」を設けて、毎年、『建築と社会』誌に掲載された論考と作品からそれぞれ2～4点を選出している。

さらに創立100周年記念事業のひとつとして、2009年から、大阪のまちの活性化のアイデアを募る「大阪ええとこそうせい（創生）プロジェクト」を実施し、「大阪かくれたええとこ再発見コンクール」「そぞろ歩く御堂筋 提案コンクール」などを実施している。

日本建築協会の出版事業はさほど目立たないが大きな実績を上げてきた。戦前の『住宅改造博覧会出品図集』や『婦人の住宅知識』などにはじまり、1951年には出版委員会が設けられてい

る。1972年からは刊行を外部の出版者に委託することとなり、販路が拡大する。1978年には創立60周年を記念して「建築技術選書」シリーズが企画され、さらに1984年からは「プロのノウハウ」シリーズも加わって、今日まで100冊を優に超える書籍を刊行している。

なお、1991年から96年までに『建築と社会』の創刊号から1955年までが復刻された。全巻がそろっているのは協会事務局だけであったから、研究の便が一気に高まった。

4 21世紀の変革

協会の正会員数は1970年に5,757名に達したが、以後漸減し1980年代後半に入ると2,400名台まで下がった。一方で支出は膨らみ、1990年以降、毎年赤字を計上することとなった。この事態に1994年から会員の増加に努め、95年には個人会員数は1983年以来最大の2,672人、団体会員口数においては96年に2,160口と過去最高を記録した。しかし平成不況の長期化によって、2000年代に入ると会員数は急速に減少していく。2003年には個人会員数は2,000人を割り込んで1,836名となり、翌2004年には1,358名に激減する。その後も下げ止まることなく、2008年には1,000人を切るにいたった。団体会員も同様で、2001年には2,000口台を割り、2004年には1,444口まで下がった。

協会はこの退勢を傍観していたわけでは決してない。2000年に「協会21世紀を考える委員会」を設置して、金多潔委員長以下10名の委員に協会はどうかの指針を求め、その答申が2001年1月に示されると、それをどう具体化するかを考えるべく、同年6月に「21世紀の協会検討委員会」を発足させた。同委員会は2002年2月にホームページの創設や事務局体制の効率化などの方策を盛り込んだ答申を提出した。

この答申を受け、また会員数減少の状況に鑑みて、2004年には事務局を天満橋のOMMビルに移し、事業の大幅な改革をおこなう。さらに『建築と社会』誌の減ページを断行するなどして、コスト削減に努め、財政の縮小均衡を図った。これにより2005年度以降、収支は黒字を確保している。

こうしたなか、前述のように『建築と社会』誌の月刊発行、あるいは各種顕彰事業は着実に継承されている。また2007年には100周年に向けて「10年委員会」を設置して、社会に働きかける活動を立案・実践している。

むすびに

日本建築協会は1917年以来、一貫して「建築を通じて社会に貢献する」ことを使命としてきた。この100年は、日本の社会が根底的な変化を重ねてきた時代であった。建築は社会的な存在であるから、社会の変化に対応してそのありようを変えてい

く。建築はまた一方で自律した芸術／技術として、固有の展開を示す。日本建築協会はいわばこの三つの変数のただ中にあって、建築と社会の双方の望ましい姿を描き、導いてきた。

社会と建築の関係性はときには互いに共鳴して見事な成果を挙げ、ときには軋んで不毛の時代を招来する。そこにあって、日本建築協会は初期には先覚者としての提言と啓蒙にその方向を見いだした。戦後復興期から高度成長期にかけては、会員間において実践的な知識を整序して交換する機関としてその役割を果たした。20世紀末からは情報の交換と発信の舞台としてその存在を示し続けている。その歩みは社会と建築との関わりをどう取り結ぶか、その模索の軌跡であったと言ってよいのである。

その営みを推し進めたのは、本務のかたわら、退社後の時間を、あるいは休日一会務に捧げてきた無数の会員たちである。ここまで取り上げてきた100年間の事業、あるいは論考はそうした献身のたまものにはかならない。

第2部

座談会

回顧と展望——坂本勝比古先生を囲んで

出席者 坂本勝比古(神戸芸術工科大学名誉教授)

佐野吉彦(株式会社安井建築設計事務所代表取締役社長、日本建築協会元会長)

山形政昭(大阪芸術大学芸術学部建築学科教授)

司会進行 設楽貞樹(株式会社安井建築設計事務所常務取締役執行役員、日本建築協会副会長)

コーディネーター 和田康由(大阪市立工芸高等学校建築科教諭)

日本建築協会入会のきっかけ

設楽 本日は、日本建築協会（以下、建築協会とも表記）の歩みの一部を成していらっしゃる坂本勝比古先生を中心に話し合ってください。

まず坂本先生が日本建築協会の会員になられたきっかけ、当時どういう方がおられて、どういう方の影響を受けて入ろうと思われたのかといったことについて教えてください。

坂本 1955年（昭和30）ごろ、私は神戸市の職員をしていましたが、兵庫県営繕課長をしておられた光安義光さんという方と、現代建築のあり方について兵庫県とか神戸市でディスカッションする機会がありました。神戸大学に島田家弘先生、島田勝次先生、県庁には光安義光さんがおられて、私もいろいろ刺激を受けました。ひとつは、建築協会が1954年に始められて今も続けておられる青年建築家の顕彰というのがあって、恥ずかしいんですが、私も1957年に選んでいただきました。

そのあと、1959年1月に、神戸について書いてほしいということで、ちょうど私は神戸の近代建築の調査をしたり、保存にかかわるようなこともやり始めていたものですから、随筆のような形で、「神戸の街と洋館」という文章を寄稿しました。これが建築協会との最初のつながりでした。

佐野 日本建築協会に入られたころに出会った方、特に強烈なリーダーシップを持った方はどなたでしたか。

坂本 瀧澤眞弓先生という方が大阪市立大学におられて、神戸高等工業学校（後に神戸工業専門学校に改称、神戸大学工学部の前身）の先生もしていらっしゃいました。この方は1920年（大正9）東京大学を卒業して「分離派の闘将」と言われるほど活動した有名な先生でした。

山形 坂本先生は神戸工業専門学校を卒業されていますが、瀧澤先生の授業を受けていらっしゃるんですか。そのときからだとずいぶん長いお付き合いになりますね。

坂本 そうですね。建築論とか、ギリシャの神殿建築のこととか、若い者にはなかなかわからないような話、ユニークなお話

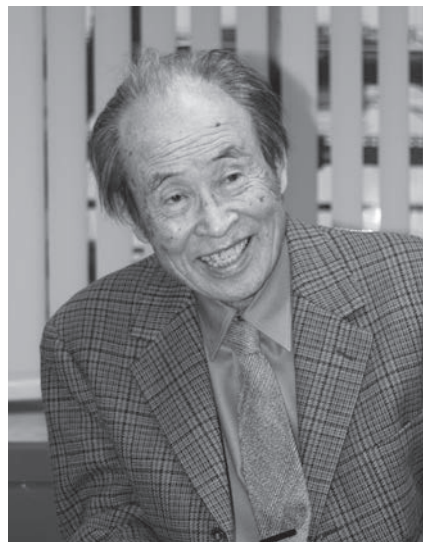
をいろいろ伺ったことがあります。当然、分離派のこともお聞きしました。

近代建築調査委員会

坂本 1959年（昭和34）

6月に日本建築協会が近代建築調査委員会をつくりました。私はこの委員会によって建築協会がたいへん意味がある活動をされていることを理解しました。

昭和30年代といいますと、戦争によって日本が大きなダメージを受け、敗戦で意気消沈していたあと、戦災復興とか高度経済成長と



坂本勝比古

いうことで、それを盛り返していく力が出てくる時代です。そうしますと、そのころせっかく残っていた近代建築——当時は「明治建築」といっていました——がどんどん壊されていくような時代に入りました。由緒のある建物が次々となくなっていくので、政岡基次先生が、何か記録を残す必要があるのではないかと建築協会のなかで提案されたのです。当時は建物を残すというところまでは踏み込めない時代でしたから、むしろ壊されるから記録だけは残したいというのが出発点だったと思います。そういう提案があって、瀧澤先生あたりが中心になって調査委員会を作ろうということになったようです。詳しいいきさは知りませんが、政岡先生の発案で、瀧澤先生などが関心を寄せられて発足したのが近代建築調査委員会でした。

山形 坂本先生がお書きになっていらっしゃる記録によると、瀧澤眞弓さんが委員長で、幹事のひとりが政岡基次さんです



向かって左から、前列（座っている）、近藤豊、今林彦太郎、瀧澤眞弓、後列、桐本楠雅、浅野清、坂本勝比古、堀口基吉、設楽貞三、岩崎甚太郎、作間日出生、政岡基次、山本潔、林野全孝、手島政男、内田成之の各氏（1959年頃、提供：坂本勝比古）

近代建築調査委員会委員名簿

瀧澤眞弓	神戸高等工業教授、大阪市立大学教授
足立孝	大阪大学教授
浅野清	大阪工業大学教授
池田宮彦	大阪建築事務所社長
今林彦太郎	大林組設計部長
岩崎甚太郎	大林組工務監督
内田成之	須賀工業常務取締役
置塩光	置塩建築事務所長
桐本楠雅	大阪市建築局長
近藤豊	大阪学芸大学助教授
佐野正一	安井建築事務所所長
坂本勝比古	神戸市建築局
作間日出生	大阪建築事務所顧問
設楽貞三	阪神土木工業
竹内成夫	大阪府営繕課
竹中清	不詳
玉置豊次郎	大阪工業大学教授
塚本猛次	日建設計工務常務取締役
波江悌夫	国鉄大阪工務局次長
西山卯三	京都大学教授
林野全孝	大阪市立大学
福田朝生	双星社竹腰建築事務所長
堀口基吉	大阪工業大学助教授
牧野忠	清水組大阪支店
政岡基次	政岡土地社長
元良勲	大阪工業大学教授
山本潔	山本窯業研究所社長
鷺尾九郎	竹中工務店監査役
渡辺道輝	渡辺建築事務所所長代理

ね。委員は、そのころの大御所の方から中堅の方まで、なかには佐野正一さんも入っているし、塚本猛次さんのお名前も見えます。26名という大きな調査委員会です。瀧澤先生は、昭和30年代の建築協会にとってもキーマンのひとりだったと思うのですが、どんな方だったのでしょうか。

坂本 瀧澤先生は小柄な方でした。私にとっては恩師ですから、めったなことは言えないのですが、非常に弁舌のたつ方で、理論派といいますか、痛烈なご批判もなさる方でした。うっかりしたことを言うと、「それは違うよ」とはっきり言われるような、ある意味で怖い先生でもあった。一方で、いろいろアドバイスや励ましをいただいたりということもありました。瀧澤先生は1920年（大正9）東大卒業ですが、同期の大正9年組に、京都大学の森田慶一先生、石本喜久治さん、のちに建築協会の会長をなさる尾崎久助さんなどがいらっしゃいました。これは偶然だと思うのですが、たとえば森田さん、瀧澤さんなど分離派の方が案外、関西にたくさんいらっしゃった。調査委員会には、当時大阪市大におられた林野全孝先生にも幹事で入っていただいていた。だから私は末席で、えらい先生がたくさんおられた。月に1回ぐらい委員会を開いていました。

設楽 坂本先生がまだ神戸市にお勤めのころですね。

坂本 そうです。でもあのころの官庁の営繕というのは設計もするし、工事監理もしますしね。

設楽 光安先生を代表として、とても力のあったころですね。

坂本 兵庫県庁舎（1966年）も光安先生が中心になっているんです。私は近代建築委員会には毎回出席させていただいていました。浅野清先生は日本建築史の大家で、大阪市大におられました。大林組からは今林彦太郎さん、岩崎甚太郎さんなど古参の

方々です。須賀工業という設備関係の会社の内田成之さんも参加していただいた。それから、大阪市の桐本楠雅さん、佐野正一先生、設楽さんのお父様にあたられる設楽貞三さん、日建設計から塚本猛次さん、波江悌夫さん、西山卯三先生、当時とすると錚々たるメンバーでした。渡辺節さんのご子息の渡辺道輝さん、竹中工務店の鷺尾九郎先生もおられました。元良勲さんは大阪の橋梁の関係をやっておられた。大林でも竹中でも、トップクラスの方々に参加していただいていた（委員会名簿参照）。

佐野 当時、建築協会の中で近代建築調査委員会はきわめて重要な意味を持っていたということですね。ほかにも委員会はあったと思うのですが。

坂本 近代建築調査委員会はずっと続くかと思っていたら、瀧澤先生は、常設の委員会としてではなくて、あくまで時代の必要にせまられて作られた委員会だから、ある一定の成果を挙げたら、それで一応の区切りにしたらどうかということで、昭和40年に終わりました。

貴重なアーカイブ

佐野 調査をされて、みんなで解説していったのですか。

坂本 委員会のときはいろいろ資料を持ち寄って報告していました。私とか林野先生とか、若い人がおもに調査するほうにまわって。あまりお若いんですけど、近藤豊先生も調査メンバーにおられました。社寺などの古建築の研究で有名な先生で、細部意匠について明るく、本もたくさん出している。近藤先生は大阪の学芸大学（現大阪教育大学）の先生でした。

当時、私は、西宮の辰馬さんの本邸（旧辰馬喜十郎住宅、1888年）とか、神戸の下山手にあったカトリックの教会（1910年）などについて発表しました。大阪（帝大）、京都（帝大）、金沢四高（現金沢大学）、五高（現熊本大学）、富士銀行大阪支店などを取り上げました。

設楽 これは委員会の報告として、毎月『建築と社会』に載った時期があるのですか。

山形 1960年（昭和35）1月から5年間、1965年2月まで62回の記録があります。連載終了とともに委員会も閉じているようです。1967年に建築協会は創立50周年を迎えますが、その直前までこの委員会の活動があったわけです。

佐野 これは貴重なアーカイブですね。

坂本 私はもう少し続けてもいいんじゃないかと思ったんですけどね。瀧澤先生にも旧兵庫県庁舎などを発表していただきました。神戸の関係は、だいたい私が受け持つことが多かった。

山形 金沢の学校までありましたけれど、関西の建築というよりもっと広いようですね。関東のほうもありましたか。

坂本 関東は遠慮していたというか、少なかったですね。私は鹿児島島の集成館（1865年）を調べに行ったことがあります。奈良の奈良ホテル（1909年）とか。こういうのはわれわれが調べて報告すると、年配の先生方はたいへん興味をもってくださった。鷲尾九郎先生も、昔、京都銀行本店を竹中が手がけたということで、貴重な写真と資料を提供してくださって、原稿も鷲尾先生がお書きになりました。

設楽 いま建築協会の100周年を前に、山形先生を中心に近代建築の再読というシリーズをやっていますけれど、その元祖みたいなものですね。

坂本 まさにそのとおりですね。

「郷土建築」

佐野 それまでは近代建築をきちんと調査しようという動きはなかったのですか。

坂本 それがあったんです。1930年（昭和5）から31年に「郷土建築」というテーマでやっておられます。昔、鰻谷にあった住友さんの洋館（住友家本邸）とか、神戸の居留地の赤レンガの洋館建物とか、東大の建築を出て、住友の竹腰建造さんや長谷部鋭吉さんの下におられた高橋栄治さんなどが執筆しておられました。天王寺の茶臼山のところにある慶沢園という住友家の日本庭園なども当時紹介されていました。それが続いていたら、さらに記録がいろいろ残ったと思うんですけど。

山形 「郷土建築」という捉え方は、名称からしてユニークだと思います。地域と時代を代表するようなものに眼を向けようという趣旨の座談会が建築協会で行われ、その記録が1931年5月に『建築と社会』に掲載されています。

坂本 鴻池さん（鴻池善右衛門家）の民家のほうも対象になっていたんじゃないかな。建築協会で年に1回か2回、京都や地方の名所旧蹟の見学と親睦会が行われていました。東京の近代建築の調査は、東京の各大学が扱っていました。

設楽 東京は各大学がばらばらにやっている。建築団体が主として取り組んだのは建築協会だけだったんじゃないでしょうか。

坂本 神戸の異人館が壊されていくのでそれを保存しようということで、新聞種になったことがありました。たまたま私が集めた資料がたくさんありまして、それなら特集を組もうということで、1961年、『建築と社会』2月号に掲載されました。これは瀧澤先生が「居留地建築特集号によせて」という巻頭言を書いてくださった。

設楽 どんどん壊されるから、神戸新聞もキャンペーンをはったりしていたころですね。

坂本 ハッサム邸（1902年）という異人館が、神戸元町の山手にある相樂園に移築保存されていますが、こういうのが残った。委員会から見学に行ったこともあります。だから、近代建築の調査がもっと続いていれば、もっと発掘できたかもしれません。これを東大の稲垣栄三先生——歴史の有名な先生で、亡くなられたんですけど、それと都立大の名誉教授をしておられる桐敷真次郎先生と、特別に神戸の異人館の位置づけを『建築と社会』に発表してもらった。異人館というつつない建物のように思われがちですが、長崎ではグラバー邸がよく知られていました。神戸や横浜は明治建築としてほとんど知られてなくて、当時の日本建築協会の意気込みというか、請負会社でも上の人がメンバーに入ってくれていましたから、竹中でも大林でも、協力的でよかったと思います。

佐野 たしかに、いまの特集号のお話を伺っても、ただ集めるだけではなくて、ちゃんと歴史的な位置づけをしたのがすばらしい。ある種、社会的責任感のようなものが感じられますね。

設楽 そういう雰囲気にあたることで、建築協会の活動にどんどん入っていかれたのですね。

住宅改造博覧会

山形 住宅の向上をめざす運動が、日本建築協会の創立のころからのテーマとしてありました。それはしばしば坂本先生もお書きになっていらっしゃいます。日本建築協会には、そのころの関西において郊外住宅を広げていく事業に積極的に関わっていったという功績がありますね。

坂本 これは和田康由先生もお調べになっていると思いますが、1922年（大正11）の秋に箕面の桜ヶ丘で住宅改造博覧会が開かれます。ちょうど同じ時期に、東京の上野で平和記念東京博覧会が開かれ、そこでも住宅の展示をやったんです。でも、上野の場合は、20～30坪の、いまでいう住宅展示場のような形でし

た。建築協会が桜ヶ丘でやったのは、そこに実際に住んで生活できることを前提にした住宅展示ですから、規模もはるかに大きく、設備も整えていて、基本的に違ったわけです。

開会式には、当時の内務大臣後藤新平が来られました。みなさんに非常に関心をもってもらった展覧会で、その報告書もありますけれど、7万余の人が見学に訪れています。

これについては、片岡安（日本建築協会設立の中心人物）さんが自分のポケットマネーを出したり、各建設会社に寄付金を募ったりしました。ある人は、「まだ出してないか」と言われたこともあったそうですが、片岡先生にしたら、お金を集めて事業をやりたい、そのために自分もかなり高額のお金を出されている。これも建築協会でなければなしえなかった大きな事業でした。しかも平和記念東京博覧会は、東京府が主催し政府が後押しした、いわゆる官営の展覧会で、こちらはみなさんが協力し合って開催した、まったく民間の力でやった展覧会でした。

設案 大阪はもともと民の力が強くて、橋なども官営の橋は少なくて、という時代もありましたからね。

坂本 桜ヶ丘の住宅改造博覧会はいまも残っている建物があって、当時の住宅が近代化、改良するためのステップとして、大きな役割を果たしました。

山形 建築協会創設から5年後に大きな住宅博が実現しているのですね。当時25棟の住宅を建て、いまでも7棟が残っている。建物としては7棟ですが、特色ある住宅地景観が残されていて、関西での郊外住宅の原点のような遺産になっています。

坂本 このあと、大美野などで建築協会がバックアップして住宅展を開いていますが、そのさきがけになりました。しかもそのとき建築協会は住宅のコンペティションを何回か開いて、若い建築家のたまごみたいな人に参加してもらうことで、かなりの成果を上げました。いまでも工業高校生のコンペ（「工高生デザインコンクール」）をやっておられますが、こういう事業なども意味があったと思います。そして企業や個人から協賛金を得て、建築協会の事業として大きな博覧会をして、しかも黒字を残している。住宅の改良や近代化に、建築協会が非常に努力を払っていることは、そういう実績をみても明らかです。

田園都市

坂本 私は前に田園都市について書いたことがあります。建築協会は建築と同格に、むしろそれ以上に、都市問題、都市計画に対して関心がありました。そのひとつに田園都市という発想があります。イギリスのエベネザー・ハワードという人が田園都市、ガーデンシティという構想を打ち出して、それが世界に大きなインパクトを与えたのです。イギリスに行きますと、レッチワース、ボーンヴィル、ポート・サンライトなど、いろいろなところに田園的都市がある。中にはインダストリアルビ

レッジ（工業集落）というところもありますけれど。

日本に都市計画という概念があまりないころ、田園都市問題がクローズアップされてきたときに、大阪市長の^{せきはじめ}關一さんや片岡さんがかなり関心をもっておられた。それで建築協会ができてからは、特集のなかで何度も田園都市問題が出てくるんです。**設案** 「^{だいいおさか}大大阪」のころですね。坂本先生の書かれたものを拝見すると、片岡安もそういった貢献をしているはずですし、關市長とのある種のコラボレーションがあったように言及されているところもあります。

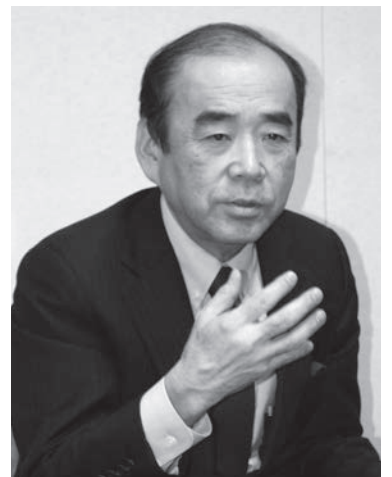
坂本 關さんは1914年（大正3）に、高級助役で大阪市に赴任されます。彼はその前にベルギーに留学していますから、ヨーロッパの事情にも詳しく、交通政策がご専門だったようですが、田園都市のこともよく知っておられた。英語では「タウンプランニング」ということばはあたりまえに使われるが、日本では「タウンプランニング」というと、どういう意味だろうと首を傾げられる時代でした。

設案 ことばも概念もなかったでしょうから。

坂本 結局、人間が生活していくうえでいかに楽しい環境をつくるかということが、建築協会の活動の主流としてあるわけです。そういう精神を、次の100年に向けて持ってもらえるようになればいいと思います。ガーデンシティという思想はものすごくむずかしい。誰でもすぐに飛びつける問題ではないけれども、これからも建築協会としては、人間が住むうえでの理想的な環境なり仕組みなりをつくっていく工夫をして、われわれの先輩たちが悩み、そして試みてきたスピリットを伝えていく、そういう方向に向かっていってもらったらいいいと思います。それをどういう形でつぎの100年に向けてつなげていくかは簡単ではないと思いますが。

片岡安先生の存在

佐野 日本建築協会はすべりだしのときから、片岡さんの思いや問題意識があって、住宅の改良とか、都市のインフラをきちんと作ろうとしていた。ある意味では、片岡さんが推進した、当時の市街地建築法を全国に適用する運動とか、並行してやっていたロータリークラブの設立とか、のちに大阪工業大学を作ったりするところに、いろいろな社会的な問題意識が投影されているなと感じます。



佐野吉彦

坂本 おっしゃるとおりで、1936年（昭和11）に『建築雑誌』で建築学会の50周年記念座談会が開かれています。これは東大の総長までされた内田祥三さんはじめ、佐野利器、桜井小太郎、塚本靖、山下壽郎さんなど、当時としては錚々たる人たちが集まっていますが、その中で内田さんが片岡さんのことに触れておられます。都市計画法ができる時の話として、「この都市計画に関する事項が最も重要なものであり、また最も成功を収めたものだと思います。……この運動の先達をつとめられた片岡博士は、わが国建築界における最大の功労者のひとりとして、常に私どもが尊敬いたしているのであります」と。

設楽 関西発でそれだけ名をはせたということですね。

佐野 片岡さんはもちろんそういう問題意識は強かったけれど、後藤新平さんとのつなが

りとか、法案をつくるための政治的な推進力もあった方の方ですね。

設楽 ある意味で政治力があった。

坂本 片岡さんは後藤さんを口説いているんです。だからさっき話した展覧会のときもわざわざ開会式に来ている。自ら著した『現代都市之研究』（1916年）を後藤さんに贈り、直接会って口説いたと語っています。

山形 さきほども話されましたが、建築協会を背景に片岡安が活躍して、關市長と車の両輪ようになって都市計画を策定し、それを法案化するのに後藤新平も動かしていったという構図だったのです。片岡さんと關さんとは片岡さんが年長なんですか。

坂本 關さんは1873年（明治6）生まれで、1935年（昭和10）に亡くなっています。片岡さんは1876年（明治9）金沢生まれで、1946年（昭和21）に亡くなりました。片岡さんのほうが3つ歳下ですね。

佐野 大阪ロータリークラブ設立のころの写真をみると、片岡さん、關さんがおられて、加島銀行の星野行則さんがおられたり、大阪ガスの片岡直方さんがいたり、だいたいいっしょにいろいろな活動に取り組んでいるという感じがしますね。

坂本 私はある講演会で、片岡さんのことを「華麗なる人脈」というテーマで話したことがあるんです。これは大阪役所を建てたときの写真ですが（上の写真）、片岡さんが真ん中におられる。この写真は今林さんからいただいたものです。左側の建物は控訴院です。今林さんの話だと、片岡さんはものすごく親分肌の人だったようです。お盆だから田舎に帰りたいので2、3日暇がほしいと言ったら、「お前、お金がなかったら田舎に帰



大阪市庁建築現場にて、大正8年夏。前列向かって左から、山形、牛村、渡辺、片岡、末沢、白石、小谷、櫻井、後列左から永野、吉田、今林の各氏（提供：坂本勝比古）

っても困るだろう」と言ってポケットマネーをくださったとか（笑）。これはいろんな人にあげておられたようです。

設楽 リーダーシップが非常に強いから、小さな会合ではほとんど片岡さんがしゃべっておられて、みなさんは「あー、あー」というだけだったと聞いたりします（笑）。

坂本 好かれる人とそうでない人とおられたかもしれませんね。たいへんこわい一面もあったようです。

設楽 いずれにせよ、建築協会の創成期に、ゼロからいまの形を作った方ですね。

坂本 関西における近代建築史の研究やその発展について振り返ると、ずいぶん大きな足跡のあったことを認識することができます。その一つとして取り上げられるのは、近代の関西建築界活動の全貌を余すところなく紹介された大部な著作『近代建築画譜』の存在です。この著作は当時の関西建築界が総力を挙げて取り組んだと思われる膨大な内容のもので、1936年に刊行されたこの書は、A4版全540ページにわたり、写真と解説文のほか、主要関係業者紹介欄もあって充実した内容の大著となっています。

この書の編集顧問に武田五一のほか、鷺尾九郎（竹中工務店理事）や今林彦太郎（大林組理事、設計部長）の名前があがっております。今林さんは、先に述べた日本建築協会が取り上げた瀧澤先生の近代建築調査委員会のメンバーとしても、たいへん熱心に取り組んでおられたことが思い出されます。私の手元にある手書きのメモには、今林先生が調べられた近代建築のリストが記されています。今林先生は東大建築学科を1915年（大正4）に卒業し、片岡安の下で大阪市庁舎（1921年）の建築に携わったのち、大林組に移られた経歴の持ち主です。大正中期より長きに

神戸三宮郵便局	大正5年12月	復興式風の郵便局	鉄筋5階建
神戸大学文科部図書	3.3	復興式	鉄筋2階建
同志社女学校図書	2.3	近世式	鉄筋2階建
三井銀行本部支店	3.12	復興式 (鈴木禮次)	鉄筋2階建
十五銀行柳川支店	2.7	復興式	鉄筋2階建
川崎重工業銀行本部支店	3.5	復興式 (矢部?)	鉄筋5階建
三和銀行本部支店	3.4	復興式	鉄筋5階建
近江銀行本部支店	4.5	復興式	鉄筋2階建
朝鮮銀行大阪支店	4.12	復興式	鉄筋3階建
三井銀行大阪西支店(河)	5.6	復興式 (横河松井)	鉄筋2階建
三井銀行本部支店	5.11	復興式 (近野)	鉄筋2階建
朝鮮銀行本部支店	5.10	復興式 (近野)	鉄筋3階建
大阪海上ビル	1.10	復興式 (大木)	鉄筋3階建
大阪教育生舎	1.8?	復興式 (尾崎仲田)	鉄筋2階建
安田生命大阪支店(東区)	2.1	復興式	鉄筋3階建
大阪時計店	4.2	セセツ式 (豊田)	鉄筋5階建
豊田大造(豊田)	4.8	復興式 (豊田)	鉄筋2階建

今林先生作成のリスト(部分、提供：坂本勝比古)
このメモはのちに『近代建築画譜』編集の原点となった。

わたって日本建築協会の活動に少なからず貢献された方だと思っています。

竹腰健造先生の功績

山形 坂本先生、歴代の会長のことをもう少しお話いただけますか。たとえば50年前の東畑謙三さんや塚本猛次さんはもう歴史上の人物になっておられまして、私たちには資料にある以上は分かりません。先生はじかに交流していらっしゃるの、それぞれのお人柄などをお聞かせいただければありがたいです。

坂本 私が申し上げるのはおこがましいのですが、私は竹腰健造先生にいろいろな意味で親しくお付き合いいただき、ご指導をいただいた覚えがあります。片岡さんが亡くなったあと、たまたま副会長でおられた竹腰先生が受け継ぐんですが、日本建築協会はいい後継者を得て、戦後のいちばん大変な時期を乗りこえることができました。竹腰先生の功績は片岡先生と並ぶぐらい大きかったんじゃないかな。幸い『建築と社会』で竹腰先生の業績や人柄について特集しておられる(1959年1月号)。それに尽きると思います。

竹腰さんは夙川に住んでおられて、私は個人的にも、夙川で竹腰先生が設計された住宅をいくつかご案内いただいたり、新大阪ホテルでご馳走になったりしました。私は住友のことをいろいろ研究していたこともあって、親しみを感じていただいたのかもしれない。竹腰先生は本もいろいろお書きになって、お能とか陶芸にも造詣が深かった。たいへんご長命でした。

佐野 竹腰さんと村野藤吾と佐野正一は93歳まで生きています。

坂本 塚本さんにしても、中井進さんや香西喜八郎さんにしても、私は佐野吉彦さんのほか、最近の方はほとんど知らないのです。東畑先生は住吉で近くにお住みだったので、何度かお伺

いしたことがありました。塚本さんは、最近も日建さんのことでいろいろお尋ねしたことがあったので、存じ上げています。佐野正一先生が安井建築設計事務所であげられた大阪ガスビルの増築(北館)はすばらしい作品で、さすがだなと思っています。市川宏さんも東畑謙三さんが始めた事務所を着実に発展させておられます。金多潔先生は京大の先生をしていらしたので、いろんな意味で存じ上げておりました。佐野吉彦さんは若手ですが、がんばってここまでこられた。みなさん、いろいろな意味で日本建築協会のためにがんばってこられた方で、100周年で顕彰してさしあげたらどうかと思います。

安井武雄と大阪ガスビル

坂本 今日は佐野さんにぜひ教えていただきたいことがあります。ひとつは、安井武雄さんが1919年(大正8)に片岡事務所に呼ばれて満州から帰ってこられて、その後、1924年に独立して野村さんのビルなどをやられたなかで、1933年(昭和8)、御堂筋の大阪ガスビルを建てたときのデザインのコンセプトについて、お父様の正一さんから何かお聞きになっていらっしゃるませんか。実際には安井武雄にお会いになってはいないようですが、それが山口廣先生の本(『自由様式への道——建築家安井武雄伝』)にも十分紹介されていないんです。もうひとつ、安井武雄さんのこういう趣旨でやったというようなことで何か聞いておられることがあれば教えていただきたいと思います。

佐野 詳しくは聞いていませんし、安井武雄もはっきりとは述べなかったのではないのでしょうか。山口先生もずいぶん探されたのだと思いますが。

同時期に東京・日本橋の野村ビルディング(1930年)では全然違うデザインをしていますから、思うところはあったはずで。当時の野村證券は新興の株屋さんで、大阪ガスはベンチャー企業です。それぞれの建築が新しい時代のともし火になるように考えたはずで。ガス会社だからガスのともし火になるわけで、照明については特に大事にしたいと安井武雄は言っています。これからの近代産業にふさわしい本社ビルをつくらうとしたときに、モダニズムというスタイルを適用させたのではないかと思うのです。

アメリカへ行って、各地を訪ねているときに、たとえばシカゴのカーソン・ピリー・スコット百貨店(1904年)、フィラデルフィアに出来上がったばかりのPSFSビル(1932年)とか、ああいう流線型を宿したデザインに大いに刺激を受けているでしょう。

坂本 安井さんがアメリカにいらっしやったのは大正の終わりのくらいでしたか。

佐野 まず、片岡事務所にいたときに行っているんです。

坂本 川崎病院の計画をアメリカの建築事務所といっしょにす

るときに行かれたように聞いています。

佐野 1921年（大正10）前後です。

坂本 満州から帰ってこられてまもなくですね。

佐野 ガスビルのときにも1回行っています。ガスビルの設計を始めるころに、大林組の大林芳五郎さんとか、須賀商会（現須賀工業）の須賀豊治郎さんと一緒です。当時としては経験の少ない高層ビルでしたから、軟弱地盤にどう建設するか、オーチスのエレベーターをどう設置するかなど、一緒に研究したのかもしれない。もっともデザインイメージはその時点ではほとんどかたまっていたかもしれませんが。

坂本 ガスビルは、大阪だけの問題ではなくて、日本のモダニズム建築のなかで、非常に高いレベルにある建物だと思いますね。大阪倶楽部（1924年）を拝見すると、クラシックなモチーフがたくさん出てくる。あれからガスビルに転換するときのインスピレーションみたいなものがあつたのだろーと思います。大阪ガス前後は新しい味の素ビル（1932年）とか南満州鉄道の社屋（東京支社、1936年）とか、モダンなものに変わっていつていきますけれど。

山形 建築協会に関連することですが、安井さんは日本インターナショナル建築会に参加していなかったと伝えられていますね。そのなかでガスビルが出来上がる。インターナショナル建築会の方もかなりびっくりした“事件”だったようですね。

設楽 いままでの流れからするとつながらないので、びっくりされたと思います。ガスが育むモダンリビングというのは、クライアントとしてのガスのほうからも何かあつたのではないかと私は想像するんです。かまどでご飯を炊いていた生活からいきなりガスコンロに大転換するわけですから。ガスビルは1階、2階のショールームも外から見えやすいようにしつらえたという形跡が、いまでも見てとれます。そういうものを大阪の市民にアピールするという建物の使命があつたんだと思うのです。それで、いままでのクラシックではなくて、新しいモダンな生活を体現することが必要だった。

坂本 あの建物の設備も新しいものをいろいろ取り入れておられると聞いています。

1970年代から80年代

山形 1970年代から80年代にかけて、建築協会は塚本猛次さんから佐野正一さんにバトンタッチされています。当時は、大阪のまちのなかで、大阪国際ビルディング（1973年）と大林大阪ビルディング（1973年）のツインのビルが出現したり、ロイヤルホテル（現リーガロイヤルホテル）の新館（1973年）ができるとか、いままもランドマークになっているものができました。80年代後半に入ると、関西国際空港が着工されるという時期になってきます。

そこで佐野さんにお伺いしたいのですが、そのころの建築協会の活動で印象的なことを、佐野正一さんはどのように話しておられましたか。

佐野 その時期は、私はまだ日本建築協会のことをあまり知らなかったのですが、佐野正一には、朝食会である建築クラブなどを通して、建築にかぎらず、い



山形政昭

ろんなテーマをみんなで語

りあって、関西の建築界をもう一回結びなおそうという思いがあつたようです。

設楽 けっこう幅広くやっていましたね。私もまだ若かったので、あまりよく知らないのですが。一種のサロンのような動きも含めて、もちろん論文・論考みたいなものは重視していたと思いますが、せっかくある親睦団体だから、しっかり横のつながりをもとうという意識は相当もつていたと思います。

佐野 坂本先生がさきほどおっしゃった工業高校生のコンクールは1955年（昭和30）に始まって、いまでも続いています。青年技術者の顕彰も1954年に始まって、日本建築協会賞が1986年からですね。昭和のはじめの住宅コンペとは内容が違いますけれど、そういうコンペとか顕彰制度はずっと続けていると思います。

坂本 淀川製鋼所がいま保存管理しておられる芦屋の山邑邸（ヨドコウ迎賓館、1924年）も建築協会賞を受賞されたんですね。

佐野 当時始まった顕彰制度を受け継ぎながら、いままも建築協会は「大阪ええとこ創生プロジェクト」を始めたり、大阪の建築4団体（日本建築協会、大阪府建築士会、日本建築家協会近畿支部、大阪府建築士事務所協会）で東日本大震災を乗り越えるアイデアを募集したりして、切れ目なく、かついろいろな角度から取り組んでいる感じがします。

日本建築協会は大事な語り部

坂本 名古屋とか中国地方とか各地の支部はいまも活動しているんですか。

設楽 活動しています。ただ、いまは名古屋の東海支部がいちばん活発で、あとは京都支部と広島中国支部だけになってしまいました。そんななか、東海支部は独自の環境のなかで、大阪と連携しながらとても活発にやってもらっています。中国と京都は母体の会員数が少ないものですから活動がしにくいところがあります。

坂本 山形先生や和田先生といっしょに『日本建築協会80年史』の編集や執筆をさせてもらったとき、日建設計の長谷部朔郎さんが編集委員長をしておられました。自分が関係していたから言うんじゃないんですが、この『80年史』はいい内容で、当時の会長さんだけではなくて、役員をしていた方をみな紹介しました。



設楽 貞樹

こういう記録はたいへん貴重なものだと思います。

設楽 今回100周年記念誌を出すときも、『80年史』なくしては成り立ちませんので、データのものはCDか何かにして、100周年史に添付する形にしたいと思っています。

佐野 人物をもっともういっぺん建築を語らせるというのはおもしろいですね。

大阪に建築の4団体がありますが、他の団体はみんな、日本建築協会の歴史の半分以下なんですね。どういうふうに関西の建築界が移りかわっていったかということを知る上では、日本建築協会は大事な語り部になっています。そして、日本建築協会以外の3団体は、ある種の目的を達成する、行動する団体みたいなところもありまして、建築協会は基盤を作るということで、ちょっと目的が違うかなと思います。

新しいフェーズに移るために

設楽 100周年を迎えまして、日本建築協会はこれからどういうところにポイントを置いて、新しいフェーズに移ればいいのかということをみんなで模索しています。それについて、大先輩でいらっしゃる坂本先生にご提言がありましたら、ぜひ聞かせください。

坂本 建築界で日本建築協会は関西にあるという点で非常にユニークな存在です。関西中心だから、全国的にはあまり知らない人も多いと思うんですけど、もうちょっと参加したことにメリットがあるというか、入っていてよかったと思われるようなことができれば、魅力が保てるかなと思います。

設楽 若い世代の人にどういうところに魅力を感じていただけるかな、と思います。先生が今日、最初におっしゃったように、若い人でも何か寄稿して載る、発表の場のようなところがあるということは非常に意味があるのではないかと思います。

坂本 私は最初、私が尊敬する人で、いろいろお世話になった方から、こういうのがあから何か書いてみないか、こういう

のに入ってみないかとアドバイスをいただきました。建築協会のことを知らない人が多いわけですから、ある程度存在感がある方から、若い人たちに声をかけて参加してもらえる機会をつくり、参加したらいいことがある——という語弊があるかもしれませんが、自分にとって参考になることがあると思うから、というふうな誘いがあったら、乗ってもらえるんじゃないかな。われわれの時代とは違うかもしれませんが。だから工高生のコンペなどもいいし、見学会もいい。ときどき機関誌に出ていますけれど、いろいろな建築の講習会もやっておられるんですね。そういう裾野を広げる工夫があったほうがいい。100年の伝統はあまりにも大きい。しかし、それにあぐらをかいていたらいけないので、また初心に戻ってやっていかないと。

設楽 ほんとうにそのとおりです。いま、「U-35」といって35歳以下の集まりができていまして、彼らはこの人の話を聞きたいという人を自分たちで呼んで話を聞いている。35歳以下って日々の仕事が非常に忙しい。それをけずってでも出てきてくれています。そうすると、ゼネコンにせよ、設計事務所にせよ、同じような世代で、同じような悩みをかかえながら働いている。その悩みが共通していることに気づいたり、その中でディスカッションをしたりできる。そういう場を提供することには意味があると思うのです。

坂本 会員同士がコミュニケーションできるような機会があったほうがいいですね。ポツンと孤立して存在しているのではなくて、自分が存在していることをみなさんに知ってもらえるような機会があるほうがいい。

設楽 同じことで悩んでいるんだとか、そういう考え方があるんだという発見をする。冒頭、錚々たるメンバーのなかで刺激を受けられたというお話を伺いましたが、そんな場を提供できればいいなと思っています。

佐野 先生も最初、日本建築協会に入られたときは神戸市の職員でいらっしゃいましたが、ほかの団体と違って、建築協会はいろいろな組織に属する人がいて広がりがある、しかも対等です。日本建築家協会も建築士会も建築士事務所協会も、入会は専門資格者に限定されているわけです。

坂本 横のつながりがあることも大事ですね。

設楽 U-35主催のグループが主催しているアイデアコンペで、そういう動きもあります。

山形 『80年史』に市川宏会長の序文がございます。それを見ますと、これまで50年、60年とやってきたけれども、80年に際して、草創期のことを実際に知っている方からだんだん話が聞けなくなってくる。80周年のいまから歴史の資料をまとめておく必要がある、とあります。そこで坂本先生にお願いして、80年史史料研究会を立ち上げていただいて、記念誌において「草創期のひとたち」が収録されています。その後100周年に向けて、衣替えした史料研究会で企画した「再読・関西建築」とい

う連載記事を、100周年記念誌の一部に加えていただくことになっています。

100周年の後も、関西の建築をたどっていくことが、建築協会の活動の役割のひとつと思っています。坂本先生はいつも「100周年のあとはどうなるんだ」と言われますが(笑)。

設楽 みなさん、そうおっしゃり始めているので、100周年事業の責任者としては強く責任を感じます。つぎのフェーズに移らないといけない。もちろん、そのためには、いままでやられてきたことと不連続にするつもりは全然なくて、うまくつながりを持ちながら、新しい要素もそこに加味していく。それでは何をするか。さっき言った若手の活動も新しい要素かもしれませんが、それ以外にもないだろうか、ということです。日本建築協会は大阪で生まれて、大阪でやっているんだから。たとえば近年大阪の都市イベントとして定着した感のある「生きた建築ミュージアムフェスティバル」に建築協会として連携していくことによって、建築の専門家以外にも活動の幅を広げていくことができると考えます。

佐野 これは橋爪紳也先生が中心となって動き出し、運営形態を変えながら4年続いてきた。大阪の近代建築も現代建築も幅は広いですけど、ふだん覗くことのできない建物の中をガイドつきで見学できたり、建築をめぐるトークがあちこちであったり。全国的にも有名になりました。毎年10月の末にやるパターンが定着しましたね。

設楽 参加されているのは、もちろん建築に関係している方もたくさんいらっしゃいますが、一般の方のほうが多いくらいです。ガスビルなんか長蛇の列でした。近代建築もしくは建築に対する一般の関心が広がっているように感じています。

一般の人にも門戸を開いて

山形 昭和30年代には、社会に向けて展覧会の類とか、よろず相談会などが非常に盛況だったというニュースが『建築と社会』に載っていますが、現代は一般の方に向けて発信していくという可能性はどうか。

設楽 あるんじゃないでしょうか。あとはわれわれのパワーの問題でしょうが。でないと、社会貢献ができませんよね。

佐野 10年くらい前に、竹中工務店の松隈章さんたちといっしょに、阪急電鉄との共同企画で、近代建築を見るツアーを企画しました。あれは先駆的な取り組みでしたね。

設楽 坂本先生にも講師になっていただきました。

佐野 一般の方も、参加してみたら建築の専門家のいい解説が聞けたと言っておられました。建築協会単独では事業成立がしんどいけど、企業や建築外の団体とタイアップすれば、いろいろな可能性が生まれる。それぞれにメリットが生まれるように横つなぎすると、いろんなおもしろいことができそうです。

坂本 たいへんいいことだと思います。われわれはプロの人たち同士で話し合うことが大事みたいと思うけど、住宅相談とか建築相談とか、もっと一般の人に門戸を開いて、親しみを感じてもらえるようなことも必要でしょうね。いまはそんなことをしなくても、べつの団体がしているかもしれませんが。一般の人の、家を建てたいんだけどどうしたらいいとか、いろいろ建築についての相談にのるような企画は難しいですかね。

佐野 そういった相談は団体によって切り口が違ってくるといます。日本建築家協会なら、建築は建築家に頼みなさいという話になっていくでしょう。でも必ずしもそうじゃなくて、普通に建てたいという人もいるかもしれないし、あるいは土地を利用して効率的なマンションを建てたいという人は建設会社に相談するほうがいいのかも。切り口をどう設定するかによっていろいろなやり方があると思います。

私が建築協会に注文したいのは、たとえば工高生コンクールをやるんだったら、工業高校に臨時の講師で教えに行くとか、いまある活動に何かプラスアルファをする。青年技術者を表彰したら、青年技術者に実際に出前講座みたいなのをやってもらうとか、いまあるしかけをうまくふくらませると、いろんなことができそうな感じがします。

坂本 よき後継者が次々と出てこられるので、建築協会も先々頼もしいと思っております。私も微力ですがお役に立てたらと思います。

こうして見てくると、関西では建築家や官公庁、建設会社、設備・建材会社などが良い意味で協力しあって、建築水準の向上やその普及に努力を払われてきましたが、その背景に日本建築協会の存在のあることを思わざるを得ません。このような伝統は、建築協会の1世紀にわたる活動と強く結びついていて、そのことは機関誌『建築と社会』を通して誰もが読み取れるのではないのでしょうか。

最後に、このような座談会を開催してくださった100周年記念事業実行委員会諸兄のご厚意に篤く感謝の意を表したいと思います。

設楽 本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(2015年12月21日、株式会社安井建築設計事務所にて)

大阪万博から阪神淡路大震災復興の時代

出席者 上田 篤(京都精華大学名誉教授)、鳴海邦碩(大阪大学名誉教授、関西大学客員教授)

小林郁雄(人と防災未来センター上級研究員)、天野直樹(株式会社竹中工務店取締役専務執行役員、日本建築協会副会長)

大井昇二(株式会社大林組顧問、日本建築協会副会長)、設楽貞樹(株式会社安井建築設計事務所常務取締役執行役員、日本建築協会副会長)

司会・コーディネーター 橋爪紳也(大阪府立大学特別教授)

高度経済成長の背景

橋爪 1970年代、90年代の大阪、および関西の建築に関して、印象的な事柄などについてお話しいただきたいと思います。

上田 日本建築協会が生まれたのは1917年ですね。1917年はロシア革命の年です。ロシア革命と同時にこの協会は生まれました。これは非常におもしろいことです。

私はそのころから1950年ぐらいまでの30年あまりを戦争と敗戦の時代だと見ています。敗戦国はだいたいめっちゃめっちゃになるんです。日本も敗戦の1945年から50年までは本当にひどい年で、1千万人餓死するとか、住宅不足5百万戸とか言われました。ところが日本は1950年から高度経済成長の時代に入りました。それはすごいことなんです。

なぜ1950年か、といいますと、朝鮮戦争がこの年に始まるのです。日本の都市も工場も戦争で壊滅しました。しかし、朝鮮戦争が始まると同時にいろいろな戦略物資が必要になってきて、その特需で復興したんです。

それから1956年に第2次中東戦争が起きまして、スエズ運河をめぐる英仏とイスラエルが手を組み、エジプトと戦争をした。そのときの主役がエジプトのナセル大統領で、彼がスエズ運河を封鎖したんです。これで世界がひっくりかえった。それまで石油は地中海を通過してニューヨークに行き、そこからパイプラインでロサンゼルスに運ばれて、ロサンゼルスから日本にタンカーで運ばれてきたんです。ところが、スエズ運河が封鎖されたために、ペルシャ湾の石油を運ぶタンカーはインド洋、太平洋まわりで日本にきた。それから太平洋を渡ってアメリカに行った。だから日本は石油がアメリカよりずっと安くなり、それまでの3分の1ぐらいの価格になった。こうして、1954年から神武景気、岩戸景気、いざなぎ景気、ポストいざなぎ景気が訪れ、高度経済成長が続いたのです。

その次の経済成長はコンピュータリゼーションです。アメリカではコンピュータは軍事と宇宙開発でしか使えなかったが、日本は民間で使った。それで日本の機械生産がものすごく発達した。だから敗戦国が世界第2位の経済大国になったのです。



上田 篤

1963年に私は「新住宅市街地開発法」というニュータウンの法律を作りました。ですから、千里、泉北、多摩のニュータウンはすべて関係しています。オイルパワーのおかげで大規模開発が生まれてくる。1979年にエズラ・ヴォーゲルが“Japan as No.1”、日本は世界一だという本を書きました。しかし、1991年ごろからバブル崩壊が始まり、1997～98年ごろ日本の銀行が

続々倒れた。そういう時代がありまして、21世紀に入ってからはその後始末の時代です。

ポストモダニズム

上田 建築にそって申しますと、ポストモダニズムという運動が起きたことはご存じだと思います。「ポストモダン」という言葉は建築で言い出して、ほかの世界にも広がりました。建築の世界では一時の流行で終わってしまいましたが、哲学や社会学、人類学の世界ではいまでも真剣に議論されている、非常に重い意味を持つ言葉なんです。

建築で言えば、モダニズムは近代建築様式です。それは古典主義様式に対抗して起きたものです。古典主義はギリシャ以来、石造りの神殿で、戦争でギリシャ人が勝った絵を描いた扁額を掲げて神様に捧げるわけです。まさに神のための建築が西洋の様式建築だった。ところが、ル・コルビュジエ(1887-1965)という男が現れて、神の建築を否定し、太陽、緑、空間の人間の建築と言った。それが近代建築、モダニズムです。

それに対して、ポストモダンが起きるわけです。これはチャールズ・ジェンクス(1939-)が言い出したのですが、アメリカで日系建築家のミノル・ヤマサキが設計してブルーイット・アイゴー団地(1956年完成)をつくった。大規模な団地で、2870戸の人が住んでいました。ところが、1972年にセントルイス市

当局の手で爆破されてしまう。なぜかという、犯罪の巣窟になったからです。ル・コルビュジエ流に幾何学的に設計されていて、誰がどこにいるかが一目でわかる。反面、建物がみな南面しているために妻壁のほうは影になり人から見えにくい。そういうところから犯罪が起きたと言われました。

チャールズ・ジェンクスがポストモダニズムと言ったことによって、近代建築はだめだ、となった。中世の路地や迷路の建築に帰ろう。私も幾何学的なまちはやめよう、迷路のまちに帰ろうと言った。迷路のまちに住んでいる人間は迷路の中をよく知っているからです。よそからやってくる人間はよく知らないから迷路そのものが都市の安全上の城壁だという考え方です。

この時代に関西で2つ、3つ、大きな出来事があります。1つは千里ニュータウンです。1960年に大阪府企業局ができました。国家からお金をもらうだけではなく、自分らで金儲けをしようとした。そして新しい土地を造成する事業を始めた。企業局が手がけたのが千里と泉北のニュータウンです。

これは完全にモダニズムの建築で、ブルーイト・アイゴー団地と同じです。しかし、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会はモダニズムではないんです。そのころ私は京都大学におりましたが万博を手伝うことになり、テーマにお祭り広場をもってきた。実はこれはありえないことでした。なぜかという、万博というのは産業革命の申し子です。イギリスで産業革命が起こり、いろいろな製品を世界に売るために、1851年にロンドンで最初の万博が開かれた。以後ずっと工業製品をPRして売るのが万博の仕事だった。大阪万博がそれを変えてしまったのです。私はお祭り広場を提案して実現しました。それで所管の通産省が怒ったんです。私はそのとき、新しい産業製品を売るのはいやだ、もっと文化を売りたいと思ったのです。

もう1つ、丹下健三さんがお祭り広場に大屋根をつくられた。これが実はポストモダンなんです。なぜかという、これは巨大なものです。それをつくるためにはものすごく大きな仮設が必要になってくる。ところが丹下さんはとんでもないことをやった。地上で大屋根を組んで、6本の柱でジャッキアップしたのです。従来の建築工法にはまったくなかった発想です。これが万博の象徴的な、かつポストモダニズムな動きです。

3番目に、関西空港もポストモダニズム的なんです。国際空港を海のなかにつくるなんて発想は世界にまったくなかった。大変な発想の転換で、あの構想自体がポストモダンなんです。

そういうふうに、ポストモダンというのは、それまでのモダニズムに対して、新しい技術などを生かして発想の転換を迫るような大変革をやる。モダニズムではやっていけないところにポストモダンが出てくる。関西は大阪万博、国際空港などでポストモダンを実現したわけです。しかし、いろいろ問題はある。

橋爪 日本建築協会はロシア革命の年に創立されました。機関誌名を『建築と社会』とした点に、その時代の気分が反映され

ていますね。社会問題をテーマにし、都市に必要な新しい施設の特集を組んで、社会のなかで建築家、あるいは建築はいかなる役割を担うのかを考えるとところに新しい可能性を見出したのが戦前の日本建築協会でした。

さて、千里ニュータウンのまちびらきが1962年で、67年に建築協会が50周年を迎えています。まさに千里ニュータウンが出来上がり、70年の万博にいたる、モダニズムからポストモダニズムへの転換期ですね。

次に、鳴海先生に都市景観とデザインとか、70年代、80年代の印象的なこととお話いただけたらと思います。

都市景観とデザイン

鳴海 大阪は戦後の都市整備に取り組みましたが、70年代に重要な事業が目白押しになるんです。象徴的なのは1970年に完成した船場センタービルや大阪駅前第1ビル、谷町地区市街地改造事業で、これらは実験的であり先駆的でもあったけれど、建物や機能の更新をどのようにするかが課題になると思います。船場センタービルは交通動脈を都心に入れるために建物上部に高速道路を乗せた。道路と建物が一体で、建物が区分所有になっているため将来の取り扱いが容易ではありません。



鳴海邦碩

日本のまちは空襲にあったこともあって、ほとんどの都市が歴史的地区である都市の中心部に車をどんどん入れるという選択をした。戦災を免れた都市では歴史的景観を残す可能性もあったのですが、一部の例外的な都市を除いて、乗り遅れまいとしてどんどん車を入れる。ヨーロッパとはまったく違うまちづくり手法に入っていました。

「再開発は大阪発」とよく言われましたが、90年代になって再開発を金融機関に委ねる、後のPFI（1999年「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律」施行）のはしりのような土地信託型の事業がどんどん出てきました。それがみんな失敗して20年後のいまツケになって返ってきている。どうしてそういう事態になったのか。資金の収支ばかりを考えて、まちの将来をどうするのかという視点が欠けていたのだと思います。

さきほど上田先生から、空港を海につくるのはポストモダニックという話がありましたが、そうでもないところもあって、海上開発は過剰開発というモダンの権化のような側面もあります。60年代はじめに来日したワイズマン調査団は、道路や港湾など関西の総合的な開発の推進を提案しました。それに影響されて大阪港と阪神港の計画が検討され、なかにはびっくりするよう

なすさまじい大規模計画もありました。景気がよくなるにつれ海上開発が次々と行われていきました。

とりわけ大阪市の臨海部には広大な埋め立て地があります。大阪市はそれをてこにして新しい大都市的発展を遂げようとしたのですが、ねらっていたオリンピック招致に失敗して、開発整備のギアをかえないといけない事態になりました。海の上はともかく埋め立てたら使えて自分のものになるみたいな錯覚があって、投資していきました。しかし、そこがちゃんと市街化とか利用ができないと、投資がツケになって返ってくる。そういう構造がりんくうタウンにもあります。大阪港とりんくうタウンの両方にシンボリックな超高層ビルが建っていますが、あれはポストモダンではないと思います。この2つの地域の将来に対して抜本的な取り組みが必要だと思います。

景観に関しては、1980年に大平首相の政策研究会が出した『文化の時代』という報告書が重要な役割を果たしました。これを受けて、各地で「文化行政」「地域のあるまちづくり」が展開しました。1988年に私が出版した『景観からのまちづくり』は、このときに行われた兵庫県調査に基づいています。景観のまちづくりは着実に展開したと思います。

橋爪 冒頭でおっしゃった、船場センタービルと下寺町、上六にいたる市街地の公団住宅ですが、戦後復興の都市計画で、御堂筋と同じ幅の東西の道路を造ろうとしてなかなかできなかったで、70年の万博に間に合わせるべく船場センタービルをつくった。道路用地のなかに既存建物の移転先のビルディングと高速道路と地下鉄をいっせいに組みあげるといのは従来なかった発想でした。下寺町の住宅は空襲の体験もあって、まちのなかにビル型で下が商業施設の集合住宅をつくって防火帯にしようとした。ともに戦後復興のなかで生まれたアイデアです。それから、川を埋め立てて阪神高速道路をつくる。

1970年に駅前第一ビルが完成し、徐々に復興の再開発が進みました。80年代から90年代初頭にはベイエリアに意識が向いて、関西国際空港が94年竣工、同じ年にATC、翌年WTCなんですけど、海辺の開発は、山を削り海を埋め立てて土地をつくるという株式会社神戸方式で神戸が先行していて、大阪のベイエリアがそれに続いていた。しかし、大阪のベイエリア開発が姿を見せたころ阪神淡路大震災（1995年）が起き、神戸は大きな被害を受けてしまいました。

次に小林先生、神戸の70年代から震災のころまでについてお話しください。

神戸における建築

小林 私は69年に大学院を出て最初にやったのがポートアイランドの計画でした。神戸の臨海部開発が私の仕事で、そのあたりの話はよく知っていますが、建築学科卒業ですけど建築につ

いてはあまり直接関係していません。しかし、今日は日本建築協会ですから、建築のことに触れておきます。

阪神間の住宅には、とくに有名でもないがそれなりにちゃんとした建築がたくさんありますが、結局、1920年代から30年代につくられたものが阪神間住宅地の基本で、それ以後、これといった建築があるようには思えません。

神戸ハーバーランドの計画を1986年ごろから震災直前の93年ぐらいまで担当し、いくつか建物は建っていったんですけど、あそこ大阪のOBPなんかに建っている建物よりはるかに質が悪いといえますか、大阪にはちゃんとした建物があるが、神戸にはろくでもない建物しかないなあという思いがありました。震災のあとの復興建築も、神戸にいる者としては見るべきものはないという感慨を持っています。建築界の方はどう思っておられるかわかりませんが。

そうは言っても、私は3つだけまともな建物が建っていると思っています。1つは芦屋の若宮地区の住環境整備事業で、後藤祐介さん（GU計画研究所）が計画、江川直樹さん（現代計画研究所）が設計された復興公営住宅で、既存の戸建住宅との融合が見事です。

2つめは、長田区真野の東尻池コートです。真野に長年かわっている宮西悠司君がコーディネートして大阪の柴山直子さんが設計されました。建物そのものより、どんな建物をどういうシチュエーションでまちの再建に関わってつくるかという、非常に重要なテーマを持っています。

3つめは鷹取のペーパードームです。坂茂さんが仮設の教会を再建しようということで、神田神父のまちの集会所ならということでボランティアの手で建てられ、10年後に台湾・埔里に移築されました。これも建物そのものの設計に意味があるというより、なぜそういう場所にそういうものを考え建設したかという点が重要なものだと思います。

1970年に高さ制限や容積率が導入され、景観とか建築に関する大きな転換になったと思うんですけど、都市計画の面でいえば、1980年に地区計画の制度が導入されたことが「まちづくり」のスタートだと思います。それまで全国一律の都市計画が前提だったのが、地区計画によって、それぞれの地域や地区がやったらいいというふうに転換された。それ以後、都市全体に都市計画法でやっていることにほとんど意味がなくなり、各種の地区計画がいっぱい出てきて、各地区がそれぞれどのようにやっていくかというところに転換していく。逆にいえば、都市計画は地区にベースをおいて、そこにいる人たちが自分たちの



小林郁雄

まちをどうするかということを基本にしたまちづくりに転換していると思います。

橋爪 神戸で最初の地区計画はどこですか。

小林 真野地区です。時間的にはポートアイランドのほうがちょっと早いかもしれませんが、ほぼいっしょです。ポートアイランドは地区計画の制度ができたからやっただけです。景観のほうからいうと、神戸の都市景観条例は78年ですが、神戸のまちづくり条例が81年で地区計画に合わせて作られています。78年から81年あたりに、神戸のそういった全国の先駆的なまちづくり制度が整備されていきました。

海上都市

小林 最後に、海上都市の話をします。私は1969年から神戸港ポートアイランドの埋立地の基本計画・基本設計を担当していました。千里、多摩、西神といった内陸部のニュータウンに対して、海上のニュータウンとしてポートアイランド、六甲アイランドと言われますけど、基本は港湾で、ポートアイランドも六甲アイランドもコンテナ埠頭をつくることに意味があり、国家事業として大半のお金はそこに投入されているわけです。埋立地の真ん中は船が着かないから、港湾屋さんとしてはどうでもいいのです。神戸市は六甲山麓の市街地に平坦な土地もないことだし、せっかくだからその土地を利用して海上都市を考えようということになったので、はじめから海上に都市をつくらうという意思があったとは私は思いません。当時の原口忠次郎市長がどの程度まで意識していたかわかりませんが。そういうかたちで海上に新しい都市をつくるのはニュータウン開発のなかではかなり珍しい。同じような大阪南港のポートタウンの開発などもあり、そして臨海部の古い産業・流通施設を、神戸ハーバーランドとか、横浜みなとみらいというかたちで都市化していく。最後は製鉄所跡地への震災復興シンボルプロジェクトHAT神戸だと思います。そういった点でも、神戸はかなり先導的な役割を果たしたのではないかと考えています。

上田 いま言われた原口市長というユニークな市長は、ドイツマルク債を借りているんです。日本の政府は貸さなかった。そして山を崩して、その山の土でもってポートアイランドを作った。これはポストモダンかなと思うんです。

それから、関西空港ももっと空港と一体になった便利な港をつくれればよかった。そうすれば神戸空港なんかつくる必要はなかった。りんくうタウンももうひとつパツとしない。もっと海を利用すればいいのに土地のことしか見ない。あれは泉州を発展させるための大阪の地域エゴで、さらに広い関西という立場に立てばもっと活用の仕方があったと思います。

ところで、京都駅の上にレストランがたくさんあるのですが、10階、11階のレストランの窓からは北側の京都の町や北山、東

山、西山が全部見える。観光客の名所になっているんです。最近京都は観光地としての株がすごくあがっていますね。あそこに立ってご覧になると、これが日本か、と思う。北山、東山、西山には鉄塔がひとつもない。そんな山は日本の大都市の周辺にはありません。生駒山なんかひどいもんですよ。

もうひとつ、まちに広告塔がほとんどない。東本願寺と西本願寺の大きな屋根が見えるくらいで、広告塔がないということはすごいことなんです。京都がこんなに観光地として有名になってきているのは、それだけのまちづくりをやってきたからです。このことを評価すべきじゃないかと思うんです。

橋爪 上田先生はラビリンス（迷宮、迷路）をキーワードの1つとされていました。京都においては町家の再利用、大阪においては川筋の再評価、それから鎮守の森の研究と続く。もともとモダニズム的な普遍の世界ではなくて、固有のものを評価していこうしていращやと思うのですが。

上田 そうです。町家は、私が学生を使ってずいぶん調査し、本を3、4冊書きました。そのおかげで京都では町家を使ったレストランなどがたくさんできたので、ある意味で復権しています。大阪で私がやったのはリバーウォークです。それまで川を背中にしていたのを、玄関を川側にもっていった。おかげで、だいぶ川筋がきれいになりましたね。かつて大阪が八百八橋と言われたのに対して、808のリバーウォークができればいいな、と思っています。モダニズムの都市計画に対して、中世の密集した迷路のまちのほうが、衛生などの問題はありますが、人間が生きて住む場所だと思います。

橋爪 鳴海先生、容積率制の導入や景観についてお話しいただけますか。

容積率制の導入と景観問題

鳴海 1970年、建築基準法の改正で容積率制が導入されました。それを担当した当時の国の役人が後に書いた文章を読むと、東京で平均してもたかだか2階を越えるぐらいが現状で、こうした状況は将来も大きくは変わらないだろう。局所的に高容積のビルが建つことになるが、現場で調整すれば大きな問題は起きない、と考えていたようです。景観的な観点からの現場での調整に期待したのではないかという研究者もいます。起きてから対応していくという仕組みです。

予想通り全国各地でマンション建設を契機とした景観紛争が頻発することになりました。地区計画で紛争の発生を防ぐことができるのですが、後の祭り状態のところが多いのが実態です。

大阪では御堂筋の景観問題が容積率制と関係があります。容積率制が導入された当初は、いわゆる紳士協定で御堂筋沿道の建物は高さ31メートルが守られました。それが1991年に見直すことになり、景観論争が起きたのです。さまざまな議論があり

ましたが、高さを50メートルに緩和した「御堂筋沿道建築物のまちなみ誘導に関する指導要綱」ができました。私もこの見直しを検討する委員会の一員になり、世界の代表的な大通り沿道の建築規制を調べました。

京都では、1980年代の京都ホテルの建て替え、1990年代の京都駅建て替えで、建物高さに関する論争が起きました。いずれも容積率制と関係があります。

2004年の都市再生特別措置法による緩和措置で、御堂筋沿道に建つ建物も影響を受けています。容積率を緩和するとそれが高さにはね返る。都市再生法は事業者の発案が優先するのでどうしても対応が後追いのになってしまうのが実情です。

大都市都心部における高さを含めた建築の景観的な誘導は、東京では銀座、丸の内、大阪では御堂筋で取り組まれています。私は御堂筋は世界のトップレベルのいい道路だと思っているので、そこに建つ建物について十分議論して、そこにふさわしい建物とか用途ができていく筋道をはっきり確立していくべきだと思っています。いままでもそうした努力は行われ、ちょっとずつ時代にあわせて変えながらも、一定のよさを保っていると思います。時代を先取りした課題を早めに議論して、大阪の顔をなくしたくないなと思っています。

橋爪 戦前に日本建築協会が、日本で初めて都市計画のデザインコンペを実施しました。大阪駅



橋爪紳也

前から中之島あたりをどのように変えるのが課題でした。当時、五大都市、六大都市の特別市制の導入をめぐる議論があった。大阪都庁舎を中之島につくるとか、駅前全体をどう開発していくか、という議論があった。そのころ、日本ではいち早く、御堂筋沿いと駅前周辺が美観地区に指定されました。そのときの美観というのは、

まだ二階建ての建物ばかりのところを、

近代的なビルディング街にしようというもので、各地権者はがんばって高さ百尺のビルを建てましょうということだった。

状況が変わったのはおそらく73年に大林組本店と大阪国際ビルが白と黒の超高層ビルを競い合って建てたときでしょう。以降、大阪においても超高層ビルが林立し始めた。その際、高さよりも容積の話にシフトする前提ができあがった。あとは御堂筋にしても、将来こうあるべきだということではなく、その時々

の規制に従って、御堂筋にふさわしい景観を謳っていくようになりました。

小林 高さを決めるのは美観、見た目です。容積というのは経済的な価値の話でしょう。どれだけ建てられるかという問題は、

高かろうが横に広がろうがどうでもいいわけで、どれだけのマスがほしいかという経済原理です。70年にガラッと変わったのはそういうことではないかと思うんです。80年にまたそれはおかしいとなった。だけど、80年代になって、アメリカもイギリスも、民活とか、まちづくり系とか、経済の発展だけではいけないということがかなり常識になっていったと思う。日本は80年代後半から90年ごろにかけて経済バブルが起きて極端に行き過ぎてしまった。それが崩壊して2000年の小泉内閣の時代が来るまで回復しなかった。

まちづくりは80年にスタートして、そういった挫折を経たけれども、95年の阪神淡路大震災のあとで復権した。さっき震災後の建築には見るべきものはないと言いましたが、都市計画的にはありました。結局、地域や市民の人たちがまちを自分たちの手でなんとかしようとするのがもっとも大事だという主張が阪神淡路大震災後の復興まちづくりで、国や市がいくら区画整理などをやっても、そこに住んでいる人たちが立ち上がらないかぎりうまくいかないということがはっきりした。神戸市ではそれに呼応するかたちで、80年代からのまちづくりの歴史がうまく生かされたと思っています。

上田 容積率制という問題の背景には日米構造協議があったと思う。日本の経済があまりに強くなってアメリカはダウンした。それでアメリカのものを買ってくれ、ということで政治交渉が行われた。そのなかで、はっきり言えばアメリカのゼネコンをもっと日本で使ってくれ、と言ってきた。そのために都市のなかで超高層をやらせろ、という話です。そこで容積率制の緩和が出てくる。ところがそれは実現しなかった。日本のゼネコンは強いですから、アメリカのゼネコンが入る余地はなかった。

ターミナル開発

橋爪 日本建築協会の副会長であり建設業界の重鎮であるみなさんは、戦後の関西、大阪をどんなふうに総括されますか。

設楽 私自身も、うちの安井建築設計事務所も、駅ビルとかターミナルの開発をけっこうやってきましたので、それについて少しお話しさせていただきます。

太平洋戦争のとき、国鉄の駅が空襲に遭ったりして大きなダメージを受けました。終戦直後は駅機能を復活するのがやっという段階だったと思います。国鉄にお金がないので民間の力を利用しようという動きのなかで現れたのが天王寺駅などの民衆駅で、一時代を画しました。それは地元の私鉄や百貨店と組んでやるもので、1950年から60年、そして東京オリンピックのころまでありました。1971年に法改正で国鉄が出資できる範囲が広がり、駅ビルが可能になりました。関西圏で言えば、芦屋のステーションビル、大阪駅のターミナルビル、いわゆるアクティ大阪ができる。当社はそういうターミナル開発のお手伝い



設楽 貞樹

をしてきたという歴史があります。

ただ、これは私の個人的意見ですが、ターミナル開発というのは、できるだけ駅に来られるお客さんが増えて、事業者としての国鉄・JRが潤うことが目的ですが、はたして当初、人がまちに出ていくような開発ができていたかと思います。そういった視点が現れるのはもっと後で、2011年にアクティ大阪の増床をやったとき、鳴海先生

はじめ学識経験者の方にご助言、ご協力をいただいているいろいろ考えたことがいい経験となりました。このとき初めてまちと駅の相互作用を考えるようになり、まちづくりにより近づいてきたのかなと思います。百貨店の中身を見せる、駅からまちが見える、まちから見て駅がよくわかる、そういう開かれた視点ができてきました。

橋爪 迷路状の地下街も含めて、駅周辺部に文化的な機能や娯楽の機能が蓄積し、複合的なエリアになっています。欧米のモデルではなく、関西独自の開発が進んでいると感じます。

設楽 もともと阪急さん、京阪さん、南海さんなど、私鉄ですから縛りがないので、ターミナルに抱き合わせで百貨店機能を持ってきたりされていた。拠点をはっきりつくするという伝統が関西にはあると思います。

ターミナルへ寄る都心

天野 私が勤めている竹中工務店はもともと名古屋で発祥し、1899年神戸に、それから大阪に入り、いま本町を拠点にしています。伝統的に民間をやっているのが弊社の特徴的な事業構造で、そういう企業風土ができています。

私がここ8年ぐらい担当したのが近鉄さんのあべのハルカスです。近鉄さんは関西でいちばん沿線距離が長い私鉄です。大阪は民間が強いと言われますが、新しいまちづくりを民間主体でやっているというイメージが強いです。その大きな役割を担っているのは、JRも含めて鉄道事業者ではないか。

最近の全国の傾向をみると、都心がターミナルへ寄っていている。東京は山手線がありもう少し広域ですが、名古屋も明らかに駅前ですね。京都も四条ががんばっていますけれど、それでも駅前に重点がシフトしている。大阪もそうです。博多も、いま天神地区がかなりしんどくなっているように思えます。これからはコンパクトシティやスマートシティと言われていますが、そのなかでターミナルがまちおこしの大きな核の1つになるのではないかと思います。

私のところはさきほど鳴海先生がお話しになった御堂筋の民間

ネットワークの幹事会社をやっております、御堂筋は少し追い込まれている。家賃だけでみると、とくに本町あたりが沈下していると思います。大阪はいまは縦軸のまちで、中之島から南港にむけて横軸を延ばすという展望がありますが、なかなか進んでおりません。縦でも梅田と難波、大井さんがやられたなんばパークスなどはかなり集客がありますが、本町・心斎橋あたりが少し沈んでいる。そういうなかで、まちおこしをどんなふうにするかが課題だと思っています。

鉄道会社は運輸を中心にしていますが、人口が減少していますし、郊外も人が減っているので、もうそれだけではやっていけません。しかし、実は私鉄は小林一三のころから沿線価値の向上のために、駅前デパートのみならず、劇場、美術館、野球場といったものをつくってきました。まさに社会そのものをつくっている。彼らは大きな役割を担ってきたと思います。

橋爪 戦前から戦後にかけて大阪を支えてきた都心部のオフィス街と問屋街が空洞化した。オフィス機能はキタに集積し、情報の拠点も梅田や新大阪駅周辺に集積している。これからは中心部をどうしていくかが大きな課題ですね。

天野 船場全域で考えていかなければならないでしょうね。

橋爪 都心全体のリノベーションですね。大井さんは戦後の関西・大阪をどう見られていますか。



天野 直樹

ホテル建築でたどる70年代から90年代

大井 大林組は大阪で創業以来、125年あまりの歴史を持っています。その間、総合建設業としてさまざまなプロジェクトで関西の人たちとともに関西のまちづくりの一端を請け負わせていただいたことにまず感謝したいと思います。私自身、大阪で生まれ育ち、入社後もほとんど大阪で過ごしました。

「人は世につれ、世は人につれ」と言いますが、「建築は社会につれ、社会は建築につれ」とも言えるのではないのでしょうか。日本建築協会の機関誌は『建築と社会』ですが、まさに建築に関わるさまざまな業界が社会に対して発信していくことで、その歴史を刻んでできていると考えます。そこで、ホテル建築に着目して70年代から90年代の流れを見てみたいと思います。

戦前からあるホテル、たとえば奈良ホテル、宝塚ホテル、六甲山ホテル、甲子園ホテルなどはクラシックホテルに分類されるものでした。1964年の東京オリンピックを契機として、東京ではそれまでの旅館という宿泊スタイルから西洋式のホテルが本格的にできてきました。銀座東急、パレス、オオクラ、ニュー

オータニ、高輪、プリンス、そして外資系の東京ヒルトンができ、第1次ホテル時代と呼ばれています。このとき『建築と社会』でホテル建築特集が生まれ、トレンドをリードしています。この時期に関西では新阪急ホテルが開業しました。これらのホテルのほとんどは、財閥系資本、鉄道系資本で構成されています。70年に大阪で日本万国博覧会が開催され、大阪ロイヤル、京都グランド、プラザ等のホテルが建設開業、大阪にも洋風の宿泊文化が根付く契機となりました。



大井昇二

80年代に入ると、先ほどもお話があった地区計画制度の活用によって、大阪のまちも再開発が進められるようになりました。その再開発の中核施設の1つが、ホテルであったように思います。86年にOBP（大阪ビジネスパーク）ではホテルニューオータニ大阪、阪神梅田では大阪ヒルトン、90年代に入り94年南港にハイアットリージェンシーホテル、96年、OAP（大阪アメニティパーク）では帝国ホテル大阪が開業しています。さらに97年に阪神西梅田開発でリッツカールトン大阪、2000年に南梅田開発（ガーデンシティ梅田）でホテルモントレ大阪が開業しています。これらのまちづくりの社会文化の形成に、ホテルが大きな役割を果たしています。

また鉄道系のターミナル駅でも立地を生かして高層ホテルが建設されました。85年、近鉄上本町都ホテル、90年、南海難波のサウスタワーホテル、92年、阪急梅田の阪急インターナショナルホテルと、それぞれのホテルが10年後のまちをつくり、その地の文化を新しくする契機になっています。

見方を替えれば、それぞれのホテルの開業は、社会の動向に大きく左右されています。つまり、ホテル建築の推移から、まちづくりの変遷、あるいはまちの文化の形成を考察できると考えます。弊社の3代目社長の大林芳郎の言葉に、「建築は社会資産。建築は建設を通じて社会文化に貢献している」があります。改めて建築と社会の実感します。

橋爪 お三方のお話は、期せずして70年代から現代までの時代の変化のなかで、駅やホテルなど拠点になる建築の変化をみるということでした。

次に、70年代、80年代の組織事務所とゼネコンが果たした役割、技術開発、設計思想などについてはいかがでしょうか。

70年代、80年代の技術開発

設楽 また大阪駅の話になりますが、2011年に大阪駅の南側を増築しました。1983年に第1期のアクティ大阪ができてから30

年弱でした。超高層ビルの横増築は世界的にも珍しいだろうと思います。そこで痛感したのは、会社の先輩がたの確実な技術力です。カーテンウォールのどてっばらを開けるわけですが、カーテンウォールをばらしたら、アルミの表面処理がほとんど劣化していない。漏水のあともないので、非常に確実なものを作ってきたんだと、先輩方を尊敬し直しました。

最先端の技術の粋を集めてできた建物ですから、われわれもまた最先端の技術で増築しなければいけないということで、当社の粋を集めて、連結制振という構造形式を提案しました。1983年の建物は38認定をとった建物です。それはいま使えません。2棟をくっつけて一つの建物として構造計算すると、既設棟の上層部が地震時に大きく振られてしまう。かといって2棟を別の建物にすると、エクspansionが2メートルぐらいになるということになりました。その間をとって、連結の制振ダンパーを間につないだのですが、そうすることで既設の建物の構造的補強がほとんどいなくなり、うまくバランスがとれた構造計画ができました。そういう意味では、あのプロジェクトはその時代、その時代の技術の粋を集めた建物として、大阪のまちづくりに貢献してきたのかなと思います。

天野 1960年から90年ごろまで、高度成長とモダニズムが2本柱で、建築の世界で行われたことは工場生産、工業化、住宅系ではアステム芦屋などが最初だと思います。それから、どこまで高層化できるかという競争。地下も昔は潜函工法で、上で作って下へ降ろしましたが、新たな工法が研究されました。

もうひとつは無柱の大空間です。どれだけ無柱でスパンがのばせるか。その最後の姿がドームではないか。エアドームは画期的で、柱なんてない。気圧だけで空間が作られているのです。

また、成長戦略のなかで都市開発がわれわれの柱でした。OBP、中之島、御堂筋のネットワークもひとつのワークショップのようなものでした。それも地権者がつくったワークショップですから、どうしても経済的なほうに向くんですけど、目的がいっしょですから利害が一致しやすい。本町あたりでどうしたら家賃をとれるオフィスビルになるかという、この一点です。そのためには、下に商業施設を入れて活性化するか、もしくは昔のように静かな御堂筋にするか。「土日なんか人はおらんでもええ、そのほうが資産価値があがるんや」と言う方もおられます。ですから同床異夢みたいなところはあるんですが、こういうものが見直されてきて、たとえば、本屋とかデパートのエスカレーターまわりに椅子を置くような時代になった。いちばん売れるところに物を置かないという、ディテールでも進化した世界ができてきている。省エネも個別化空調もそうです。

その行き着く先がわれわれの進めているワークプレイスづくりです。「働かされているのではないですよ、みなさん」というメッセージです。最後に背中を押したのがバブルの崩壊と阪神淡路大震災で、1995年がエポックだったと思います。

大井 70年代は、スピードが要求されました。社会が高度成長の熟成期に入っていた。団塊の世代が70～73年に入社する時期を迎え、社会が活性化していた。建設需要も旺盛で、とても活気があったと思います。工期短縮の技術として、先ほどもあった大阪駅前の工事で逆打工法が導入されました。地上と地下とを同時施工する技術です。当時は画期的な工法とされましたが、いまでは広く汎用されています。

68年東京で霞が関ビルが竣工し、73年には大阪でも超高層ビルの先駆けとして大阪大林ビルと国際ビルが競い合うように竣工しました。このときの技術が超高層技術のはしりです。

73年、79年の二度のオイルショックを受けて、省エネ技術に磨きがかかり、84年に『建築と社会』で組まれた高齢化社会と生活空間特集がバリアフリー化を促進しました。86年には米国のオフィスビルにならってインテリジェントビルが登場し、各社が競い合いました。いまでは当たり前のオフィスの上げ床仕様はこのときに始まっています。91年ごろからバブルの崩壊が始まり、建設業界は少し遅れて苦境に入っていきます。

95年に起こった阪神淡路大震災によって、建物の安全性について強い関心を持たれるようになりました。それ以前にも免震技術、制振技術など耐震性についてかなり研究が進められていたのですが、なかなか実用化されませんでした。この地震を契機に、免震、制振の技術が格段に進み普及していったように思います。現在、都心に建つ超高層の集合住宅において、弊社ではDFSという制振構造技術を取り入れています。

一方で、90年代後半には省エネ技術を応用して、環境に配慮したさまざまな技術が進みました。熱負荷を下げるためとヒートアイランド現象の緩和のために屋上緑化技術が進化しました。弊社が手がけたなんばパークスは、都市における環境のあり方を考えた技術の集大成のように思います。ほかに、外装ガラス面からの負荷低減のためのダブルスキン構造技術も進化しています。

このようにみえてくると、技術の進歩も、社会の要請、社会事象が大きく影響しているといえます。逆に、建築の技術が社会に大きく影響するように、われわれももっと努力する必要があるのかもしれない。

天野 免震技術は、阪神淡路大震災までかなり開発されていたのですが、費用が1割ぐらい高いんです。その1割を安全として買いますかという話ですね。震災以降、マンションなんかは免震で売れるようになりましたが。

大井 耐震改修促進法ができて技術がどんどん進んでいます。

設楽 日本全体が震災列島だということを最近如実に感じていますから、各企業がBCP、事業継続計画をしっかりと考えるようになりました。そういう技術に対して、たとえ部分免震であっても備えをしておくのが当然というか、それをやらないと企業としていかんという風潮ができたのは、ここ十年ぐらいかし

れません。

橋爪 戦後復興期から70年代までの建物をどうリノベーションするのか、建て替えるのか、が問われています。それから、大阪駅ビルのように従来ありえなかった高層建築の増築という話題もありました。先輩がたがつくってきた大阪の建築を今後どうあらためていくのかが、今後の課題だと思います。

次に、阪神淡路大震災のあとで建築界の考え方が大きく変わったということはありませんか。

阪神淡路大震災とコミュニティ

設楽 阪神淡路大震災のときに私が感じたのは、普段のやわらかなコミュニティが非常に大事だ、いざというときに助け合うためには、「隣はなにをする人ぞ」ということでは生まれないコミュニティの重要性を感じました。

私はマンションに住んでいまして、地震のときうちの下階の老夫婦が起きてこなかったんです。そこで、みんなで窓を破って中に入って、たんすの下敷きになっている老夫婦を見つけて助けることができました。昔のムラ社会的なコミュニティは必要ありませんが、どんな人がどんな暮らしをしているかがばんやりわかっているぐらいのコミュニティは大事だと痛感しました。そんな経験から、建築のプランづくりでも、たとえばコミュニティスペースをしっかりとろうと考えるようになりました。

天野 私もマンションに住んでいますが、阪神淡路大震災のとき80軒が半壊になって、建築のプロは私しかおりませんでしたので、ずいぶん活躍しました。落ち着くまでに半年ぐらいかかったんですけど、それが過ぎるとまたふつうの日常にもどる。

私は会社に入る前から、われわれのコミュニティはいついどこにあるのかと思っていました。まず家族ですね、次に親戚、それから友達、その次はもう会社になるんです。「遠い親戚より近くの他人」という人もいますが、地縁社会は失われて、復活はむずかしい。私は洗濯機をやめたらどうかと思いました。すると、みんな井戸端に行って洗濯しないと仕方ない。その井戸端ではいじめられるお母さんもいますが、それも覚悟する。そういうことも含めてコミュニティを再構築するしかない。好きな仲間だけ集まって、というのではコミュニティはできないと思います。いざというときに助け合えませんかね。コミュニティ論は底が深い。われわれ建築の世界も難しい課題を抱えたまま何十年と来ています。

大井 阪神淡路大震災のとき、私は奈良に住んでいて、当日は大阪の勤務先まで何とか出社しました。緊急の対策会議を開き、従業員の無事の確認をするとともに、すぐに補給物資の段取りにとりかかったのを覚えています。翌日には私が関係した阪急西宮北口駅の現場に入り、調査、応急手当の段取りをしました。

そのときに感じたのは、いまも出ていた、人の和の大きさで

す。だれもが大変なときなのに、自分自身以外のことに一生懸命になる。和の輪が大きくなっていく感じでした。そのためには、普段からのコミュニケーションも必要ですし、建築として何ができるのかを考えておくことも重要ですが、われわれが持っているDNAの継続がさらに重要なのかもわかりません。

われわれの業界が何をすべきか明快には答えられませんが、ライフスタイルの変化に応じて、提供する空間は変化しなければいけない。たとえば、70年代の子どもたちは屋外で走り回っていた。ですからそのころの団地開発には、プレイロット（子どもの遊び場）が必ず設置されていました。しかし、90年代以降、子どもたちの遊び方も変わってきました。それなら、半屋外でもいいでしょうが、ゲームを楽しめる共通の空間があってもいいかなと思います。そんな工夫をしながら、コミュニティが育つ場をつくるのが大切ではないでしょうか。

震災のとき、私が携わっていた現場は神戸大丸でした。行ってみると火事場の様相でしたが、衆知を集めてみるみる現場が動いていったのは驚きでした。人の底力は大きなものです。

震災を体験して、免震、制振ばかりでなく、天井と壁との納まりや内装など、耐震の技術が飛躍的に進み、普及しました。

日本建築協会の今後の役割

橋爪 最後に、日本建築協会が今後果たすべき役割について伺います。たとえば、1980年代にバリアフリーを提唱、福祉に関して建築も対応しなければならないといわれ、1981年に『建築と社会』で高齢化社会と生活空間の特集を組みました。そこで30年後には超高齢化の時代がくる、それに対して未来を見すえて考え、実践すべきだと提言されています。まさにその30年後になって、未来予測のもと、こういうソリューションがあるということが建築協会から提案されているかというところでもなくて、社会の課題に対症療法的に立ち向かうことが多い。提案型の活動も大事だと思うのです。建築協会として、100周年の先に、どういう活動を想定されていますか。

設楽 日本建築協会はもともと大阪および関西を中心とした関西建築協会ということでスタートしました。創成期には大阪市の都市計画的な法令の整備に対して提言をするなどの活動をやってきたという歴史があります。それから、いろいろなコンペを主催して、まちづくりに対する提言を積極的にしていく力をもっていた。ただ、その時代のような働きがいまできるかというと、ちょっと無理だろうと思うんです。では何ができるかというと、『建築と社会』で、常に社会が持っている問題点やテーマを見つけてきて、それに切り込むことはやってきているし、これからもやっていけると思います。

ただ、ソリューションの提示まではできていないかもしれません。それでも議論を喚起する力は常にキープしていきたいで

すし、それによって、社会的に、あるいは建築業界にとって刺激になるような話が展開していけばいいと思っています。

『建築と社会』を編集するとき、ある問題に対して、こういう見方がある、でもこういう見方もある、とバランス感覚のある記事になるように工夫してきたつもりですし、それはこれから変わらないと思います。

一方、建築協会で、アンダー35の若い世代の人たちが、フェイス・ツー・フェイスで話をしたり、電子メールやフェイスブックなどでコミュニケーションをとったりしながら、会社を離れて、自分らの世代のテーマ、問題意識を見つける動きが出てき始めた。そういう世代はとくに忙しくて、横同士でつながる時間はなかなかないんですけど、彼らもこれが重要な時間だと思っておりまして、忙しいなかでやってくれている。そういう動きが大事で、テーマごとの活動のプラットフォームを提供することができれば、建築協会としては息の長い活動を続けていけるのかなと思います。

天野 『建築と社会』の既刊号の目次を見ていますと、1971年の特集号のテーマが、コンピューターを利用した住宅相談、都市エネルギーと無公害化ビル、都市生活と緑、企画と設計のプロセス、解体工法、変換期のニュータウン、軟弱地盤と震災、変貌する建築生産、自然とレジャー、こんな感じで、いまでもいけるんじゃないかというテーマばかりです。

建築協会は社会性が高く、建築といった閉じた世界ではなく、都市計画よりまだ外へ広がっているのが特徴です。さきほど鳴海先生からありました御堂筋のいちばんの課題は、あそこにマンションが建てられたときに区分所有法があって売ってしまったら300戸の権利者ができてしまう。隣のビルを建て替えようと思ったらいったいどんなことになるのか。これは景観の話でもあるし、所有の話にもなるし、建築の話をはるかに超えるわけです。経済学、社会学、ひょっとしたら哲学や倫理学の人、アーティストも入れてするような話になるかもしれません。いわゆるビッグデータで処理できないかというようなところまで広げられる基盤を建築協会は持っている。そういう幅の広さをもって、これからやっていきたいと思います。

大井 建築協会の媒体である『建築と社会』のタイトルのとおり、建築と社会との関係性という視点をもっと強くアピールしていきたいと思います。たんに建築や論文を紹介しするではなくて、テーマ性をもたせて、『建築と社会』に載せる作品だからこれです、というような個性をもっと強く出していけばいいと思っています。

橋爪 少子高齢化時代だからこそ大都市中心部の役割は大きいと思います。いま船場でも、オフィス街のひとつ裏はマンションになっています。かつてそうであったように、業務中心ではなくて、新しく都心に来て暮らす人たちとオフィスの賑わいと機能融合をしたまちに戻ってほしい。大阪だけではなく、地

方も含めて日本中が都心をどうするのかという大きな課題に直面しています。そのなかで、建築協会が果たすべき役割があると思います。

設楽 住んでいる人が増えたら、またおもしろいまちになりますね。一方で、ほっておいたら住宅ばかりになるという危機意識もあります。

『建築と社会』への期待

橋爪 次に、先生方に全般的なご意見をお願いしたい。加えて日本建築協会に対してメッセージをいただけますでしょうか。

上田 3つあります。まず海を見ろ、ということを大阪はもっと考えてください。ウォーターフロントに曲線が全然ない。しかし、自然はもともと曲線です。美しい汀を作って、その周辺にビーチウォークを置いたら、たくさんの商業施設、リクリエーション施設、レストランが海に面して建ちます。そこから対岸の神戸と行き来するとか、もっと大阪湾を使うべきです。

2番目は地下を見ろ。トンネルを見直してくれ、ということです。戦後、高度経済成長でつくった建物や高速道路はあと10年、20年したら耐用年数がきてがたがたになります。ところが、トンネルは圧縮力で持つのでわりと強いんです。鉄筋を使わない地下トンネルをもっと増やしてください。たとえば、東京は地下鉄の駅が285あるが、大阪は100。駅が1つできると、極端に言えば、その駅のまわりの地価が1兆円上がると言われる。東京が発展しているのは地下鉄網のおかげです。トンネルも耐用年数がありますが、うまくつくれば半永久的に使えます。

3番目は山を見ろということです。大阪の山も美しいですよ。六甲、生駒、金剛葛城。この大阪の山をめっちゃめっちゃにしている。マンションでもビルでも、山並みが見える、ということがキャッチフレーズにならなければならない。そのためには山をきれいにしてほしい、ということです。

鳴海 私は『建築と社会』で、1984年に「21世紀への関西——魅力ある町づくりを問う」、1993年に「これからの公共建築」というテーマの座談会の司会をやりました。いずれの場合も、基本的に同じような話題が出てきました。今日も、大阪だけでなく関西で考えないといけないという話が出ましたが、その時も同じような話題が出たのです。関西広域連合というのがあるが、われわれの分野、建築とかまちづくりの分野でそういうことを議論するプラットフォームが本当にあるのか。学会もそういうことは考えないし。

私たちはまちづくりや都市計画に関係していて、遠い未来のことまで責任がある。しかし、広域的なまちづくりをどうしたらいいかをだれも真剣に考えないし、お役所がそういうことに取り組むと、今度は取り合いになってしまう。そんな状況だから、『建築と社会』がちゃんと議論するためのプラットフォームに

なしてほしい。

それから、さきほど若い人に活躍する場を提供しているというお話がありましたが、私も長年、意識のある企業グループで研究会をつくり、若手メンバーを募って「魅力のあるまちづくり」に取り組む活動を行ってきました。そこで経験したのですが、課題の投げ方にもよるんですけど、年に何回か、細かい注文をつけないで、雑誌作りを1冊完全に任せたらいいんじゃないでしょうか。そういうことを通じて自主性を鍛えないと、建築協会のメンバー企業の職場にも元気のいい若者がいなくなって、命令されないとできない若手ばかり増えると、関西はもっと暗くなるんじゃないかなと思います。職場でちょっとはみ出するような若い人をつくるのも『建築と社会』の役割ではないか。100年経ったのなら、雑誌の性質なり取り上げるテーマをまるごと変えてしまってもいいかなと思います。

小林 大手設計事務所、大手ゼネコンのリーダーの方々がコミュニティのことを大事にしておられるとはついぞ思っていませんでした。『建築と社会』というだけあると思って感激いたしました。

都心が住宅だらけになるのがご心配のようですが、私はとてもいい話だと思っています。たくさんの人が幸せに住めるようなまちになればそれで十分ではないか。それを支えるだけの社会力、経済力が大阪にはあるはずなんです。東京なんかそんなことを忘れて進んでいて、首都直下型地震が起こったらどんなことになるのかと思います。

建築というのはそういうところに本来最終目標があるということを、たぶん100年前の建築協会の方は感じて『建築と社会』という名称にしたんだろうと思います。その伝統が息づいているという感じがしました。とくにゆるやかなコミュニティというか、柔らかなつながりが大都市なりに新しく育ってきていると思いますので、そこを大事にすればいいと思います。

もっと言えば、高齢化社会とか人口減少と言いますが、2000年間の日本の人口のグラフを見ると、明治維新からあと、人口4000万～5000万人の時代から突然1億3000万人になって、また急に4000万～5000万人に下がるわけで、そのとんがりがモダンイズムだと思う。逆にいえばそれがおかしかったわけで、とくにこの60～70年の社会の在り方が特異だったという気がします。そうすると、戦後のいろいろな新しい社会がすべて正しいと思わないほうがいいんじゃないのか。もっと大らかな気持ちで、2000～3000年のなかでこれからどうするかを考えれば、心配することはない。ストックを使う、改修改善なんて明治時代までは当たり前の話で、もっと新築・開発からの転換を進めるほうがいいと思います。

橋爪 本日は、ありがとうございました。

(2016年4月18日、大阪府立大学観光産業戦略研究所にて)

21世紀を拓く建築

出席者 本多友常(摂南大学理工学部教授)

鈴木 毅(近畿大学建築学部教授)

安原 幹(SALHAUS 一級建築士事務所、東京理科大学理工学部准教授)

司会 横山俊祐(大阪市立大学大学院工学研究科教授)

横山 「21世紀を拓く」という、これからの時代の建築のあり様を見通すのが、座談会のテーマですけれども、いきなり未来

の話をするよりも、これまでを眺めながら、現段階でどういうことが気になっているかとか、あるいは、どのような可能性がありそうだとお考えなのかなど、少し過去を振り返りながら今の時代を讀んでいただいて、その上で未来を見通すような進め方をしたいと思います。

まずは、住まい・住宅を1つの切り口にして、どういう状況だと思って

おられるのか、それから、どういうところにこれからの可能性があり得るのかということについて、お話ししたいと思っています。

住まい・住まい方が変わる

鈴木 住まい・住宅について一番驚いたのはシェアハウスが普通になったことです。三世代から核家族に、さらに個室化が進んでワンルーム・マンションに行き着くというように、住宅はどんどん個人の空間へと分解してきましたよね。プライバシーや私有が絶対という意識は変わらないと思っていたら、いつの間にか、他人と空間をシェア（共有）する形式が一般化してきました。

背景には経済的な要因などもあると思いますが、やはり震災の影響も大きいでしょう。つまり、災害時などいざというとき、やはり隣近所の人をまったく知らない困る。普段からそこそこの近所付き合いがあったほうが安心だという実感があつた。

それから、そもそも社会で個人個人がばらばらに住むことが行き着くところまでいって、まったくコミュニケーションがなくなったことへの反動もあるような気がします。

前世紀、住宅の専門家がコミュニティが大事だといろいろな提案をしてもほとんど動かなかったのが、今は普通にシェアハウスが成立して、若い人がウェブで部屋を当たり前のように探すようになった。こういう変化を目撃できるとは、長生きはするものだと思います（笑）。

横山 なるほど。安原さんは、集合住宅の設計もされています。最近のそういう血縁にこだわらずに、他人と共に住むという新しい関係性の流れを感じていますか。

安原 いま鈴木さんがおっしゃったことが本当に社会に根付いているという実感は、まだないのですが、その一方で、先の「ヴェネチア・ビエンナーレ」で、日本館が特別賞を受賞しました。「en [縁]」というテーマで、シェアの概念をかなり色濃く含んだような作品が紹介されています。若い世代の建築家たちのこうした仕事が、日本独自のムーブメントとして国際的に評価を得たということは、けっこう象徴的なことであるという気がします。

本多 最近、本当に若い人たちに、シェアハウスとか、コレクティブ住宅とか、そういうことに興味を持って、逆に疑いを持たずに集まってきているように見えるけれども、本当にそのコミュニケーションの取り方、コミュニティのつくり方が、最適解なのだろうかどうなのかというのは、気になるところです。

横山 確かに非血縁関係の共同居住やコミュニティづくりについては、本物かどうか、どの程度定着するのかという点で疑問もあります。現象としては、着実に浸透し始めているように思います。これがどのような方向に進むのか、単にファッションとして一時の流行で終わるのか、逆に、新たな共同居住様式を生起し、多様な協同・協働へ向かうのか、もう少し、見守る必要がありそうですね。ただ、われわれの世代は、コミュニティと言えば、地縁を基盤にしてお互いに助け合ったり、何かを一緒に行うという密な共同性をイメージしがちですが、コミュニティ自体がもう少し手軽で楽しいものに変容しているのかも



横山俊祐

しません。

本多 新たな共同居住の背景にも、自立して、自分の死ぬべき場所は実家であるということの感覚が、かなり変質してきていることがあるように思います。人は常にだれかの助けを得なければ生きていけないという感覚の中で、それぞれのライフステージにおいて必要とする人たちとコミュニケーションを取っていくということに向かっているように見えます。

ですから、最初は下宿して、外に出て、それから結婚して、小さなマンションを借りて、あるいは購入して、子どもが大きくなれば大きいところへ移って、高齢化すれば福祉を提供しているところに助けを求めて移っていく。移ることについて、何も抵抗がなくなってきたという、家に対する感じ方が変わってきているのかなということは思います。しかし、ひょっとしたら居所を求めて追い込まれているかもしれないというのもありますね。あるいは帰るべき場所のイメージを持つことが出来なくなっているのかもしれないですね。

横山 そういう意味で、かつての戸建て住宅を上がりとする「住宅双六」は、もう成り立っていない状況なのでしょうね。

鈴木 住宅双六は、本家の上田篤先生はじめ、いろいろな方が改訂版を出されていますね。上田先生の改訂版は上りが1つではなく、都心高層マンション、外国定住、農家・町家回帰など6つになっていました。それも、違うのかもしれないですね。

横山 むしろ、住まいや住み方に関して明確な目標を設定して、その実現に向けて一直線に駆けていくといった強烈な志向が希薄になっているのかもしれないですね。住まいに関わる価値観も「持ち家絶対」「戸建て絶対」ではなく、「賃貸も気軽にいい」とか「集合住宅も楽」等々、多様化しています。まさに建前としての住まいから身の丈にあった住まいへ、住まいや住むことにハードルを設定するのではなく、個人の状況や志向性に応じて、住まいを自由に選べるようになってきているように思います。

安原 シェアハウスが盛んになったのは比較的最近ですが、寮というのは昔からありましたね。そうした住形態が住宅双六における助走期間としたら、徐々に一人前になることを強要するような社会的プレッシャーがあったと思います。シェアハウスに住み続ける若者は、そのプレッシャーを拒否しているようにも見える。そうした傾向は一般的にはネガティブなものを受け取られがちだと思います。

その一方で、人生の最後を高齢者向けの施設で迎えるとする、そっちのほうゴールですね。それらの施設に入る人たちは、現状ではほとんど主体性なく入っています。現在の高齢者住宅や施設を見ても、私自身が人生の最後を過ごしたいと思えるような建築はまったくない。そんな中で、今現在シェアハウスで抵抗なく暮らしている世代の人たちが年をとったときにこそ、仲間と住まいをシェアするなり、ゴールの部分の選択肢が

増えていく可能性があると思います。それはわりとポジティブな変化になり得るのではないかと思います。

横山 そういう意味で、シェアとか、一緒に住むという姿も、年代によってまた違うような気がします。

鈴木 親子4人家族が標準ではなくて、いろんなケースが出ています。全



鈴木 毅

然知らない人同士は無理

でも、知り合い同士と一緒に住む実例はいろいろありますよね。例えば、この間、ハウスメーカーの方が、年配の姉妹3人で住む家を頼まれたと話しておられました。以前、作家の林真理子さんが、老後、親しい物書き仲間に住むところがあつたらいいのにと書かれていました。

実際に実現したシニア向けの共同居住もいくつかありますし、今のシェアハウス世代が年をとったら、十分あり得るのではないのでしょうか。

本多 人生におけるライフステージの推移にともなって、住宅のつくり方をどこに合わせるかということは、常に不確定であり続けますね。子どもが、今、中学、高校だから、受験勉強だといって、それに合わせて住宅をつくると、竣工した途端にもう卒業してどこかに出ていく。つまり、住宅がどこにターゲットを合わせて理想的なものをつくるかという、その前提が、実は非常に危うい。

鈴木 普通の夫婦と子ども2人だったとしても、その状態は実はそんなに長くないですよ。

横山 住む相手も血縁関係を離れて多様化し、ライフステージも短期間でめまぐるしく変化して流動的になるというのが、これからもっと顕著になるのでしょうか。

住宅の計画・設計が変わる

安原 日本の住宅は、敷地がせまく空間的な制約が多いせいもあって、われわれが受けた教育では、環境や住要求に対してジャスト・フィットした建築をつくるのが上手な設計だというふうに教えられてきたのではないかと思います。でも本当は、建築ってもうちょっと余裕を持ったものであるべきなんじゃないかと思います。

鈴木 緩やかに対応できるような感じですね。

安原 ライフステージに合わせて移り住んでいくという流動性

のあるやり方もいいと思うんですが、そもそも空間的余裕がもう少しあれば、住宅の可能性はもっと広がるのではないのでしょうか。

鈴木 同じ空間で対応していくというのがありますね。住宅の領域でずっとポストnLDKはどうあるべきかという議論がありましたよね。「二公室モデル」とか、山本理顕さんの「公—私—共モデル」とか。最近思うのは、多様な生活に合わせて住宅も異なる平面形式でなければいけないというのが、われわれの思い込みだったのではないかということです。生活が変わったからといって、建築も変わらなければいけないというのは、一度考え直したほうがいい気がします。

安原 私が山本事務所にいた頃に、URの「東雲キャナルコート」が竣工しました。そのときに、鈴木成文先生をご案内した



安原 幹

んです。夫婦二人住まいを想定した55平米の住戸をご覧になった鈴木先生が、「こんなに広かったら、プランなんかどうでもいいんだよ」とおっしゃったんです。

それは、僕にはけっこうショックだった。だけど、たぶん、鈴木先生がやっていた30数平米の住戸に4～5人をどう住まわすかという時代と、家族人数が縮減化する反面、住戸面積は拡張され

ている今日とでは、プランニングの役割や方法、考え方が違ってくるのは、当然だということなのだと思います。51C型は65年前に計画されていたわけですよ。

鈴木 家族の多様さということを言ったら、たとえば、欧米のほうがステップファミリーとかもっていろいろなタイプがあるはずですが、別にそれぞれに対応した変わった平面形式があるわけではないでしょう。

ツー・ベッドルームとか基本は寝室の数で対応できているのではないか。だから、どんな家族や生活が来てもいいような住宅をしっかりとつくっておけばいいという気がします。いちいち部屋のつながり方を変えて計画する必要はないのではないかな。

もうひとつは、サラリーマン家庭や標準家族を想定した計画が確実に変わると思うんですよ。住宅の店的な機能がまた重要になってくるのではないのでしょうか。20世紀は家族が住むだけの専用住居が基本だったかもしれないけれど、今後は店とか、仕事場とか、住宅にもう一度いろいろな機能が戻ってくる可能性は十分ある。

横山 そのことは、最近増えている、外に向かってとても開放的な集合住宅の計画とも関係しているのでしょうか。角の部屋は店になるかもしれない、店になったときは、開いているほうが商売はやりやすいということを言う設計者がいます。だから、サラリーマンだけを想定しない、場合によってはお店とか何か仕事ができるような住まいが出てきたときに、それが開放化のひとつのモメントになることはありえますよね。

安原 いいと思います。

横山 その一方で、集合住宅デザインの差異化や漠然とした周辺環境や都市との連続性といったことを目的に、無節操に開くのは、結果的にカーテンやブラインドによる閉鎖化を引き起こし、逆効果のようにも思います。

安原 僕は基本的に、住宅には、外部に対して開かれた部分が必要だと考えています。ただ、常に開いていないと恰好がつかないような建築にならないように気を付けています。開こうと思ったときに開くことができるようにつくっておく。今現在の居住者にとっては、開く必然性がないかもしれないけれど、20年、30年ぐらい経ったときに、そこがオフィスになってもいいですし、あるいは、今は若い人が一人暮らしで住んでいるかもしれないけれども、30年後には高齢者が集まって住んでいるといった状態も想像する必要があると思います。そうした変化が起こると、建築の持つ意味がガラッと変わる可能性がある。建築をつくるときに、そこまでの可能性をプログラミングしておきたいと考えています。

横山 そうですね。高齢者が住むというのは、なかなか、面白いことになりそうですね。かつて鈴木成文先生などは、住まいを開くことに積極的でしたが、世の中は全然開かなかった。

鈴木 そうでしたね。まだ10年も経ってないのに本当に変わったと思います。専門家が真剣に訴えても全然変わらなかったのが、いつの間にか、居住者が自ら進んでオープンにしている感じがします。

本多 その根源に、プライバシーの概念が変質したということが言えるのでしょうか。

横山 たぶんプライバシーではないと思います。そうした開放的な住まいであっても、実際には、カーテンやブラインドで固く閉ざしていることが多い。プライバシー概念が変容して開かれた生活を希求するというよりも、むしろ、特定の層がそういう開放的でスタイリッシュな建物自体への関心を持ち始めたように思います。

素人が拓く住まい

鈴木 シェアハウスを紹介するウェブサイト「ひつじ不動産」を始めた北川大祐さんは建築出身の人ではないんですが、このウェブ上で、単に物件を紹介するだけではなく、シェアハウス

とはこういうものなのでこう住みましょうとか、大家さんになる人に向けて、シャワーは最低2つあるといいですよとか、2か月に1回ぐらいパーティをやるといいですよといった運営のノウハウを提供したりして、シェアハウスのあり方を実質的に決めた方です。建築の専門でない20代の若者がシェアハウスのコンセプトを確立し、実際に流通させたことに驚かされます。最近になってこういう例がどっと出てきた感じがします。

あとは、フランス現代思想が専門で、ブログで社会全般について興味深い発言をされている、神戸女学院大学名誉教授の内田樹さんは合気道も教えておられて、自宅を建てるときに1階に道場（凱風館）をつくってしまった（笑）。

横山 建築に直接かかわっていない人たちが、むしろ、面白い企画を出す。

鈴木 むしろかかわっていない方々が、住宅をより豊かにする実践をされている気がしますね。

安原 内田樹さんはある種の間共同体が必要だという信念に基づいてああいうことをやられていますね。

鈴木 そうですね。内田さんの住居兼道場の近所には、合気道のお弟子さんが住み始めたり、弟子同士が結婚されたりしている。お弟子さんと関係者含めて全部で200人ぐらいいるらしいんですが、その中で、しばしばお米など、いろいろ物々交換していて、GDPにはカウントされない経済現象というか、一種の地域コミュニティができていてみたいなことを書かれています。

住宅兼地域の核になる私塾みたいなものがあちこちに出来つつある感じがします。戦後日本の住宅が、住むことに特化してnLDKに定型化する中で、生産機能や出産や結婚式・お葬式など、いろんなものが全部住宅から外部に出ていったのが、また少し戻ってきているような気がします。

横山 もう一度、住宅がベースになって、公的な活動とか社会性など、いままで全部排出していた機能を引き戻し、かつての住宅がそうであったように、冠婚葬祭を含む様々な役目を包括的に有するトータル・インスティテューション化する方向に動きかけている感触があります。

鈴木 そうですね。その動きを始めているのは、建築の専門家というよりは、実践者というか、普通の人のような気がします。

本多 そういう意味では、住まいの形式というのが非常に流動化してきて、どこにでもそれぞれ固有のものが派生し得る、プロトタイプの1つになる可能性があります。

計画学から実践学へ／世間に学ぶ

安原 建築家は、常に個別のケースに対応して設計をしているので、徹底的に個別解を突き詰めればよいと考えているふしがあります。面白いクライアントがいたり、敷地や状況が普通と違っていれば、そうした資源を最大限に設計に活かせばよい。



〈凱風館〉 設計：光嶋裕介建築設計事務所（撮影：山岸剛）

一方で横山先生や鈴木先生のように建築計画学者という立場で見たとき、かつてとは違って研究よりも現実のほうが進んでしまっているという状況が起こっているように思います。これからの建築計画研究は、そうした進んだ現実との間に、どういう関係を築いていくのでしょうか。

横山 おっしゃるとおり、いまの建築計画研究は、ほとんどが実態、世間に学んでいると言えます。建築計画学が何かをつくり出しているというよりも、世の中で、これは未来につながるような動きだとか、社会を変える力になるなといったものを発見して構造化し、概念化すること、あるいは動きそのものを拡げることが建築計画学の役割かなと思っています。

鈴木 かつては、専門家による施設計画の次のプロトタイプだといわれている建物を見学に行ったし、もしくは国交省の制度でつくったモデル第1号ですとか、見学先は専門家や国が作ったものがほとんどだった。ところが最近の見学先は民間主導の事例ばかりですよ。

鈴木 ここ数年いろいろ見学した中でいちばんインパクトがあったのが、石川県の佛子園という福祉法人が作った「Share金沢」という街と、お寺を福祉施設にコンバージョンした小松市の西圓寺です。同じ福祉法人がやっているんですけども、「Share金沢」は、福祉・児童入所施設や、サービス付き高齢者住宅など、福祉ベースですが、温泉はじめいろいろな機能を盛り込んだ計画で、ものすごくいいんです。お店やドッグランもあって、新しく建設されたのに、いままで見たどんな計画住宅地よりも街らしいですよ。

それから岩手県紫波町のオガール（OGAL）プロジェクトも感心しました。公民連携ですが補助金に頼らず民間主導できちんと利益を出しているのがすごい。とにかく公共主導だった昔とは全然違ってきている。以前は専門家が「これからはこれだ」と言ってつくった施設や街を、僕らが見に行きたくて勉強したんだけど、今は、独自に興味深いプロジェクトを実践している



〈Share金沢〉（撮影：鈴木毅）

人たちが日本各地にいて、それを学ばせてもらいにいっている感じです。

20世紀は専門家や行政・国が建築や地域計画を引っばってきたんだけど、いまはもう明らかにリードする主体が交替してきていますね。

本多 社会も建築界も建築を永く「作品」として受け入れてきました。それは、その背後に作家の思想哲学を認め、それが個に属するもの、あるいは、個人の才能に負うものとして歴史を認めてきた。しかし、現代は、そういう時代から、変わってきたと言えるのかどうかという話なのでしょうか。

鈴木 そこは、本当に難しいですね。私も一応は建築の教育を受けているので（笑）、そこはやっぱり違うだろうという気持ちがなくはない。

本多 ただ、意識として、建築家の造形的な才能ということとは違うものが求められ始めてきていることは確かのように思われます。

鈴木 設計側の問題というよりも、むしろ、ユーザーやクライアントなど、いままでは傍に置かれていた人たちの中に、こういうのがほしいんだと自ら言える人が出てきたという感じがします。

本多 結局、物の考え方、アプローチの仕方が、モダニズムだとか、リージョナリズムだとか、多岐にわたりますが、啓蒙的なイズムによって語られてきたものが、ずいぶんスライドしてきているように思われます。それは逆に、ある側面からすると、非常にフレキシブルになってきたとも言えるし、より流動化し、不定型化しつつある、枠組みがなくなりつつあるという心配もあります。

安原 フィリップ・ジョンソン（Philip Johnson）がMOMAでインターナショナルスタイルやデコンストラクティビストの展覧会をやったときに、彼は建築的にある種のスタイルを見いだしたわけですね。それに対して今回の「ビエンナーレ」で、日本の建築家たちが出展した作品に、そういうスタイルとかイズムといった共通点はありません。リノベあり、新築ありだし、や

っていることは建築的にはばらばらですね。

本多 そうすると、現代のわれわれは、どこに向かうべきかというゴールを見失ったと言えるのか。あるいは、ゴールの設定の仕方がもう基本的に違うのか。そのへんが、21世紀に向けての可能性と言えるのか、いいほうの可能性もあれば、悪いほうの可能性もありそうです。

横山 そういう意味で、20世紀という時代は、ある明確な目標があって、その目標に向けて、どうやって効率的に最適に到達していくかの計画があるという、目標と計画という組み合わせだったと思うんですが、いま皆で共有できる強い目標がなくなり、むしろ個別化した目標となり、計画も、直線的であったり、最適解を求めていくようなものじゃないような気がするんです。手法も価値観も複線的で、それを実現するのにいろんなアプローチがあるような状況ではないでしょうか。

安原 さっきの本多先生の話でいうと、モダニズムにしてもデコンにしても、その時代のテクノロジーと密接に結びついていて、新しく登場した技術で可能な最新の建築表現を目指していたと思うんです。現代はもっと圧倒的にテクノロジーは進んでいますけれど、建築においては必ずしも最先端の表現をすることがいちばんいいという感じでは、なくなっているのではないのでしょうか。むしろどのあたりでとどまるか、ということが表現になっている、そんな感じがします。

鈴木 というか、われわれのころは、いつも建築についてものすごく難しい話をしていましたよね。あまりにも生活と離れ過ぎていたというか、普通の生活とは違うところで話をしてた。逆に今はかつての反動で非常に生活に近いところの話題が中心になりすぎているかもしれない。また戻るような気もしなくもないんですけどね。

建築家の職能・仕事は変わるか／組織とアトリエ

安原 私たちの世代でも、普通に設計事務所に勤めて建築家を目指すというのとは、違う方向に行った人たちがけっこういます。多くの設計者が、いい建築を設計するだけでなく、仕組みづくりも同時にやらないと、結局うまく稼働しないということを実感として持っているように思います。本多先生の世代の設計者のように、大きな計画に携わる機会は少ないですが、小さな計画の中で、自分がわりと積極的にコミットして、その後の運営にもかかわるというようなことをやっている人が増えてきています。職能そのものが変わりつつある。

横山 職能に関して言えば、昔は、建築家は設計だけという感じだったのが、最近は、企画に積極的にコミットするとか、人を集めてくるとか、使い方や運営に関わるなど、ある意味、ソフトの世界に参入することが増えています。それから、セルフヘルプやリノベーション等で実際に手を動かす世界も拓いてい

ます。

安原 一つには、とても負荷のかかる巨大な計画が、もはや少なくなったということがあるかもしれません。そうすると、何か小さなものをやるときに、空間のことだけやっても物足りないという思いがあるのかもしれないですね。

本多 若い人たちにとっては、組織への属し方によって、建築に対する態度が異なるものになるという現実があると思います。つまり、ラージファームの場合は、仕事が入ってきたら、ここを担当してくださいという話で分段的に設計が始まるわけです。基本的には受注ということが最優先になるわけです。しかし、計画や建築のあるべき姿は何かを一步立ち止まって考えてみることは、本来、均等に与えられるべき課題なのですが、スモールファームであればあるほど、切実に考えるという環境にあると思います。

安原 なるほど。

本多 というのは、普通にやっていったらラージファームに吞まれてしまうわけですから。やはり、社会に対して発信できる、何かきちとした回答があるはずだと考えざるをえない。その中には、建物を建てないということもあり得る。そういうようなことも含めて、いろんな可能性というのは、設計関係の人たちみんなに機会均等に責任が課せられていると思います。

公共から当事者へ／建築の担い方

本多 なぜそのような話をするかと言うと、クライアントが何かを決定するときに、自分の持っている土地、あるいは建築の本

来あるべき姿はどうなんだろうかというような客観的な判断を実は誰もしていないのではないかなと思わざるをえないことが案外多いのです。だれが決めているかというと、「うちの建物はもう古いから、建て直さなアカン」という決定は、専門家ではないオーナーがしている。

だから、普通の住宅にしても、自分のところはどうだろうかなと、まわ

りの人に聞けば、「もう築後40年ですか、50年ですか」と。「それはもう建て直すべきですね」という日常的な会話を通してアドバイスされ、確実なデータなしで決定され、建て替えられていくということがたくさん起こっています。こうして多くの名

もない貴重な地域資産が、補修やコンバージョンの可能性すら検討されないまま消滅し続けている。

そのへんについては、建築設計者だけではなく、もっと踏み込んで考えるべき余地は、無限に残されているんです。その現実をきちと捉える必要があるように思います。

鈴木 要するにオーナーですよね、発注者というか。ある土地・建物をどうすべきかを、誰が判断して構想し、発注するかは、いちばん重要なことで、20世紀は、その役割を主に公共が担って、社会を引っばってきたけれども、今現在、公共の力が明らかに落ちている中で、この土地はどうあるべきかを、誰かがちゃんと考えなければいけない。

これに関連して、例えば、先ほど触れた岩手のオガールもそうなのですが、最近、見に行ったら面白い施設とか、生き生きしていいなと思う場所は、全部「当事者」がつくっているという感じがするんです。

当事者というのは、その問題についていちばん真剣で切実に考えている人たちです。公共施設を市民の代理として自治体がつくるのではなく、また住民参加でもなく、その課題の当事者である市民が自分たちでつくってしまうケースが増えている。

私がこの10年くらい研究してきた、新しい街の居場所・施設タイプであるコミュニティカフェも、院内助産所も、障害者児童デイも、フリースクールも、みんな、そういう場が必要だと切実に考えた当事者が中心になって生まれています。

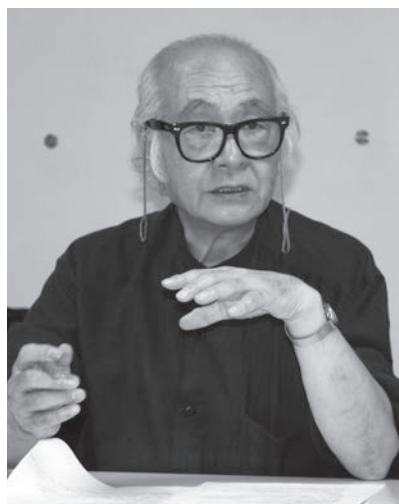
海外でいうと、がんになった人が、残りの人生を、病気に立ち向かって生き生き過ごすための施設であるイギリスのマギーズ・センター。

本多 チャールズ・ジェンクスの奥さん。

鈴木 そうです。チャールズ・ジェンクスの奥さんであるマギー・ジェンクスさんが、自分ががんと診断されたとき、治療する病院とは別に、がんになったことを受け止める場所が必要だということに気づいて、それをつくったのがマギーズ・センターです。フォスター、ゲリー、ザハなど知人でもあった有名建築家たちがボランティアで設計して、イギリスに十数カ所建設され、いまでは世界にも広がっています。小さい施設ですが、これまでになかったビルディング・タイプです、それもマギーという個人名のついた。普通ビルディング・タイプという社会制度や技術から決まるように思われていますが、マギーズ・センターの場合、個人の意思から生まれている。

建築計画は、建物を使う人＝利用者の立場・視点から建物を考えることをポリシーにしてきたわけですが、いまや問題意識のある市民は、利用者どころじゃなくて、新しい場やビルディング・タイプをつくれるんですね。地域にこういう場や施設がほしいと構想し、周囲を巻き込んで実際につくってしまう、そういう事例があちこちで出ている感じがします。

さらに、その問題・テーマについて真剣に考え続けている人



本多友常



〈マギーズ ロンドン〉（撮影：三浦研）

あるじが主となって日々目を配りながら運営すると施設はいきいきとする。

いまのところ、当事者がつくる施設は、コミュニティカフェなど小さなものが多いけれども、アーティストの中村政人さんが中学校を改修して実現したアーツ千代田3331の例もありますので、今後、様々な施設規模で、当事者といえるオーナーが計画・建設と運営に携わっていけるといいと思います。

横山 当事者が、空間や使い方の具体的なイメージをあらかじめ持ちつつ、建物を発注して、かつ、実際の運営まで自分たちで行うということですね。

鈴木 かつて、関西には旦那と呼ばれる人がいて建物や地域を一家言をもってマネジメントしていましたよね。20世紀は公共が全部やりますということで任せていたんだけど、21世紀は、現代の「旦那」が担えばいいかなと思っているのですが。

安原 建築は供給・提供されるものだという感覚が徐々になくなってきているような気がします。公共建築の設計をしているときに、役所の担当者が、「俺は施主だぞ」と言うのが、供給という枠組の典型ですよ。最近はずがにそういうことはなくなりましたが、かつては「いや、あなたは施主じゃないです。施主は市民です」と言ってしばしば戦いました（笑）。

横山 そういう意味で、公共は財源もないし、人口が減ってきて、施設は老朽化しつつもだぶついている。公共施設再編の議論もいろいろな自治体で進められていて、たぶん公共がつくる施設はこれからはあまり期待できなくて、むしろ民間がいろんな公共部分を担えるような可能性があるという気がするんです。

鈴木 そうですね。図書館だったら、最近私設のマイクロライブラリーがいろいろできています。特に「まちライブラリー」は大阪発で、カフェでも住宅でも、病院でも、本棚を置いたらそこがライブラリーになる。いま全国で400ぐらいできています。

横山 公共施設の再編が各自治体の大きな課題となって、これから、PFIや指定管理者制度を積極的に導入しようとか、施設

の数を半分にしようとか、学校を中心に複合化しようといった議論が実際に進められています。

しかしながら、最後まで、公共施設は公共が担う、面倒を見るという図式でプログラムが進んでいるけれども、そこに、先ほどの民間とか、もっと小さな規模の施設を含める、あるいは、素人の住民が自分たちで公共施設の管理者になり、運営もメンテも、さらには、転用や改修等も全部地元でやっていくという「セルフメンテナンス・セルフマネジメント型施設運営」を組み込めば、財政的な解決だけでなく、その管理・運営方法が柔軟化、多様化したり、新たな活用方法が創発される可能性があるように思います。

本多 その運営の組織、運営体のデザインは自由ということですか。

横山 そうです。

鈴木 なるほどそうかと思ったのが、2002年にNHKのシリーズ「変革の世紀 社会を変える新たな主役」で紹介されたイギリスの歴史的变化です。有名な「ゆりかごから墓場まで」という方針、国がすべて面倒みますというやり方は、実は20世紀に社会主義に対抗するために出てきたもので、それ以前のイギリスでは、各地の教会とか様々な慈善団体、いまでいうNPO的なものが福祉や医療や教育を担うのが当たり前だったということです。つまり、国や公共が全部やるという20世紀が実はかなり特殊な時代だったのかもしれないという話です。ちょうどブレア政権が「コンパクト」というNPOとのパートナーシップを進めたときで、これはある意味、元々の姿に戻ったといえるような説明でした。こういう流れからみても、これからの社会において、あるテーマについて問題意識とビジョンをもった当事者が自ら場をつくり活動するというのは自然な方向のような気がします。

横山 まったく同感です。公共の役割は徐々に小さくなっているような気がするし、そうならざるを得ないような状況もあります。

21世紀を見通すと、素人の時代というか、言葉を変えると、かつての専門家が一方的に計画して、空間を使わせしめるというようなトップダウンから、みんなが、特に、利用者を含めていろんな市民が建築を企画・計画しつくることにかかわり、さらには実際の利用や運営も進めていくボトムアップへの転換が図られるように思います。

鈴木 ただ、市民ならだれでもいいというわけではない気はするんですよ。問題意識とセンスを持っている人というのは、そう多くはないという実感もあるんです。東京大学の松村秀一さんが『ひらかれる建築』という本を書かれています。現在、自分たちでつくることができる第三世代の民主化が建築で起こりつつあるという話です。説明としてわからなくはないんだけど、少なくとも広い意味で公共性のあるものについては、だ

れでもつくれるのではなく、問題についてわかっている人、見識あるちゃんとしたオーナーが担当したほうがいいという気もするんですね。

本多 技術的に何か言う前に、きちっとした考え方を語っていただきたいわけです。処方箋としての技術的な判断は、その後についてくるものです。古いから、もうもたないからというようなことは先に出さない方がいい。そういうことではない風土をつくっていかないといけないですね。

安原 一方で、専門家以外の人たちが変わりつつある時代に、建築の専門家の教育、どういう人材を育てればいいのかというようなことも、改めて考えないといけないと思います。

建築学科の教育方法というのは、昔から変わっていないくて、もっと経済のことを教えなきゃいけないとか、いろんなことを言うてくる人がよくいるんです。けれども、そういう知識は実務を何年かやったら自然に身につきますから、むしろ、建築を通してしか身に付かない、空間の専門家としてのスキルを確実に身につけることを優先すべきだと思います。経済を教えろとか、コンピューターを早めに教え込め、というプレッシャーは、違うのではないかと思いますね。

鈴木 意識と見識のある市民が台頭してくるならば、結局、建築の専門家は、モノと空間をきちっと扱えるというのがいちばん重要かもしれません。昔は、建築計画の専門家が、調査などから市民の意向や要望を汲み取って、これから必要な建物や施設はこうでしょうと提案していたんだけど、いまや街場の当事者のほうがセンスもイメージもある時代なので、建築計画もモノに退却したほうがいいかという気もしなくはない。

安原 まあまあ、退却とは思わないんですけど（笑）。

鈴木 退却はだめです（笑）。近畿大学では、建築計画の展開として、企画マネジメントができる人材を育てようとしているのですが、その場合も、モノと空間をきちっとやれることが大事なかなと思います。

横山 モノがベースになるのは間違いないと思うんだけど、それだけじゃ、ちょっと次の時代には厳しいかなという気がします。空間の専門家であることを基本として、そこからいろんなスキルを持ち得るような、あるいは、他の領域に歩み寄ることは、重要だと思うんですよ。要するに、市民とともにとか、美しくないけれども面白いとか、恰好悪いけれども豊かだというような、何かそういう感性って育たないのかしらと思うんですけどね。

えてして、空間を中心にした建築教育をやっていくと、スマートな、恰好いいデザインに行きがちだけれども、もうちょっと社会の面白さみたいなものが読める人間が出てくるといいなと思います。



生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（イケフェス）でダイビル本館を見学する参加者（撮影：的場駿弥）

鈴木 そういえば、最近、大阪でイケフェス（生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪）が始まったじゃないですか。あれは非常に意義深い企画だと思います。

横山 あれがいいというのは？

鈴木 市民と建築の価値を共有する仕組みに育っていく期待があるからです。海外の大都市には、行政とは別に、建築を市民に伝えることをミッションにする組織があります。ニューヨークならミュニシパル・アート・ソサエティー（Municipal Art Society、市芸術協会）。ニューヨーク市自体より長い歴史があって、様々な保存運動や啓蒙活動をしています。NPOですが全然手弁当とかじゃない、きちんとした組織で、大企業たとえばシャネルの副社長が理事だったりします。マジソン街の本部にはギャラリーや図書館もあり、建築の見学会も常時やっている。ウェブサイトを見ると、いまニューヨークではこういうプロジェクトが進んでいるが、問題があるのでわれわれはこのようなカウンター案を提案しているみたいなことが載っています。市でもない、民間でもない、こうした団体がニューヨークの建築を見張っている感じがあって感銘を受けました。シカゴ建築家協会も非常にアクティブな団体です。イケフェスの発展としてこういう団体が大阪にできるといいなと思っています。

建築について市民と共有することは大切ですが、一点、建築の価値というと、歴史的由来とか蘊蓄が中心になりがちなのは注意すべきだと思います。建築家についての細かな蘊蓄ではなく、この建物のこの空間はこうなっているから意味があるんだという建築の基本的な価値を、オーナーや未来のオーナーになる人と共有することが大事なかなと思います。

日本建築協会への提言

横山 最後に、日本建築協会のこれからの役割とか、立ち位置

をどう考えていくのか、どういうふうに変わっていくのかという
ことについて、お考えはありませんか。

本多 協会の月刊誌『建築と社会』の圧巻は編集委員会の充実であり、各分野の掘り下げと、連携に広い視野を持ってきたことです。中でも若い人たちにとって、編集や発表をすることは、当事者にとっては非常に緊張する機会であり、励みを湧き起こしてくれるところでもあります。私も昔は『建築と社会』にヴァナキュラー建築をめぐる論考を27回連載させてもらったことがあり、振り返ってみると深く自分を掘り下げる機会をいただいたものと感謝しております。

現代は専門分野の壁を解きほぐしていくことに重心が移りつつありますが、若い方々がそれぞれの立ち位置を固めていくフィールドであり続けることが大切だと考えています。

横山 30代でヴァナキュラーに関する記事をお書きになった？

本多 そうですね。そういういろいろな動機の中で、単なる雑誌、月刊誌ということ以上に、影響を感じている人たちがたくさんいるだろうと思っています。そういう意味では、関西においては、非常に身近なメディアでもあったということです。

でも、いまのように、だんだん会員数が少なくなってくるというのは、ちょっと心配だということもあります。

横山 誤解を恐れずに言えば、再開発とか、大きい建物をつくるのが組織事務所やゼネコンの中心的な仕事だとすると、協会を主導しておられる方々というのは、どちらかと言えばそちのグループであると思います。ところが、世の中、小さな建物、リノベーションなどというのが、じわじわと広がっているのですが、小さな仕事をする彼らの活動を受け入れきれていないところがあるのではないのでしょうか。そういう人たちにとっても魅力のある協会になっていくと、1,000人切った会員ももっと増えるかもしれないし、それから、リノベと新築が二極化している、両者をどうつなぐかということも、大きい課題のような気がするのですが、その道筋が見えてくるかもしれません。

大きい建物をつくらないという選択肢もあるかもしれないけれども、大きい建物をつくるときに、そういう小さな建物をつくるノウハウ、考え方とか、方法が、どう生かされるかというような、何かそこでの相互通行ができると、もっと建築って面白くなるような気がします。それを、協会がつなぐ役割を果たしてくれるということの意味はありそうな気がします。

本多 そうですね。実態としては、大手ゼネコンや、大手設計事務所、各種関連企業のようなところの支援によって支え続けられているということがありますよね。だからといって、そのことを記事に反映しようという意図は、編集の側には一切ありません。ないけれども、作品掲載が有料である点では他会と同様であり、若い人たちに魅力のあるものを広げていこうという点で、ハードルを下げていく方向性でありたいと思いますね。

鈴木 先ほどの続きでいうと、建物のオーナー向けに建築の価

値を伝える試みはあってもいいのかなと思います。建築は発注者が決定的に重要ですね。設計者がいくらがんばろうが、発注内容で、建築の価値はかなり決まってしまう。いい旦那衆というか、オーナーとお知り合いだと思うので、せっかくのメディアを生かして、オーナーとその候補者に建築の価値をわかっていただくことを進めてほしいです。

もうひとつは、建物の「主」のことです。住宅でも公共施設でもコミュニティカフェでも、しっかりした主がいないと建物は死ぬんですよ。近代というか20世紀は、全部公共がやりますということで、地主とか、商店主とか、神主とか「主」を全部捨ててきたんです。ところが、ここは私が仕切っていますという主がいないと、建築や場所は生き生きしません。そういうわけで、主を育てるというのは絶対大事かなと思います。

安原 私は大阪で生まれ育って東京で仕事をしていますが、恥ずかしながら日本建築協会のことを寡聞にして存じ上げませんでした。けれども、このような団体が大阪にあるということ自体が、実は相当すごいことだと思うんです。ほかの地方都市では当然起こり得ないですし、あるマーケットなりカルチャーの厚みがあるということを端的に表しています。

大学の教え子たちにも、竹中工務店や大林組に就職して大阪でキャリアをスタートしている連中がけっこういます。彼らはひょっとすると、数年で大阪を離れてしまうかもしれませんが、こういうコミュニティでかわいがってもらえれば、その間充実した経験が積めると思います。

それと、この1冊しか拝見していないのですが、掲載されているトピックが技術的な話に特化されすぎると内向きになってしまうような気がします。今日、淀屋橋の駅からずっと川沿いを歩いてきましたが、やっぱり大阪のまちって立派だなと改めて思いました。それはわれわれの先輩の設計事務所やゼネコンの皆さんが脈々とつくってきたまち並みだと思うんです。そんな中で最近見られる「北浜テラス」のような試みは、僕が子どもの頃にはなかった動きです。貴重なまちの資産の中にああいうソフトの動きが起こっている。建築のハードだけでなく、そういうまちの使われ方などにもスポットを当てると、専門外の方にも楽しめるような内容になると思います。

横山 「建築と社会」をはじめ、建築協会自体は、わりに情報集約型、情報交換型という感じなので、そういうまちや市民に向けてのアクションみたいなことを展開していく、もう少し具体的な動きをつくっていくという「コトのデザインと実践」もあるような気がします。

鈴木 イケフェスに乗っ取られたらどうですか（笑）。

横山 どうもありがとうございました。

（2016年6月2日、株式会社安井建築設計事務所にて）

支部活動をめぐって

出席者 香西喜八郎(株式会社東畑建築所代表取締役社長、日本建築協会会長)

高松隆夫(広島工業大学工学部建築工学科教授、日本建築協会中国支部長)

篠原佳則(株式会社安井建築設計事務所名古屋事務所副所長、日本建築協会東海支部長)

長瀬博一(有限会社長瀬建築研究所代表取締役、日本建築協会京都支部長)

建築を通じたコミュニケーション

香西 日本建築協会は100周年を迎えます。100年前といえば大阪は大大阪の時代で、東京以上の人口を擁し、産業生産高も京浜を超えているような時代でした。都市が急激に膨張しますとインフラ整備が追いつかず、住環境が悪化していきます。そのような時代に、片岡安を中心に近代建築を推進した建築家のリーダー達が健全な街づくりを目的に結集し、日本建築協会が設立されました。そして建築基準法の前身に当たる市街地建築物法とか都市計画法の制定に協力、また桜ヶ丘の住宅改造博覧会を開催し「理念から実践へ」ということを推進しました。戦後もそういう流れを引かれる方々が引き続き協会を運営されました。この協会はそういう非常に重い団体であると私は認識しています。

支部活動に関しましても、戦中から支部をつくるべきではないかという意見があったようですが、1947年(昭和22)によりやく各支部がつくられました。戦後すぐに、焼土の中でよくぞやられたなと思って驚きました。まず京都、それから広島(2年後に中国支部に名称変更)、11月には兵庫、12月には九州、東海、3年後の1950年には和歌山と続きます。

その後いろいろな展開がありまして、1970年の万博の年に会員6,157人、660団体でピークを迎えました。その後、少子高齢化により会員のリタイアに若い人の入会が追いつかず、個人会員数は漸減しています。その原因は、協会の活動が鈍いということではなくて、世相の変化の影響が大きいのではないかと考えています。中でもインターネットによる新しいコミュニティの登場が影響していると思います。わ



香西喜八郎会長

れわれにとって、建築と社会をつなぐ場として、今後の協会の活動を活性化することが、「新しい地平」をめざして100周年の非常に大きなテーマではないかと思います。

特に今日は、地方創生の時代の支部のあり方が大きなテーマになると思うのです。それは、風土の違いや本部との距離という地理的な問題があらうかと思います。しかし日本建築協会として一体となり、その上で各地域の条件を生かすことが今後の課題だと思っています。

日本建築協会に続いて建築士会、建築士事務所協会、建築家協会などいろいろな団体ができました。それらは資格や職能の団体なので、それぞれ目的は異なります。その中で日本建築協会は建築士のみならず、建築にかかわるあらゆるジャンルの個人と法人が等しく正会員として集い、建築を通じた社会貢献のためにコミュニケーションを大切にしています。「街づくりに貢献」が建築協会のテーマですが、郷土づくりに貢献するにも、まず参加していただくことがスタートです。

過去の各支部さんの活動を見ていますと、やはりそういうふうと考えていらっしゃるようです。講演会、講習会、見学会等、建築にかかわる人の技術のレベルアップが市民の街づくりに対する意識の向上を誘発します。特に東海支部さんは顕著で、『建築と社会』の特集号を毎年出す、「東海の建築」という冊子を出す、2年毎に海外視察を企画する、それから建築士会、建築学会、事務所協会など他の団体とのコミュニケーションを密にやられている。この活動はとても素晴らしいと思います。

東海支部の活動

篠原 東海支部は1947年に設立されましたが、1950年代にいったん休会という話がありました。それをまた復活させているところに意義があると感じています。当時、いろいろな建築関連団体が発足していて、それらの団体に加入した上で、さらに建築協会に入ることに意味があるかということではなかったかと思っています。

東海支部の復活のポイントは、名古屋市建築局の現職の技術



篠原佳則東海支部長

部長であった一圓^{いちえんしゅんろう}俊郎氏が支部長であったことに表れているのではないかと思います。一圓さんは名古屋の東山動植物園で、重要文化財になっているガラスの温室を設計した方です。各団体は職能団体だったり業界団体だった。その中で、行政として見たとき、建築協会は街づくりなどの話ができる場として判断をされ

たのではないのでしょうか。

東海地方において、当初、建築協会、建築士会、建築学会、建築家協会の4つの団体が1つの共同事務所をつくっていました。いまは建築士会が母体で、建築学会と建築協会が委託しています。さらに、8団体連絡会が2か月に1度継続して開かれていて、その場で建築展等の行事の共催を協議するなど、互いに連携してきた歴史があります。

建築協会は、当初からの活動として、実務講習会を1956年から現在まで継続してきました。これは、建設業協会などに先駆けてやられていたようです。

先ほどの一圓先生が1978年まで支部長を歴任したあと、1979年から1992年と長きにわたって愛知工業大学の中島^{はじむ}一先生が支部長を歴任していました。そのとき、現在の活動のベースになる活動を広げてこられました。東海支部の活動を見ると、実務講習会があって、講演会、見学会がある。見学会も、1992年ぐらいから2年に1度、海外に行ったりしています。その間、15周年史から始まって35周年史まで、5年ごとに記録誌をまとめています。今回、東海支部の歴史を調べるにあたり、改めて、こういう記録は大事と思いました。

その後、設計事務所勤務の人が支部長を務めるようになってからは、記録を残すより、新たな活動をしていこうという動きが出てきたようです。いい面、悪い面があると思うのですが。新機軸を模索しており、当時、すでに本部のほうでもアンダー35とかやっていて、それを見ながら、40歳以下の会員を入れるようなことをやりました。

私はそのころ建築協会に入りました。文章を書いたり活動したりしている中で、21世紀に向けて新しい取り組みを考えてほしいという話がありました。そこで、「人にやさしい街づくり」という取り組みをやりました。愛知県が「人にやさしい街づくりの推進に関する条例」をつくったので、愛知県の星野広美さんにアドバイザーになっていただき、「『やさしさ』って何」というシンポジウムを開催したのです。事前に勉強会を何度も開き、障がい者団体の人も毎回参加してくださいました。利用者

の人にとって建築がいかに大事かということが認識できた取り組みでした。ただ、こういったことはけっこう労力がかかる取り組みです。

いまやろうとしているのは「5つの立場」を意識した取り組みです。建築を供給する、設計、施工、メーカー、行政、教育の「5つの立場」にもう一回立ち返って、その中で意見交換などをしていったらいいのではないかと思います。そう言いながら、現状では役員にも会員にも行政の方がいない。どうということかと思って、過去の役員の立場別の比率を出してみました。すると、10年ぐらい前から行政の方が減ってきていました。また、その前は教育関係の人が減っていました。今後はバランスのとれた構成にしていくべきではないかと思っています。

香西 行政に関しましては、最近の流れとして、団体の役員から公務員を引くという動きがあると伺ったことがあります。

篠原 そうなんですね。

香西 ところで、東海支部では海外ツアーを企画していますね。素晴らしいのは、必ずそこに現地の事務所訪問が入っていることです。見学するプロジェクトの時代性も的確に捉えられていて、毎年、「素晴らしいな、参加したいな」と思うんです。社長が会社を放っておいてと言われるのでできませんが（笑）。

それから、途中少し休会があったということですが、そもそも支部設立のときには、50人以上のメンバーがいないとダメだったんですね。

篠原 ええ、そうなんです。

香西 後ほど、それが100人に変わったとか。東海支部が休止になったときには基準を下回ったと資料に書いてありました。いま基準は50人だと思うんですが。東海支部はその後復帰して、80周年のときには会員が200人を超えています。

長瀬 1956年から続けておられる現場実務講習会というのは、具体的にはどんなことをやってこられたのですか。

篠原 いま講師で来ていただいているのは、清水、竹中、大林の方で、施工の仮設計画とか、現場の積算といったことです。

香西 それは、座学としてですか。それとも、どこかの現場で実際にやっているのですか。

篠原 座学でやっています。本部のほうで作ってくれているテキストを使ってお話ししていただいています。

香西 現在、全会員80名弱のうち役員数が25名とありますね。

篠原 団体会員も含めると100名ぐらいで、4分の1が役員です。団体会員として入ってくる人も役員になっています。

香西 それでは、中国支部のほうはいかがでしょう。

中国支部の活動

高松 私も今回調べて初めて知ったのですが、1947年（昭和22）、原爆被害からまだ復興途上であったときに、もう広島支部（2

年後に中国史部)をつくっています。私自身はまだ生まれていなかった(笑)。

長瀬 本当に、広島は驚きです。

高松 そのとき、会員数も200名を超えていた。すごい勢いです。昔は藤田組、いまはフジタといっていますが、広島が発祥のゼネコンの会長藤田定市さんが初代支部長になりました。昔から、広島ではフジタがいろいろな仕事をやってきたこともあって、おそらく原爆被害からの復興においても大きな力を発揮されたと思います。建築協会活動にも積極的に参加されて、当協会を広島に根づかせたということです。

それから、広島大学に建築学科がなかったので、建築協会が引っぱってきて、2年後ぐらいに建築学科を新しくつくったと言われています。

資料を見ると、10年ほどフジタの会長さんが支部長をやられて、次は、ゼネコン日興の社長古林義敦さんが支部長を引き継がれた。私が学生だった昭和40年ごろ、学会行事で日興ビルに行ったことがあります。そこには建築学会、建築協会、建築士会等の建築団体が事務所を構えていたようです。

その後、広島大学が東広島に移転をしまして、広島大学工学部の跡地に新しく情報センターがつけられました。建築学会や建築士会はそっちへ移ったのですが、当協会はそこから分かれて、ゼネコンに場所および事務代行をお願いしています。現在は山陽工業、その前は下岸建設です。会社の方に幹事をお願いするとともに事務全般にわたって支援していただいています。

最初のころには、会員数も多く当協会は積極的に様々な活動をしていたようですが、時代が進んで、広島の建築業界が必ずしも好況とは言えなくなると、各ゼネコンの広島支店があまり力を持たなくなって、何かをお願いしても、本店におうかがいを立てなければいけなくなりました。

特にバブル崩壊以後、当協会に入っていた多くの支店が退会するという事態が起きました。現在では、広島の地場のゼネコンと、大手ゼネコンの広島支店がいくつか入っていますが、非常にこじんまりとした集団になってしまいました。

私は10年前に当協会に入会しました。前支部長から「会員数も減ってきたし、大学関係の人も少ないから入ってほしい」と入会勧誘があったためです。それからいろいろな活動を見てきたのですが、あまり引き継ぎもなされないまま私が支部長を引き受けることになりました。

中国支部は来年で70周年となるほど長い間活動をしています。この座談会に向けて年配の人から情報を収集したいと思い何人かに声をかけたのですが、だれもはっきりしたことを知らないと言われるのです。事務局が転々と変わったこともあり、支部としていろいろやってきた歴史は、いまのところははっきりしないのです。今後、私どもも東海支部のような形で、10年に1回でも支部の記録を残すようにしたいと思っています。

3代目の中国支部長は建材会社の社長青盛繁男さんで、1970年ごろに建材関係で新しい動きがあったようで、10年ぐらい、毎年のように建材に関する講習会が開催されました。

私が支部長になってからは、当協会も一般社団法人となり、支部に独自の活動をするのが求められたので、支部で何をするかを議論しました。

まず手始めに、長い間実施していない「建築工事実務講習会」を開催することにしました。本部作成のテキストを使用しての講習会なので講師選定もわりあい容易でした。地場ゼネコンの若手の人などがたくさん参加してくれて、アンケートの中に「大変、役に立った」という回答が多数ありました。そこで、「実務講習会を毎年やっていこう」ということになりました。

また、「大手ゼネコンでも以前に比べれば短い期間で新入社員研修をしているので、もうちょっときちんとした研修をしたほうがいい」との意見が聞こえてきたので、「若手・新入社員技術講習会」も開催することにしました。

更に、施工に関しても毎年新しい技術が出ておりますので、その中のいくつかを選択して「中堅社員用技術講習会」としてやっていくことにしました。これら3つの「施工技術に関する講習会」を3年間継続してやってきました。毎回の参加者は30名から40名ぐらいで、安定的に参加者が見込めることから、これからも継続的に開催する予定です。

新しい耐震技術や設備関連技術などが出たときにどうしても地方では遅れ遅れになるので、設計を絡めた講習会も必要であろうということで、現在、準備をしています。次年度ぐらいから少しずつ新しい設計技術を取り入れた講習会を開催する予定です。

それぞれの職能団体も技術講習会をやっていますが、それらはほとんど会員向けに行われています。私どもの講習会には会員はほとんど来なくて、大半は会員ではない若い人です。「面白そうだから聞きにこよう」という人が見えています。そういうこともあって、当協会は幅広くいろいろな技術を普及させるには最適な協会ではないかと思っています。

香西 文化活動に関しては、われわれの団体は人材を含めて企業の支援が非常に大事ですね。日本建築協会は建築家だけではなくて、多様なジャンルの人がいるところがいいと思うんです。やはり東京一極集中で、日本建築協会は大阪に基盤があるということで、ある程度ハンディがあるのではないかと。企業の方にも理解を求めて、アピールしないといけないと思っています。



高松隆夫中国支部長

長瀬 中国支部の現在の会員は何名ぐらいおられるのですか。
高松 80周年のときには107人、50団体です。いまは33人、14団体です。

京都支部の活動

香西 次に京都支部についてお願いいたします。京都は大阪に近いのに、なぜ支部ができたのでしょうか。やっぱり京都の風土の特徴かなと思います。

長瀬 そうですね。支部をつくる目的として、地域ならではのものを発信したい、やっていきたいということが、定款の第4条にも謳われていますね。

私も、今回事務局から送っていただいた資料に初めて目を通しました。1947年にできたときのことがかなり詳しく出ていたので、当時の問題意識がわかります。計画や実施事業を見ますと、いまにも通じるようなものがたくさんありました。まず「建築の美化運動」。これは詳細がつかめていません。「無料相談所の設置」とか「都市衛生化運動」については、戦後間もなくの時代を感じます。そして、今にも通じる「耐震補強」「出版計画」「他のいろいろな文化運動とのタイアップ」などです。それから、その後も続いている「文化財の見学」などです。

京都支部ができた年には地震講演会を開催し、京都タワーの建設にもかかわられた構造の権威の棚橋諒先生に「最近の耐震構造」、京大の佐々憲三先生に「地震はいつ起こるか」という講演をしていただいています。また、西本願寺の見学などが実施されています。

支部長は4分野から出ています。初代が行政から、2代目が大倉三郎さんという教育からの方です。3代目が設計事務所からで、4代目が行政出身の方で、その次が施工関係の方です。次が行政の方、7代目がまた施工出身の方で、8代目が設計、9代目が行政。この方は京都市の都市計画局長を務められた方で、12年間務められた。次に10代目の支部長は設計事務所の方で地域計画などもご専門だった。そして私が11代目になるということを初めて知りました。私は2年目なので、まだほやほやなんですけれども。

会員数の推移を見ますと、最盛期で150名ぐらいの個人会員で、団体が31団体だった。それがここ20年ぐらいの間に6分の1ぐらいになりました。現在22名の個人会員と8団体という状態です。東海支部さんや中国支部さんの活動が活発なのを見せただくと、本当に肩身が狭い(笑)。

事務局に、過去の事業について調べてもらったのですが、20年間ぐらい、年1回の見学会と2級建築士講習会が主な事業だったということです。私もその間会員だったのですが、こういうことをやってほしい、と積極的な提言もしなかったからよくないと思うんです。そんなことやら、高齢化やら、20年間の不

況やらで会員さんが減っていったのかなと思います。

支部ができた頃、建築協会、建築士会、建設業協会の3会合同ではあるけれども、年10回ぐらいの見学会とか、役員会も年に何回か重ねたという記録もあります。そういったことをやらないとだめだと痛感しました。



長瀬博一京都支部長

60周年の京都の記念特集

号のときは私も編集にかかわったのでよく覚えています。あれを1冊出すのでもかなりしんどかった覚えがあるので、東海支部さんは毎年出されているから驚きます。経済的にもすごく勢いのある地域でもあるからそういうこともできるんだろうなと思うんです。京都支部も来年が70周年になります。それを目指して自分たちでも何かひとつぐらいやるべきだとは思いつつ、「やりましょう」という役員の方を増やさないことにはだめだなと思います。

それから、不勉強なのでお聞きしたいのですが、本部に「建築工事実務講習会」のテキストがあるのですか。

高松 そうです。5年に1度ぐらいリニューアルされるテキストがあります。

香西 非常に実用的でいいと思います。一般のテキストにはここまで書けないだろうということまで書いてあります。

長瀬 そんなにいいテキストがあるのですか。中国支部さんでは、若手・新人の技術講習会はどういったことをされるのですか。主に集まられるのは施工関係の方ですか。

高松 施工会社の新入社員に集まってもらって、現場へ出たらすぐに必要になる技術とか、安全管理に関する注意事項とか、本当に初歩的な内容です。もちろん、各企業でもやられるのですが、現場管理を長くやられた専門の人に講師をお願いして、毎年3つぐらいテーマを決めてやっておりました。

香西 講師は大事ですね。先般、東海支部の総会のときに、NHK大河ドラマ『真田丸』の題字を書いている挾土秀平さんという左官屋さんと呼ばれたんです。一般の方も来られて、とても盛況でした。

篠原 90人ぐらいでしたね。

香西 そういうときに来られた方に、会員になっていただくように勧誘すればいいと思うんです。協会の活動に参加していただければよさがわかるんですけど、最初に参加していただくのが難しい。いいコンテンツを提供して、まず来ていただくことが大事だと思います。

長瀬 現在、中国支部の会員さんは5分野おられるのですか。

高松 いえ、現在はちょっと偏っています。役所に長く勤めていた人、ゼネコンの人、教育関係では大学の先生方です。以前は設計事務所の人がたくさんおられたのですが、理由ははっきりしませんが、いまはほとんどおられません。そこで、いろいろな設計事務所の人にお話して、また返り咲いていただきたいと働きかけているところです。

長瀬 京都支部では施工分野の方の力を借りて実務講習会も出来ればと思いますし、会員には教育分野でたいへん優れた研究と実践に努めてこられた方もおられるので、そういう方に講演をしていただこうと思っています。京都はたくさん数寄屋建築がありますから、この前、第一人者の中村昌生先生に講演をしてもらいましたら、大阪からも大勢見えて盛況でした。今後、講演会、見学会、講習会などを組み合わせていきたいと思っています。

それと、京都には大学がたくさんあります。一昔前と違い家政科が住居系の学科などに変わっていますでしょう。だから大学生を相手にした企画をしては、という他の役員さんの提言もあります。本部で学生さん向けに企画しておられる委員会があるんですね。参加者数などその状況がわかればありがたいのですが。

事務局 運営委員会で、年に1回か2回、学生のために現場見学会をやっています。募集は毎回30人ぐらいですが、参加人数は物件や時期にもよるようで、20人から30人ぐらいですね。

本部と支部の一体感

香西 ところで、支部をつくるときに、支部単独で会則がありますが、協会としては別の団体のような仕組みになっているんじゃないかと思うんです。企業で考えますと、本社と支店と社則が違うなんてことはないですよ。そのへんについてはどうなのでしょう。

長瀬 会則はどの支部もほぼ同じと言っていい内容ですね。

香西 ほぼ同じなんですけれども、会則を各支部単位につくって、それが支部のルールとして成立してしまうと、本部との関係が親密になりにくいんですね。

事務局 いま、一般社団法人日本建築協会は中国支部、東海支部、京都支部で一体としての法人ですので、支部の規定についてもばらばらなものではおかしいんじゃないかということがあり、ほぼ統一した各支部の規定をもう一度作り直そうということで各支部にお願いし、統一したものになっております。

長瀬 支部は本部の運営委員会みたいなところともしっかり連携を図ってやればいいと思います。

香西 そうなんです。例えば、支部での催し物を『建築と社会』に出すといったことは改善されてきていると思うんですが、まだまだですね。支部は支部で活動しているということでもいいん

ですけれども、全体として連携がとれているか。例えば、JIA（日本建築家協会）だと各支部持ち回りで大会を行っています。われわれの活動の原点は建築を介してのコミュニケーションですね。本部と支部の交流をはかり、会員のみなさんがそれぞれ協会で得た教養や人脈を活用して、職場でそれなりに使っていたくのもいいのではないかと思うんです。

篠原 去年、『建築と社会』の東海支部特集で、『社会と建築』・東海での活動を考える」と題して3つのテーマの座談会を行いました。

長瀬 今後はそういう呼びかけをさせていただきたいですね。

篠原 本部のほうで委員会など盛んにやられているけれども、「たくさんの活動をされているな」というぐらいの認識しかありません。

香西 広報は『建築と社会』を介して密に行いたいと思います。人と人が知り合うというのが原点ですね。

高松 そういう意味では、今度の100周年大会には、中国支部からも多数参加したいと考えています。今後は3年に1回ぐらいは各支部が世話をして全国大会的な集まりをやってもいいと思います。

香西 協会は大阪中心になっていますが、そういう機会があると活性化すると思います。いろいろな催し物が全協会的な催し物であるとすれば、今回の総会などは非常にいいチャンスになるのではないかと思うんです。コアがあって、サテライトがあって、太いパイプでつながっているというかたちが望ましい。せっかくいい催し物があっても、うまくつながらないというところが改善されれば素晴らしいと思います。

会員数減少を反転させるために

篠原 会員数の減少傾向を反転させていくためには、若い方や学生にアピールするのはとても大事だと思うんです。例えばさきほど長瀬さんがおっしゃったように、京都はたくさん学校があって学生のパワーがありますから、学生に語りかけるようなことを考えていただいて参加してもらおう。支部はより地域に密接な活動が可能だと思います。

高松 建築学会大会で論文発表しなければならない学生や大学院生は、建築学会の準会員や会員になります。そのほか、資格を取ったりすると、その資格に関係する団体に入る学生はいます。そのほかの理由で学生が入会する場合としては、東海支部のように、研修とか見学会で海外などに旅行するときに、準会員になっていれば援助しますよとか、いろいろなメリットがあれば入る学生もいるかもわかりませんね。何か学生向けのイベントでもしない限り、学生で入る人は少ないですね。

当協会でするのは、学生にいろいろな賞を出していますね。戦後すぐから、工業高校とか高専の学生を表彰してい

る。それから、青年技術者の賞もあります。それらを受賞した人が協会に入ってどんどん活動していくという筋道をつくれればいい。もちろん、賞を与えるから入ってくれというわけにはいきませんが、賞をもらったら、頑張ろうと思うような団体にしたいほうがいいと思います。

篠原 そうですね。受賞したり、いつも作品を出している学校の人が、建築協会にそのまま入ることが、現状ではないかもしれませんが。

香西 たしかに、特に高校生に対してはフォローも勧誘もしていないですね。青年技術者の賞はエントリーするときに会員でないとダメなんです。だから1年は入りますが、それから続くかどうかが問題です。

篠原 賞がとれるからといって勧誘する場合は多いです。

香西 それは他の会でもそうです。いろいろなコンクールに参加するとき、メンバーであるというのが条件としてあります。

長瀬 受賞した学生は準会員になってもらいたいですね。そして就職のときに正会員になってもらえたらいい。

香西 本人も協会に関心があるわけですから、彼らが正会員になるまでコミュニケーションをはかっていくといいですね。

長瀬 先ほど、中国支部のいろいろな講習会のお話で、会員外の方がけっこうたくさん見えるということでしたね。そのとき、入会案内なんかを出されるんですか。

高松 もちろん配っていますが、入らないですね。

長瀬 入会案内を魅力的なものにするとか、何か工夫がいるかもわかりません。

高松 もう少し多くの人が参加するようになれば、会員割引とかいろいろなことをしたい。そうすれば会員になろうかということもあると思います。

長瀬 京都のある会員の方も、「何か企画をやるとき、会員増強のために入会案内を必ず配るようにするべきだ」と提案されていました。もっともだと思って、この間からそれを行っています。会員の方にも、「これに関心がありそうな人に渡してください」と言って入会案内を預けるといいですね。

篠原 東海支部の見学会はけっこうバスツアーが多かったのです。そうすると、バスを1台借りられるかどうかが問題です。当時は愛知工業大学の先生が何人かいたので、愛工大の学生が10人弱、学生料金で参加してくれていました。いまは拘束時間が長いのでバスツアーはやりにくいですね。でも、現地集合となると、今度は参加者を集める努力をしなくてはならない。愛工大の先生はずいぶん協力してくれました。東海支部は昔は準会員が何人かいたようです。でもいまはいないです。

香西 材料協会さんなんかの対応を聞きますと、会費も高い。だからメリットがないと入ってこられない。そうすると、仕事の収益につながるような催し物になっていきますね。建築家以外の個人や法人が正会員というのは建築協会だけなんです。そう



いう点からいうと、われわれは非常にユニークな団体です。ですから、メリットがあるとか会費が安いといったことよりも、建築協会に参加することによって建築界で交流を深め、自分自身を高められるということが一番ではないかと思うんです。設立当初の、街づくりに貢献するような場の提供を復活させたいものです。関西の近代建築を研究されている方には『建築と社会』の100年間の記事は貴重な情報源となっています。査読を必要とする論文発表の場として若い研究者に活用していただくことも検討し、会員を増強したいと思います。

篠原 本部の役員の名簿を見ると、必ず所属が書いてあります。あれはいいなと思います。過去の東海支部の記録ではどのような立場かわからない人がいたりするんです。どのような立場の方が会員だったのかが全員で共有できると、支部長はこういう方がやっている、さらに、建築協会全体で「5つの立場」が参加していたことが認識できます。例えば、一圓先生のような方が東海支部を復活させ、支部長として長く活躍されたことを役員や会員が認識しておくと、名古屋市に対してもっと強気で言っていいたとか（笑）、原稿依頼などもしやすくなるのではないのでしょうか。

香西 今回、URさんの特集号を出していただいたのは、そういう意味もあるんです。お付き合いの中で、『建築と社会』の存在、ひいては協会の存在が評価されるわけです。ですから、もっとセールスに行けば、先方にそれなりのことは考えていただけたと思います。

篠原 東海支部では、URの人がいま1人もいないので、参加してほしい。そうすると、歴史に基づいた新しい視点が開かれていくのかなと思います。

香西 建築協会のメンバーは、みなさんそれなりに見識のある方なので、さらに活動していただければもっと発展するんじゃないかと思っています。それにしても、やはり会員の数は非常に大事です。定年になり、ご高齢になって退会される。それに対して、次の若い方の参画が少ないので、若い人の活動を支援して、集会や見学会、コンペティション等に参加して協会の活動の価値を認めていただける人を増やしたいと思います。

本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

（2016年8月29日、株式会社東畑建築事務所にて）

第 3 部

年 表
(1917-2017)

	日本建築協会	
1917 大正6	3月30日関西建築協会設立(片岡建築事務所内) 設立委員:片岡安(初代理事長)、池田實、設楽貞雄、武田五一、波江悌夫 災害委員会・編集委員会発足 9月15日『関西建築協会雑誌』創刊 発刊の辞(09) 都市大火の危険・片岡安(09) 会報 序 本会の創立(09) 神殿建築と高天ヶ原・波江悌夫(09・11) 家相門答・葛野壯一郎(09・11) 住宅建築の改造・本野精吾(11) 名士の住宅観・村山龍平ほか(11)	
1918 大正7	都市と建築・都市研究生(01~12) 神戸郵便局の火災に就いて・波江悌夫(01) 我邦の住宅改良第一策・片岡安(02~04) 官公署に於ける建築課の独立・池田實(03) 建築の敷地に就いて・設楽貞雄(03) 座習の利害・葛野壯一郎(03) 改良住宅・今林彦太郎訳(05) 技術家とは何ぞや・直木倫太郎(06・07) 亜米利加の田園住宅・谷本多喜治(06~09) 女流住宅観(08・09・12) 建築の職業と其技術に就いて・日高胖(09) 計画と設計・波江悌夫(12)	
1919 大正8	日本建築協会と改名 会誌『日本建築協会雑誌』に改題 会誌12月号休刊 片岡安ら市街地建築物法・都市計画法制定に尽力 大阪市区改正に就いて・片岡安(01) 都市の建築・池田宏(01) 建築様式の意義を論ず・波江悌夫(03・04) 都市住宅政策・関一(05) 様式の上にあれ・村野藤吾(05~08) 住宅問題と田園都市・三宅勘一(07~10) 本邦現代住宅改良の施工法・小笠原鋤(07~10) 住宅改造・葛野壯一郎(10・11)	
1920 大正9	会誌『建築と社会』に改題 事務所移転(不動貯金銀行ビル3階) 都市計画の財政観・関一(01) 居構百選・葛野壯一郎(01~12) 大阪市区改造計画に対して・安井武雄(04) 懸賞募集改良住宅設計案審査報告・第三部委員長小笠原鋤(04) 日本庭園考・大屋霊城(04~12) 現場監督員と請負従事員・小笠原鋤(06) 論説 建築技術家の社会に対する責務・片岡安(10) 大阪都市生活の矛盾と其建築行政・池田宏(11) 建築監督官としての任務・竹内六蔵(12)	
1921 大正10	事務所移転(大江ビル37号室) 法制委員会・材料委員会発足 都市改造と民衆保健・横浜勉(01) 市街地建築物法の施行に際して・池田實(01) 法隆寺古建築に就いて・天沼俊一(01~03) 会報(住宅改造博覧会準備委員会他)(04) 住宅建築家は奈何なる態度を執るべき乎・武田五一(06) 第1・2回改良住宅設計図案懸賞募集(06・09) 論説 現代の自治生活・後藤新平(08・09) 論説 住宅改善の要諦・葛野壯一郎(10)	
1922 大正11	住宅号(09) 特別号(11) 美的対象としての建築・伊藤正文(01~04) 研究 鉄筋コンクリート其の日その日・増田清(01~05・08) 附録 住宅改造博覧会記事(07~09) 住宅改造博覧会の主命・横浜勉(09) 論説 住宅改造の急要に就いて・片岡安(09) 住宅建築に対する希望・武田五一(09) 巻頭 住宅改造博覧会と人生の改造(10) 田園都市・関一(11・12) 住宅改造博覧会を覽て・江村郊邸(11) 大阪市の電車交通に就いて・佐竹三吾(12)	
1923 大正12	事務所移転(堂島ビル3階) 都市計画委員会・教化委員会発足 帝都復興案検討 防火宣伝号(02) 移り行く大阪の偉観・内山新之助(01) 進め過群より花園へ・大屋霊城(01~06・08) 論説 建築の意義と建築家の責務・池田實(04) 論説 建築界の大勢・片岡安(07) 論説 関東大震災の教訓・片岡安(11) 都市計画の経済的基礎・チャールス・A.ピアード(12) 都市計画の根本的改造・田中清志(12)	

*「日本建築協会」欄の
()の数字は『建築と
社会』の号数を示す。



	日本（関西中心）	海外	
	大阪市都市改良計画調査会設置 都市研究会設立 日本建築士会発足 衛生工業会・日本照明学会発足 大阪市最初の小公園を6カ所開設 三越呉服店大阪支店西館（横河工務所） 橋本汽船ビル（竹中工務店）	ロシア構成主義（V. タトリン他） 『工業都市』（T. ガルニエ）出版 アルプス建築（B. タウト） エール大学設計着工（J. G. ロジャーズ） アムステルダム西部地区住宅（M. デ・クラーク）	1917 大正 6
	小住宅改良要綱答申 米騒動 日本郵船大阪支店（曾禰中條建築事務所） 大阪市中央公会堂（原案岡田信一郎、辰野片岡建築事務所） 古河商事大阪支店・三井物産神戸支店（河合浩蔵） 大阪農工銀行（辰野片岡建築事務所）	第一次世界大戦終結 水・セメント比説提唱（エブラム） ヘルシンキ都市計画（E. サーリネン） フィラデルフィア都市計画（J. クレーパー） ハリディビル（W. J. ポーク）	1918 大正 7
	市街地建築物法・都市計画法・道路法公布 日本土木建築請負業者連合会設立 福德生命保険（辰野片岡建築事務所） 大紙倶楽部（渡邊節） 横浜正金銀行神戸支店（長野宇平治） 十五ビルディング（片岡建築事務所）	イギリスの住居法・都市計画法公布 田園都市ウエルウィン基本計画（L. デ・ソアッソン） ベルリン大劇場（H. ベルツィヒ） 『ガラス建築』（A. ベーネ）出版 ワイマール国立バウハウス開校	1919 大正 8
	京都帝国大学工学部建築科設置 分離派建築会発足 大阪市社会部・都市計画部設置 生活改善同盟会発足 神戸海洋気象台（渡邊節） 日本興業銀行（長野宇平治） 三菱銀行九条支店（三菱地所） 芝川商店（宗兵蔵） 第一銀行大阪西区支店（西村好時）	国際連盟成立 第三インターナショナル記念塔計画案（V.E. タトリン） ゲーテ館（R. シュタイナー） エスプリ・ヌーヴォー誌創刊（ル・コルビュジェ、オザンファン） 「新造型主義」発表（P. モンドリアン）	1920 大正 9
	借地・借家法・住宅組合法公布 大阪市第一次都市計画事業認可 大阪市庁舎（小川陽吉、大阪市臨時建築部） 大江ビル（葛野壯一郎） 北浜ビル（宗兵蔵） 大阪中央電話局東分局（山田守） 西陣電話局（岩元禄）	鉄とガラスの摩天楼計画案（L. ミース、V. ローエ） 「都市と田園のためのホール」案（B. タウト、W. コペルト） 星の教会計画案（O. バントニング） ゾムメルフェルトの木造住宅（W. グロピウス） テュシャンダイケンの集合住宅（J. J. P. アウト）	1921 大正 10
	分離派建築会関西で作品展 内務省都市計画局設置 住宅改造博覧会 大阪毎日新聞社（片岡建築事務所） 高島屋呉服店（岡田信一郎） 日本海上保険（横浜勉） 山邑邸（F. L. ライト、遠藤新） 日本基督教団大阪教会（W. M. ヴォーリズ）	ヴォークレッソン別荘（ル・コルビュジェ） 理想都市案（R. アンウィン、P. ヴォルフ） ポツダムのアインシュタイン塔（E. メンデルスゾーン） アウト・マテネッセの集合住宅（J. J. P. アウト） 木製椅子（M. プロイヤー） ウィーンの市営住宅団地（A. ロース）	1922 大正 11
	関一市長就任 創宇社建築会結成 関東大震災 大阪松竹座（大林組、木村得三郎） 堂島ビル（竹中工務店、武田五一） 大原孫三郎大阪別邸（薬師寺主計） 中央電話局上分局（吉田鉄郎） 甲南高等学校（宗兵蔵）	ストックホルム市庁舎（R. エストベル） ルランシーのノートルダム（A. ペレー） チリーハウス（F. ヘーガー） 『建築をめざして』（ル・コルビュジェ）出版 ワイマールのバウハウス実験住宅（A. マイヤー）	1923 大正 12



大阪市庁舎
（『近代建築画譜』）



大江ビルディング
（『建築と社会』1921年10月号）



住宅改造博覧会（1922）
（『建築と社会』1922年11月号）

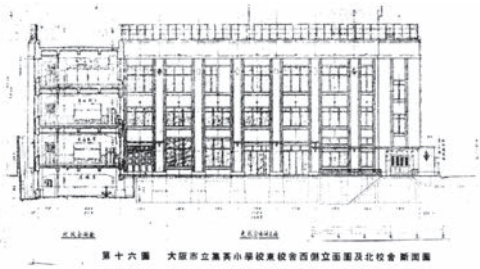
	日本建築協会	
1924 大正13	学説 コンクリートブロック・鉄筋コンクリートブロック・中村鎮(02～05・07) 論説 建築物の持つ社会的意義に就いて・伊藤正文(03) 通俗建築大講習会(04) 建築家の社会的地位・片岡安(06) 日本における住宅の変遷と其将来・武田五一(07) 論説 営繕事務統一に就いて・葛野壯一郎(11) 大江橋及淀屋橋懸賞図案概評(11) 論説「住宅」・佐藤功一(12) 郊外の土地区画整理・加藤善吉(12) 建築と社会・中尾保(12)	
1925 大正14	構造計算調査委員会発足 我建築界の進路に就いて・片岡安(01) 板硝子の今昔・磯田次郎(01) 家族を含む自画像・本野精吾(02～04) 剛節架構の湾曲力率解法考察と其研究・大野直平(02～06) 古社寺建築に就いて・天沼俊一(03) 都市計画の思想の推移・田中清志(05) 新しき建築美・山崎萬寿夫(06) アスファルトに就いて・細木松之介(09) 明治大正に於ける建築観・増山新平(10～12) 大阪ビルディング新築工事概要(11)	
1926 大正15	日本建築協会社団法人認可 事務所移転(中之島江商ビル5階514号室) ビルディング号(01) 事務所建築の経済的考察・竹腰健造(01) 法隆寺五重塔と空洞の調査研究・池田谷久吉(04) 中欧の建築に就いて・上野伊三郎(05) 住宅問題と建築技術家・片岡安(07) 建築美に就いて・石本喜久治(09) 都市計画の問題・渡邊鐵藏(11) 耐震構造上の諸説・佐野利器(11・12)	
1927 昭和2	片岡安初代会長に就任 事務所移転(大同生命ビル7階20号室) 住宅特集号(01) 震災号(04) 庭園と建築号(10) 現代文化住宅の煩惱・村野藤吾(01) 大正建築の回顧・黒田鵬心(02) 大大阪を瞥して・松室重光(03・05) 地震と家・波江悌夫(04) 懸賞論文「将来の日本の住居」募集(05) 防火と建築・片岡安(06) 協会の進むべき途と雑誌の執るべき方針に就いて・池田實(07) 日本インターナショナル建築展(12)	
1928 昭和3	都市問題号(01) 航空と建築号(07) 建展特集号(10) 博覧会建築号(12) 都市計画事業の一大危機・片岡安(01) 懸賞論文「将来の日本の住居」を読みて・古宇田実(02) 構造強度計算の変遷・八木幸次郎(03) 建築の色彩・本野精吾(05) 大阪の鉄道軌道・岡崎早太郎(06) 木造建築の保存・松室重光(08) 大阪鉄道株式会社住宅懸賞図案審査・日高胖(10) 建展と其感想・岡部顕則(10) 大阪城天守閣再建に就いて・佐藤佐(10) エベネザ・ハワード翁の計・永田生(11) 博覧会座談会(12)	
1929 昭和4	住宅委員会発足 御大礼記念号(01) 震災予防号(02) 郷土建築号(04) 小住宅研究第1集・第2集(05・06) 都市美観号(07) 貸家建築とアパートメント号(08) 林泉と庭園(10) 防火建築号(12) 震災予防と日本建築協会の使命・佐野利器(02) 大阪と郷土建築の一面・松本儀八(04) 貸家建築設計図案懸賞募集(06)・同展覧会(08) 最近世界の住居運動・伊藤正文(08)	
1930 昭和5	震火災と建築大講演会 学校建築号(02) 建築と風致号(04) 郷土建築号(06) 木造建築の将来号(07) 明日の建築号(08) 耐震耐火建築普及号(09) 工事と倉庫号(10) 建築工事とその材料号(12) 昭和4年の建築界を顧みて・安井武雄(01) クラブ建築の目的と設備に就いて・葛野壯一郎(03) 建築と風致・片岡安(04) 名古屋の郷土建築・城戸久(06) 住宅室内設備設計図案懸賞募集(07) 婦人と住宅に関する展覧会(08)	



通俗建築大講演会(1924.04)
(『建築と社会』1924年4月号)



「将来の日本の住居」懸賞論文募集(1927.03)
(『建築と社会』1927年3月号)



大阪市立集英小学校(1930.01)
(『建築と社会』1930年1月号)

	日本（関西中心）	海外	
	土地区画整理開始 大阪倶楽部(片岡安、安井武雄) 野村ビル(片岡建築事務所) 鴻池銀行本店(長野宇平治) 本野邸(本野精吾) 明治屋大阪支店(曾禰中條建築事務所) 塩野義製菓(茂野村建築事務所)	シュールレアリズム宣言(A.ブルトン) オルリーの飛行船格納庫(E.フレシネー) シュレーダー邸(G.リートフェルト) 労働者集合住宅(J. J. P.アウト) I. G. 染料会社の事務所(P.ベレンス)	1924 大正13
	第二次市域拡張 大阪都市協会設立 大大阪記念博覧会(天王寺公園、大阪城) 『新建築』創刊 京都帝国大学本部本館(武田五一) 大阪ビル本店(渡邊節) 野村証券本社(安井武雄) 大丸呉服店(W. M. ヴォーリス)	国際建築の宣言(W.グロピウス) デッサウのパウハウス開校 ヌーボー館(ル・コルビュジェ) アールデコ様式(装飾工業芸術展覧会) ブリュッセル近郊団地『現代都市』(V.ブルジョア)	1925 大正14
	伯路社建築創作所結成 御堂筋の建設開始 大林組本社屋(大林組・平松英彦) 住友ビル1期(住友工作所) 京町堀ビル(岡部顕則) 伊藤邸(宗兵蔵・大倉三郎) 江商ビル(設楽建築工務所) 大阪府庁本館(大阪府営繕課、平林金吾・岡本馨)	R.ルクセンブルグ記念碑(L.ミース、V.ローエ) デッサウのパウハウス校舎(W.グロピウス) 近代建築の五原則(ル・コルビュジェ) ブリッツジードルンク(B.タウト、M.ワグナー) プレストレストコンクリート発明(E.フレシネ)	1926 大正15
	日本インターナショナル建築会創立 金融恐慌 不良住宅地区改良法公布 第一回全国都市問題会議 大阪市集英小学校(宗兵蔵) 高麗橋野村ビル(安井武雄) 大阪中央電話局(逓信省・山田守) 芝川ビル(澁谷五郎、本間乙彦)	国際連盟本部案(ル・コルビュジェ) ワイゼンホフドイツ工作連盟主催住宅展(L.ミース、V.ローエ他) スtockホルム市立図書館(G.アスブルンド) ショッケン百貨店(E.メンデルゾーン) 聖アントニウス教会(K.モーザー他)	1927 昭和2
	総合大阪都市計画認可 聴竹居(藤井厚二) 住友倶楽部(住友工作部) 大阪鉄道省局庁舎(鉄道省工務局建築課) 長瀬産業本社(設楽建築工務所) 松坂屋大阪店(竹中工務店、鈴木楨次)	CIAM(近代建築国際会議)結成 ケルンの鉄鋼教会(O.バルトニング) ゲーテ館再建(R.シュタイナー) リヨンの住宅団地(T.ガルニエ) 雑誌『ドムス』創刊(G.ボンティ)	1928 昭和3
	鉄扉社建築会結成 大阪市改良住宅竣工(今宮) 甲子園ホテル(遠藤新) 神戸モダン寺(葛西万司) 阪急ビル1期(竹中工務店) 神戸商工会議所(古宇田實) 関西学院(W. M. ヴォーリス)	世界大恐慌 「最小限住宅」(CIAM) ソ連プロレタリア建築家協会(VORPA)結成 バルセロナ万国博ドイツ館(L.ミース、V.ローエ) バイミオサナトリウム(A.アアルト) ロヴェル邸(R.ノイトラ)	1929 昭和4
	新興建築家連盟結成 地下鉄御堂筋線建設開始 『婦人と住宅知識』刊行 中央電気倶楽部(葛野壯一郎) 生駒ビル(宗兵蔵、大倉三郎、脇永一雄) 大阪市電気局庁舎(大阪市建築課・新名種夫) 東方文化学院京都研究所(東畑謙三)	英テクトン結成 組立住宅提案(W.グロピウス) ウィーン工作連盟住宅展(L.アドルフ他) スイス学生会館(ル・コルビュジェ) クライスラー・ビルディング(W.ヴァン・アレン) ファレリス小学校と市庁舎(W. M. デュドック)	1930 昭和5



大阪倶楽部
(『近代建築画譜』)



大阪ビルディング本店
(『建築と社会』1925年11月号)



デッサウパウハウス校舎

	日本建築協会	
1931 昭和6	震火災と建築号(02) 小住宅号(04) 郷土建築号(05) 建築実務号(06) 建築と都市問題号(08) 住宅号(09) 小売店・百貨店号(10) 劇場号(12) 架構耐震論の発達・坂静雄(02) 京阪神地方住宅の調査概況・酒井勇三郎(04) 郷土建築座談会(05) 鈴蘭台・香里園生活改善懸賞募集(06)・同展覧会(12) 現代の日本建築・前田松韻(07) 大阪の区画統制の過去と現在・玉置豊次郎(08) 床及棚七種・藤井厚二(09)	
1932 昭和7	創立満15周年 協会紋章及協会員胸章決定 事務所移転(朝日ビル4階) 国防と建築号(03) 最新世界建築論説号(04) 建築法規号(05) 最近建築研究II(07) 郷土建築(08) 建築構造特集(09) 創立満15周年記念号(10) 朝日ビル素描・石田純一郎(02) 緑ヶ丘保健・大美野田園都市住宅設計懸賞募集(07)・同博覧会(10) 創立十五周年を顧みて・片岡安(10) 協会の将来を語る座談会(10) 南海ビルディング建築工事を終えて・坪井誠一(11)	
1933 昭和8	設備委員会発足 『大阪市地質調査図表』出版 住宅号(04) 社会事業建築号(05) 新興建築号(06) 都市計画I・II(08・09) 学校建築(10) 世界の建築様式の傾向・武田五一(01) 断想・中西六郎(01) 小住宅プランの研究・岡田孝男(04・06) 住宅及土地経営に関する座談会(04) 大阪市に於ける社会事業の建築・新名種夫(05) 日本建築と西洋建築との関係に就いての第一印象・B.タウト(06) 都市と都市計画・吉田信武(09)	
1934 昭和9	都市武装促進委員会発足 建築材料(02) 公園(04) 住宅(05) 住宅・アパート(06) 都市武装(07) 関西風水害(11) 建築材料の重要性・松室重光(02) 欧米住宅建築界の新傾向・岡田孝男(03) 天王寺公演の沿革と全貌・椎原兵市(04) 防盜座談会記・住宅委員会(05) ジードルンク概要・山田守(06) 大火に対する都市の防備・中澤誠一郎(07) 正倉院に就いて・高橋英治(08) 医療建築の諸問題・大倉三郎(10) 大阪市の風水害と復興・関一(11)	
1935 昭和10	室内装飾(02) ホテル(03) 法隆寺(04) 住宅(05) 新建築研究(06) 郷土建築(07) 新構造・材料・施工(08) 茶室建築(10) 停車場建築(11) 建築構造設計の本領・坂静雄(01) 関大阪市長の長逝を悼む・椎原兵市(02) 法隆寺問題の今昔・伊東忠太(04) 大阪株式取引所の設計計画に就いて・竹腰健造(06) 新建築板一種・石川純一郎(08) 近代数寄屋住宅と明朗性・吉田五十八(10) 停車場と百貨店・佐竹三吾(11) 住宅構造座談会記録・住宅委員会(12)	
1936 昭和11	住居に関する問題(05) 地方計画(08) オリンピック(10) 構造(11) 建築と社会・B.タウト(01) 日本式建築の反省・大倉三郎(04) 標準住居と我国の住居水準・西山卯三(04) 我国最初の都市計画一団地の住宅経営・加藤善吉(05) 大阪市立美術館・富士岡重一(06) 水都景観・元良勲(06) 昇降機に就いて・設備委員会(07) 都市計画と地方計画・片岡安(08) 建築士法案一考・山口儀三郎(09) 都市に於ける公益企業としての住宅経営・日本建築協会(11)	
1937 昭和12	交通建築特輯号(03) 近世日本建築文化運動特輯号(06) 建築に於ける日本的性格特輯号(07) 住宅特輯号(08) 防空建築・田辺平学(01) 建築と社会とを語る座談会(03) 茶室・澤島英太郎(04) 工業学校の建築教育・中野順次郎(05) 新日本文化運動と日本工芸・上野伊三郎(06) 大阪府下に於ける住宅経営地調査・都市計画地方委員会(07) 住宅施工の合理化・矢田鉄造(08) 建築士と官庁建築技術者・堀越三郎(10) 事務所に於ける設計事務・池田宮彦(10)	



大美野田園都市(1932.07)
 (『建築と社会』1932年7月号)



B.タウト寄稿
 (『建築と社会』1933年6月号)



建築と社会とを語る座談会
 (『建築と社会』1937年3月号)

	日本（関西中心）	海外	
	満州事変勃発 大阪城公園開園 日本綿業会館(渡邊節) 伊藤萬商店(小笠原建築事務所) 姫路公会堂(置塩章) 京都市役所(武田五一、中野進一) 朝日ビル(竹中工務店、石川純一郎) 大阪城復興天守閣(大阪市、大林組)	高層ビルの発達 エンパイアステートビル(R. H. シュレヴ、A. ハーモン、T. ラブ) サヴォイ邸(ル・コルビュジェ) ヴィクトリーハウス(E. ルチェン) バルセロナのアパート(J. L. セルト)	1931 昭和6
	日本青年建築家連盟設立 日本学術振興会創立 京都洛東アパート(土浦亀城) 南海ビル(久野節) 大阪歌舞伎座(大林組、黒田茂、小田島兵吉) 大阪パンション(村野藤吾) 聖母女学院(レイモンド・サイキス建築事務所)	国際主義(近代国際建築展) ソ連建築家同盟(SAA)結成 パリ国際建築協議会設立 私立パウハウス再建 ベルタ競技場(P. L. ネルヴィー) フィラデルフィア貯蓄銀行(G. ハウ、W. L. スカース)	1932 昭和7
	B. タウト来日 日本インターナショナル建築会解散 大阪ガスビル(安井武雄) 自泉会館(渡邊節) 大阪三井ビル(高橋貞太郎) 京阪デパート(石本喜久治) 大礼記念美術館(前田健二郎) 淀屋橋・大江橋(大阪市)	ベルリンパウハウス閉鎖 アテネ憲章(CIAM) マーケットホール(E. トロハ) パイミオの結核サナトリウム(A. アアルト) 夏の家(A. レーモンド)	1933 昭和8
	法隆寺昭和大修理 関西建材会設立 室戸台風襲来 松坂屋大阪店1期(鈴木禎次) 京都ドイツ文化研究所(村野藤吾) 白鶴美術館(竹中工務店) 琵琶湖ホテル(岡田信一郎) 大阪府立夕陽丘高等女学校(木子七郎)	ハーグの美術館(H. P. ベルラーヘ) ベラヴィスタ団地(A. ヤコブセン) ロンドン動物園ペンギンプール(テクトン・グループ) ド・ランシイのラ・ミュート都市(E. ポオドゥン他)	1934 昭和9
	関一市長死去 建築統計調査開始 そごう百貨店(村野藤吾) 京都朝日会館(石川純一郎) 大阪株式取引所(長谷部竹腰建築事務所) NHK大阪中央放送局(渡邊仁建築工務所) 国鉄奈良駅本屋(柴田四郎) 帝塚山学院(岡部顕則)	AE コンクリート開発 ハイポイントアパート(テクトン・グループ) ベル地区の実験学校(R. ノイトラ) ヴィープリ市立図書館(A. アアルト) パリの国有動産保管庫(A. ペレー)	1935 昭和10
	日本工作文化連盟結成 日本音響学会設立 防火防空建築物普及 B. タウト日本を去る 大阪市立美術館(大阪市建築課、阿部美樹志) 三菱銀行船場支店(三菱地所部) 都ホテル本館(村野藤吾) 三井銀行大阪支店(曾禰中條建築事務所)	ヘルシンキの自邸(A. アアルト) オルヴィエトの格納庫(P. L. ネルヴィー) カウフマン邸(落水荘)(F. L. ライト) マドリッドの住宅(R. ベルガミン) ブリストルの展示住宅(M. ブロイヤー、MARSグループ)	1936 昭和11
	国産網入ガラス実用化 都市学会研究会設立 御堂筋道路完成 大阪宇治電ビル(長谷部竹腰建築事務所) 乾邸(渡邊節) 大阪市立電気科学館(大阪市経理部営繕課) 京都電灯会社(武田五一) 阪急西宮球場(阿部美樹志)	パリ万国博覧会 「建築の工業化」(CIAM) ロックフェラーセンター(W. K. ハリソン) パリ万国博日本館(坂倉準三) 『中世の伽藍の白かった時』(ル・コルビュジェ)出版 パリの国立近代美術館(A. オーペール)	1937 昭和12



日本綿業会館(渡邊節、1931)
 (『建築と社会』1932年7月号)



大阪ガスビルディング
 (『建築と社会』1933年7月号)



そごう百貨店
 (『近代建築画譜』)

1917
 1918
 1919
 1920
 1921
 1922
 1923
 1924
 1925
 1926
 1927
 1928
 1929
 1930
1931
 ↓
1937
 1938
 1939
 1940
 1941
 1942
 1943
 1944
 1945
 1946
 1947
 1948
 1949
 1950
 1951
 1952
 1953
 1954
 1955
 1956
 1957
 1958
 1959
 1960
 1961
 1962
 1963
 1964
 1965
 1966
 1967
 1968
 1969
 1970
 1971
 1972
 1973
 1974
 1975
 1976
 1977
 1978
 1979
 1980
 1981
 1982
 1983
 1984
 1985
 1986
 1987
 1988
 1989
 1990
 1991
 1992
 1993
 1994
 1995
 1996
 1997
 1998
 1999
 2000
 2001
 2002
 2003
 2004
 2005
 2006
 2007
 2008
 2009
 2010
 2011
 2012
 2013
 2014
 2015
 2016
 2017

	日本建築協会	
1938 昭和13	防空と建築展 都市防火講演会 木造都市防火改修方法 非常時に直面する新春の建築界・片岡安(01) 時局下に希望をもつ・大倉三郎(01) 都市の型(Civic Patterns)・トーマス・アダムス・亀井幸次郎訳(03) 武田博士を憶う・片岡安、大倉三郎、新名種夫ほか(04) 大阪市地下鉄新線に就て・伊藤和夫(06) 戦時下の建築界断想・大倉三郎(09) 日本民家の防火構造に就て・藤原義一(11) 本年度住宅建築界の回顧・小林清(12)	
1939 昭和14	時局と建築材料展 忠霊塔に関する講演会 仰新年有所感・大熊喜邦(01) 本年度建築界に関する諸問題・松本儀八(01) 満洲の建築・白石博三(02) 古典建築の色彩に就て・瀧澤眞弓(03) プルーノ・タウト教授の追憶・上野伊三郎(04) 連載・古建築新抄・藤原義一(04～12) 「あるぜんちな丸」を見て将来に対する希望・松田軍平(08) 船内装飾私見・向井寛三郎(08) ニューヨークの万国博の建築(09)	
1940 昭和15	建築文化展覧会 満州移民住宅の研究 空襲に関する講演会 皇紀2600年を迎えて・片岡安(01) 連載・古建築新抄・藤原義一(01～12) 節電と大建築物・毛呂喜平(04) 言葉より見たる»塔婆«・瀧澤眞弓(07) 昭和十五年五月落成の四天王寺五重塔に就いて・天沼俊一、政岡基次(07) 工場建築の2つの行き方・東畑謙三(08)	
1941 昭和16	市民防空壕展覧会 戦時体制下の建築展覧会 防空壕築造指導 連載・古建築巡礼、茶室巡り・岡田孝男(01～12) 都市の性格に於ける世界的と日本的・長谷川如是閑(01) 住宅基本空間に対する一考察・西山卯三(04) これからの住宅と生活用具・豊口克平(04) 軍艦「沖の島」神殿に就いて・藤島玄治郎(06) 南方共栄国内の建築設計に就いて・東畑謙三(08) 防護室構造に関する力学の問題・坂静雄(12)	
1942 昭和17	25周年記念菖蒲池厚生住宅展覧会 建築と防空展覧会 最低限生活の要請と建設住宅の基準・西山卯三(01) 竹筋「コンクリート」の学術的研究・岩田恒(02) 施行細則(市建法)の改正・川勝建二(04) 二十五年回顧と変遷を語る・座談会(05) 日本建築家の模倣する力と創作する力・山田守(09)	
1943 昭和18	南方建築展覧会 女性と住生活展覧会 建築界の展望・本野精吾(01) 法隆寺と桂離宮と・谷口久正(03) 隣組共同施設を中心とした「女性と住生活」展覧会・報告(05) 戦時の家具の問題・剣持勇(11)	
1944 昭和19	会誌『建築と社会』3月号をもって休刊 4月号以降『建築雑誌』に統合 大東亜戦争第三年目の新春を迎えて・片岡安(01) 家具は如何に標準化されるか・豊口克平(01) 建築と社会を戦いに送る・編輯幹事会(03) 決戦態勢、工場管理、工場施設・川喜田煉七郎(03)	



25周年記念菖蒲池厚生住宅展



『建築と社会』終刊号
(1944年3月号)

	日本（関西中心）	海外	
	国家総動員法公布 日本生命本社（長谷部竹腰建築事務所） 京都競馬場（安井武雄） 第一生命館（渡邊仁） 東京女子大学チャペル（A. レイモンド） 強羅ホテル（土浦亀城）	タリアセン・ウェスト（F. L. ライト） ダンテウム（J. テラーニ） フィンズペリー保健センター（テクトン）	1938 昭和13
	滋賀県庁舎（佐藤武史） 神戸三越百貨店（横河工務所） 若狭邸（堀口捨己） ニューヨーク万博日本館（山脇巖） 『日本美再発見』（B. タウト）出版	第二次世界大戦（～1945） ニューヨーク世界博 ニューヨーク近代美術館（S. ゴットウィン）	1939 昭和14
	日独伊三国同盟 橿原神宮駅（村野藤吾） 四天王寺五重塔（天沼俊一） 生駒山航空道場（石川純一郎）	スtockホルム火葬場（E. G. アスプルンド） ポーソン邸・カール邸（R. ノイトラ）	1940 昭和15
	真珠湾攻撃、太平洋戦争（～1945） 岸記念体育館（前川國男） 山口画伯邸（吉田五十八）	『空間・時間・建築』（S. ギーディオン）出版 オルチペログ納庫（P. L. ネルヴィ）	1941 昭和16
	大阪人絹会館（渡邊節） 甲子園竹中寮（竹中工務店） 大東亜建設記念造営計画コンペ（丹下健三）	ローマ博覧会 ブラジル教育保健省舎（O. ニーマイヤー） ジョンソン邸（P. ジョンソン）	1942 昭和17
	川西航空甲南工場（竹中工務店） 在バンコック日本会館コンペ（丹下健三）	グランブルック芸術大学博物館・図書館（E. サーリネン） 『存在と無』（J. P. サルトル）出版	1943 昭和18
	『国民住居論攷』（西山卯三）出版 『建築雑誌』『新建築』休刊	シカゴ新バウハウス、シカゴデザイン研究所として新発足	1944 昭和19



タリアセン・ウェスト



東京女子大学チャペル



橿原神宮前駅

	日本建築協会	
1945 昭和20	建築学会との合併は延期と常務会で決定	
1946 昭和21	片岡安会長死去、竹腰健造会長就任 復興住宅展覧会(天王寺)	
1947 昭和22	『建築と社会』1・2号として3月に再刊 都市復興講演会 大阪市公館懸賞入選図案展示会 就任に際して・竹腰健造(01, 02) 我が日本建築協会「かくありたい」・小崎修(01) 新しい住生活・羽仁説子(06~08) 住宅復興とこれからの住生活・藤田金一郎(06~08) 復興設計当選案・天王寺区・西山卯三(03~05) 復興設計当選案・南区・石原正雄(03~05)	
1948 昭和23	天神橋大阪建設会館に分室設置 1~6月の間会誌の発行途切れる セメント新規格講習会・教育委員会 建築制限規則説明会 特集・復興建築作品紹介(02) 古民家随筆・藤原義一(01) 住宅設備・伊藤正文(01) 座談会・これからの建築はどうあるべきか・竹腰健造他9名(02,03)	
1949 昭和24	これからの住宅展 建築士法草案説明会 実際すぐ役立つ鋼構造の講習会・教育委員会 京都博覧会と鴨川踊見学会 大阪復興特集(01) 復興計画ヲ語ル(01) 復興はこれでよいか(01) 「色彩構成」について・伊藤正文(03) 法隆寺災す・中村直勝(03) 建築材料に関する座談会(04) 建築に附帯する設備座談会(05) 学制改革と建築学科・白石博三(12)	
1950 昭和25	伸びる住宅展覧会 建築新法令講演会 近畿法規委員会設置・法制委員会 神戸博覧会及びアメリカ博覧会見学会 地震常識に関する講演会・災害(調査)委員会 建築士法草案について(01) 建築基準法草案・建設省住宅局(02) 座談会・名古屋の建築を語る(03) 座談会・京都の新建築を批評する(05) これからの婦人の服装と住宅・河合玲(04) 美しい京都・森田慶一(09)	
1951 昭和26	プラスチックについての講演会 建築講習会・教育委員会 南海球場見学会 建築設計はどうすれば良くなるか(01) 住宅金融公庫について・竹内佐平治(01) 平凡・異常・石川純一郎(03) アメリカ通信・大林芳郎(04) 志摩観光ホテルの設計について・村野藤吾(07) 建築を志す学生諸君へ・東畑謙三(08) 建築——材料と設計・竹腰健造(09)	



大阪市天王寺区公館地区復興
設計当選図案／西山卯三



西山卯三氏出品
建設型模型
これからの住宅展

	日本（関西中心）	海外	
	太平洋戦争終結	第二次世界大戦終結 サン・ディエ都市計画(ル・コルビュジェ) コミュニティの再建(W.グロピウス) 『有機的建築に向けて』(B.ゼーヴィ)出版	1945 昭和20
	神戸サッスーンアパート(武田健三)	ジェファーソン記念碑(E.サーリネン) マイモニテス健康センター(E.メンデルゾーン)	1946 昭和21
	紀伊国屋書店(前川國男) 『これからの住まい』(西山卯三)出版 『ヒューマニズムの建築』(浜口隆一)出版	バルカン自邸(R.バルカン) プロイヤー自邸(M.プロイヤー) 『理想的ヴィラの数学』(C.ロー)出版	1947 昭和22
	東京裁判 藤村記念館(谷口吉郎)	モリス商会(F.L.ライト) フォード自動車会社(L.カーン) トリノ展示場(P. L. ネルヴィ) 『中心の喪失』(H.ゼードルマイア)出版 ドリップ・ペインティング(J.ポロック)	1948 昭和23
	京都公楽会館(村野藤吾) 慶応大学学生ホール(谷口吉郎)	ガラスの家(F.ジョンソン) 実験住宅(C.イームズ) 映画『摩天楼』(K.ヴィダー)	1949 昭和24
	大阪高島屋(坂倉建築研究所) 八勝館御幸の間(堀口捨己) 立体最小限住居(池辺陽)	朝鮮戦争勃発(1953年休戦) ファンズワース邸(M. V. ローエ) リホルム(A. ヤコブセン)	1950 昭和25
	大阪女学院(W. M. ヴォーリズ) 志摩観光ホテル(村野藤吾) 阪急航空ビル(竹中工務店) 鎌倉近代美術館(坂倉準三) 森邸(清家清) リーダーズダイジェスト東京支社(A.レイモンド)	繭の家(P.ルドルフ) ゼネラルモーターズ技術本部(E.サーリネン)	1951 昭和26

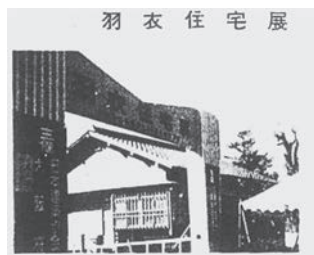


志摩観光ホテル



大阪女学院

	日本建築協会	
1952 昭和 27	日本建築協会35周年 建築協会35周年記念羽衣住宅展示会 これからの住宅展 沖縄事情講演会35周年記念大講演会 リヒアルト・ノイトラ講演会 ノイトラの、ライトの・村野藤吾(07) 広島平和記念陳列館を施工して・橋本定(06) 法隆寺復原問題・藤原義一(10) 法隆寺復興・外論そのオーソドックスとパラドックス・滝澤眞弓(10)	
1953 昭和 28	『建築と社会』特集号体制(05以降) 創立35周年記念史(12) 燃えない都市建築展共催 座談会 これからの建築技術の学校教育はどうあるべきか(02・04・07) 「学校教育座談会」摘要・鷺尾健三(07) 近代建築構造の発展・横尾義貫(08)	
1954 昭和 29	第1回コンクリート技能講習会 ワルター・グロピウス講演会 日本におけるグロピウス(10) 欧米建築こぼればなし・尾崎久助(02) 地盤と基礎特集(05) 村野藤吾、岡橋作太郎、小川正、三氏鼎談(07)	
1955 昭和 30	日本における建築的伝統(01) コンクリート(02) 住宅問題と住宅経営(03) 設計システム(05) 部門別建材(09) 建築設備工事分離発注問題(11,12)	
1956 昭和 31	近畿建築会館新設と同時に事務所移転 講演会・軽量鉄骨構造について 都心の団地計画(04?)	
1957 昭和 32	建築のライフ(04) ライトのいう建築のライフ・増田友也(04) 原子力実験室における建築の問題・A. D. Mackintosh、室井修訳(05) 地下工法に関する座談会・森田紀元、小泉昇、百々稔ほか、司会：政岡基次ほか(09) 座談会「婦人と住宅—大阪の婦人団体と語る」・河盛アイほか、司会：西山卯三ほか(10) 建築儀礼について—民俗学の立場から・林宏(12)	
1958 昭和 33	尾崎久助会長就任 城(09) 正月随想：関西の建築歴史を語る・今林彦太郎、鷺尾九郎、大倉三郎ほか(01) 森田慶一・瀧澤眞弓両教授対談記 分離派建築会前後(03) ジオデシック・ドームについて—その設計者バックミンスター・フラー氏にきく(05)	



羽衣住宅展示会



近畿建築会館

	日本（関西中心）	海外	
	第一生命ビル(竹中工務店) 広島平和会館(丹下健三) 日本真珠会館(光安義光)	ユニテ・ダピタシオン・マルセイユ(ル・コルビュジエ) レパーハウス(S.O.M) セイナッツァロ町役場(A.アアルト)	1952 昭和27
	富士フィルム大阪ビル(東畑建築事務所) 新阪神ビル(竹中工務店) 東京厚生年金病院(山田守)	MIT オーデトリウム(E. サーリネン) イェール大学アートギャラリー(R. カーン) CIAM 第9回開催	1953 昭和28
	近映会館(村野藤吾) 倉敷紡績本社新館(浦辺鎮太郎) 世界平和記念聖堂(村野藤吾) 神奈川県立音楽堂(前川國男)	ウルム造形大学(M.ビル)	1954 昭和29
	三和銀行本店(山下寿郎) 伊丹市庁舎(久米建築事務所) 八雲小学校(吉武泰水) 羽田国際空港(松田・平田建築事務所)	MIT 礼拝堂・講堂(E. サーリネン) IIT 建築科教室(M.V. ローエ) ミラノ近代美術館(カルデラ)	1955 昭和30
	二代目通天閣(内藤多仲) 神戸新聞本社ビル(村野藤吾) 松井田町役場(白井晟一)	シャンデガール最高裁判所(ル・コルビュジエ) CIAM 解散・チームX 始動	1956 昭和31
	東海村原子炉点火 なべ底不況(～1958) 南海会館(坂倉準三) 岡山県庁舎(前川國男) 倉吉市庁舎(岸田日出刀、丹下健三) 近鉄百貨店阿倍野店新館(村野藤吾) 新桜橋ビルディング(日建設計工務)	ソ連世界初人工衛星スプートニク1号打ち上げ ブラジリア・コンペ当選案(L. コスタほか)	1957 昭和32
	東海道線特急こだま運転開始 大阪新歌舞伎座(村野藤吾) 新朝日ビル(竹中工務店) 東京都庁舎(丹下健三) 善照寺本堂(白井晟一) 東京タワー(竹中工務店、内藤多仲) 国立競技場(建設省関東地方建設局)	米人工衛星エクスプローラー1号打ち上げ パナナムビル(W. グロピウスほか) トーレ・ヴェラスカ(BBPR) シーグラム・ビル(L.M.V.D=ローエほか)	1958 昭和33



世界平和記念聖堂

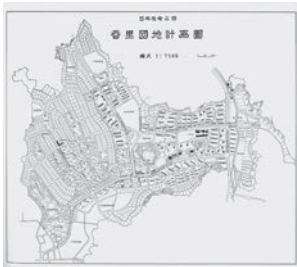


二代目通天閣



新歌舞伎座

	日本建築協会	
1959 昭和34	竹腰健造(01) 都市計画——大阪の場合(06) 大正時代の大阪を語る・置塩章ほか(01) 香里ニュータウンの紹介・諫早信夫(03) 座談会 日本の現代建築の形成過程をめぐって・西山卯三、光安義光ほか(04) 座談会 西長堀アパートの壁画を中心として・吉原治良、白髪一雄ほか(04) 座談会 建築におけるローカリティについて・足立孝、浦辺鎮太郎ほか(12)	
1960 昭和35	原子力利用施設(02) 公共住宅(11) 近代建築調査報告(01～1965年02) 対談 デザインの曲がり角・吉阪隆正、足立孝、司会：浦辺鎮太郎(03) 座談会：伊勢湾台風について・塚本猛次ほか(03) 欧州のアパート建築・池田宮彦(04) しのびよるロマンティズム・村野藤吾(08) 海外の近代建築アンケート・東畑謙三、黒川紀章ほか(10)	
1961 昭和36	居留地建築(02) 長谷部鋭吉(03) インテリア(05) 自動車と建築(06) 建築と企画(08) 日本近代建築運動史(12) 座談会 長谷部鋭吉氏とその周辺を回顧する・置塩章、村野藤吾ほか(03) 生活におけるレクリエーション・今和次郎(09) 今後の建設産業のあり方・銭高輝之(10) 労務者不足問題——建設労働者の現状分析・岸田成計(10)	
1962 昭和37	創立45年記念事業報告・記念講演会講演記録 講演：竹腰健造・松下幸之助(12) 都市計画(01) 公害(10) 社会福祉施設(12) 都市計画についてのイメージ——人物論を通じて・堀新次ほか(01) 世界計画者としての建築家・R.B. フラー(02) 名古屋座談会 街造りの現状と将来・一円俊郎、城戸久ほか(03) 匿名座談会 積算・見積裏話(06)	
1963 昭和38	社会教育の場と建築(05) 金属外装(08) 新しい空気調和設備(09) 地下街(10) 建築と芸術(11) 座談会 建築技能者教育・川岸繁夫ほか、司会：福岡正(01) 職人シリーズ(01～1965年03) 大阪のキタとミナミ・東孝光ほか(04) 尼崎の結婚式場・田代正尚(05) 音楽喫茶・岸本幸臣(05) 金属外装について・山根正次郎(08) 今井兼次先生とガウディ・岡橋作太郎(11)	
1964 昭和39	東畑謙三会長就任 プレハブ住宅(02) オリンピック競技施設(09) 交通施設(10) 米国都市の新しい顔(FORUM'63Augより米国都市再開発の現状紹介)(01) 対談 外部空間の構成・芦原義信、神代雄一郎(03) 座談会 設計者と施工者との間に横たわる諸問題・山本純孝ほか(06) 地価安定アンケート(08)	
1965 昭和40	尾崎久助(01) 人間工学(05) 建物と騒音(10) 中小企業団地(11) 医療施設(12) 近代建築調査委員会報告——解散の辞を兼ねて・瀧澤眞弓(02) 第1回日本建築祭の概況(02) 新しい技能工シリーズ(04～1966年03) 開発と文化財・浅野清(06) クラスメート(06～1972年10) 書評 西山卯三さんの“住み方の記”・今和次郎(08)	



香里団地計画図
(『建築と社会』1959年3月号折り込み地図)



「大阪のキタとミナミ」
(『建築と社会』1963年4月号)



連載：クラスメート
(『建築と社会』1965年6号)

	日本（関西中心）	海外	
	伊勢湾台風 大阪能楽会館(竹腰健造) 佳水園(村野藤吾) 大多喜町役場(今井兼次) 比叡山国際観光ホテル(圓堂政嘉ほか) 国立西洋美術館(ル・コルビュジエ)	キューバ革命 ラ・トゥーレット(ル・コルビュジエ) グッゲンハイム美術館(F.L. ライト)	1959 昭和 34
	日米新安保条約調印 大阪市立博物館開館 関電ビル(竹中工務店) 京都会館(前川國男) 電通大阪支社(丹下健三) 倉敷市庁舎(丹下健三) 明石天文学科学館(京大建築研究協会) 輸出繊維会館(村野藤吾)	チリ地震 米原子力空母エンタープライズ進水 ローマオリンピック開催 セイナヨキの教会(アルヴァ・アアルト)	1960 昭和 35
	大阪環状線全通 第2室戸台風 本町ビル(日建設計工務、今井兼次) 大和文華館(吉田五十八) 東京文化会館(前川國男) 群馬音楽センター(A. レーモンド) 大原美術館分館(倉敷レイヨン営繕部)	ガガーリン人類初の宇宙飛行 マンハッタンのジオデシックドーム(R.B. フラー)	1961 昭和 36
	日本26聖人殉教記念施設(今井兼次) 新阪急ビル(竹中工務店) 尼崎市庁舎(村野藤吾) 軽井沢の山荘(吉村順三) 天王寺民衆駅(安井建築設計事務所ほか) 新住友ビル(日建設計工務) 日本生命本館(日建設計工務)	コロンビア大地震 キューバ危機 TWAターミナルビル(E. サーリネン) ダレス国際空港ターミナル(E. サーリネン)	1962 昭和 37
	関西電力黒部川第四発電所完成 三井三池三川炭鉱炭塵爆発 文楽協会設立 梅田吸気塔(村野藤吾) 日生劇場(村野藤吾) 大名古屋ビル(三菱地所) 倉敷国際ホテル(浦辺鎮太郎)	米ケネディ大統領暗殺 ベルリン・フィル(H. シャロウン) レスター大学工学部(J. スターリング) 母の家(R. ヴェンチュリー)	1963 昭和 38
	オリンピック東京大会開催 新潟地震 屋内総合競技場(丹下健三) 東京カテドラル聖マリア大聖堂(丹下健三) 枚岡市庁舎(坂倉準三) 大阪共済会館(菊竹清訓) 甲南女子大学(村野藤吾)	アラスカ地震 カステルヴェッキオ美術館(C. スカルパ) ゲートウェイ・アーチ(E. サーリネン) プラグイン・シティ(P. クック) ウォーキング・シティ(ロン・ヘロン)	1964 昭和 39
	明治村開村 名神高速道路全通 カトリック宝塚教会(村野藤吾) 戎橋ブランタン(村野藤吾) 御堂ビル(竹中工務店) ロイヤルホテル(吉田五十八) 大学セミナーハウス(吉阪隆正)	米・北ベトナム爆撃開始 シーランチ・コンドミニアム(C.W. ムーア) ギルド・ハウス(R. ヴェンチュリー) ソーク生物学研究所(L. カーン) レッティ蠟燭店(H. ホライン)	1965 昭和 40



本町ビルディング・フェニックスモザイク

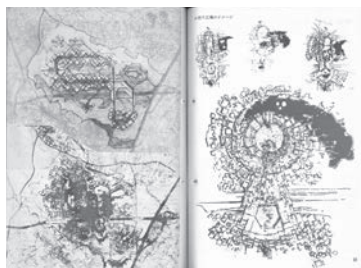


梅田吸気塔



屋内総合競技場

	日本建築協会	
1966 昭和41	建具金物(04) 万国博会場計画(08) 最近の地下工法(10) 市街地改造(11) 新しいスタイルの地下街——Santica Townのすべて・森本泰好(02) 空調設備裏話——空調設備設計施工上の失敗談とその対策(03) 違反建築防止アンケート(06) 万国博と建築・東畑謙三(08) 1970年万国博の会場計画・西山卯三(08) 建築工事に伴う公害クレーム(苦情)処理事例アンケート調査について(12)	
1967 昭和42	日本建築協会創立50周年 『建築と社会』版型A4に変更 村野藤吾氏文化勲章受章お祝いの会(建築6団体有志) 日本建築協会50周年記念号(03) 都市と流通空間(05) モントリオール万国博(08) 最近の外装(10) 岡山城再建なる(02) 合理性と伝統美のある住まいを・松下幸之助(04) 私の見る建築観・佐伯勇(04) 大阪城公園内に建つ休憩所デザインコンクール入選作品・当選:安藤忠雄(11)	
1968 昭和43	都市生活(01) 都市のいこいの場(02) 創立50周年記念事業記録号(03) 幼児施設(04) 教育施設(05) 医療施設(06) 都市交通施設(07) 都市供給施設(08) 群としての住居(09) 都市のアクセサリー(10) 新都市計画法の諸問題(12)	
1969 昭和44	建築産業の構造と方向(01) 老人とすまい(04) 建築史の方向——現代によみがえる過去(05) 転換しつつある住宅生産(07) 解決をせまられる公害問題(08) 民家の系譜と保存計画(10) 鉄筋コンクリート構造耐震設計上の問題点——1968年十勝沖地震被害の教訓・六車照(02) 存亡の危機にある芝居小屋——呉羽座・近藤豊(03)	
1970 昭和45	日本万国博覧会記念「第2回日本建築祭」建築8団体連合大会開催 設計のシステム化(04) 高層建築問題(06) 欧米における契約(07) 工事計画(09) ディベロッパー(10) 日本万国博におけるデザイン批評・辻野純徳、太田隆信、紙野桂人(03) 消費者の立場からみたグッドデザイン座談会・司会:館哲郎(05)	
1971 昭和46	塚本猛次会長就任 都市エネルギーと無公害化ビル(02) 都市生活とみどり(04) 企画と設計のプロセス(05) 解体工学(06) 都市と港湾(07) 転換期のニュータウン(08) 軟弱地盤と震災(09) 変貌する建築生産(10) 自然とレジャースペース(12) コンピューターを利用した住宅相談・石村勇二(01)	
1972 昭和47	冬季オリンピックと札幌(01) 600号記念号(02) 量産住宅の設備(06) 創刊号発刊当初の編集を通じて・佐藤四郎、松井昭光(02) 昭和前期の編集を通じて——対談・岡田孝男、松井昭光(02) 恩師上野伊三郎氏の死を悼む・星廣文(07・08合併号) アンケート 千日デパート火災をみて都市防災についてどう思いますか(10)	



日本万国博覧会会場・お祭り広場イメージ
(『建築と社会』1966年8月号)



「孤独からの脱却—老人の地域社会生活」
(『建築と社会』1969年4月号)



「新しい解体工法」
(『建築と社会』1971年6月号)

	日本（関西中心）	海外	
	ビートルズ来日 いざなぎ景気 国立京都国際会館（大谷幸夫） 朝日放送本社・大阪タワー（大成建設） 大阪ガスビルディング増築（安井建築設計事務所） 桃華楽堂（今井兼次） ソニービル（芦原義信）	中国・文化大革命（～1977終結宣言） マリン郡庁舎（F.L. ライト） ホイットニー美術館（M. プロイヤー） ヘルシンキ工科大学（A. アアルト）	1966 昭和41
	公害対策基本法公布 大阪市営地下鉄谷町線開業 大津市庁舎（佐藤武夫） 桜井寺本堂（村野藤吾） 大阪銀行協会（日建設工務） 静岡新聞・静岡放送東京支社ビル（丹下健三） 寒河江市役所庁舎（黒川紀章）	EC（ヨーロッパ共同体）発足 ASEAN（東南アジア諸国連合）発足 モントリオール博アメリカ館（R.B. フラー） コルビュジエ・センター（ル・コルビュジエ）	1967 昭和42
	十勝沖地震 文化庁発足 小笠原諸島日本に復帰 霞が関ビルディング（山下寿郎ほか） 朝日新聞ビル（竹中工務店） 豊中市立市民会館（池田宮彦） 坂出人工土地（大高正人）	パリ五月革命 核兵器拡散防止条約調印 オリンピック・メキシコシティ大会開催 ベルリン国立美術館（L.M.V.D=ローエ） エヴァソン美術館（I.M. ペイ）	1968 昭和43
	東名高速度道路全通 原子力船「むつ」進水 西宮トラピスチヌ修道院（村野藤吾） OMMビル（竹中工務店） ホテルプラザ（大成建設） 親和銀行本店（白井晟一） 代官山ヒルサイドテラス第1期（槇文彦）	アポロ11号月面着陸成功	1969 昭和44
	日本万国博覧会開催 天六ガス爆発事故 よど号ハイジャック事件 志摩マリンランド水族館・海洋館（大阪設計事務所） 村野・森建築事務所（村野藤吾） 芦屋市民センター（坂倉建築研究所大阪事務所）	ジョン・ハンコック・センター（SOM） アーコサンティ建設開始（P. ソレリ）	1970 昭和45
	環境庁発足 沖縄返還協定調印 愛知県立芸術大学（吉村順三） 京王プラザホテル（日本設計） セスイハイムM1（大野勝彦） ポーラ五反田ビル（日建設計）	ロサンゼルスでサンフェルナンド地震 フィンランディア・コンサートホール（A. アアルト） デンバー美術館（ジオ・ポンティ）	1971 昭和46
	浅間山荘事件 田中角栄「日本列島改造論」発表 第11回冬季オリンピック大会（札幌）開催 沖縄返還 西宮市庁舎（山下寿郎設計事務所） 京都大学総合体育館（京大增田研究室） 中銀カプセルタワービル（黒川紀章）	オリンピック・ミュンヘン大会開催 日中国交正常化 キンベル美術館（L. カーン） ブリオン・ヴェガ墓地（C. スカルパ）	1972 昭和47



霞が関ビルディング



村野・森建築事務所



中銀カプセルタワー

1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
↓
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017

	日本建築協会	
1973 昭和 48	建築教育(01) 泉北ニュータウンのコミュニティ施設(02) 大阪大林ビルディング(03) レジャーと施設(04) 大阪国際ビルディング(05) 老人コミュニティ(06) ヨーロッパのまちづくり(12) 大阪における二大高層ビルをみて・浦辺鎮太郎、佐野正一ほか(03・05) 村野藤吾先生を囲んで——建築家に話を聞く会(08)	
1974 昭和 49	歴史的環境保全(01) 建築生産と流通機構の変容(06) ビルの省エネルギー化(07) 明日の建築はどうなるか・西沢文隆、吉田光邦、加藤邦男(02) 中京郵便局庁舎の保存に寄せて・大久保昌一(07) 作品作風 倉敷アイビースクエア(07) 建築家に話を聞く会(第2回)竹腰健造氏に聞く(10) 「中国の建築事情を聞く」発展する中華人民共和国の若い建築技術者は何を考えているのか(11)	
1975 昭和 50	図書館(01) インテリア(03) PC板を使用した工業化住宅(04) 社会・建築・法(05) 建築とプレストレストコンクリート構造(07) 人間環境としてのターミナル(09) 騒音対策と防音材料(10) 集合住宅の設備(12) 大阪 昭和50年の御堂筋・塩谷馨(06) 若手建築家に聞く—東孝光氏・安藤忠雄氏・山崎泰孝氏のやり方(06)	
1976 昭和 51	建築基礎構造の問題点(02) 建築防災と法(05) 工場建築の設備(07) 鉄骨構造のジョイント(08) 集住体のハードとソフト(09) 結露防止対策と断熱材料(10) アンケート 建築デザインについての証言'76・竹腰健造、村野藤吾、東畑謙三ほか33名(01) 読者の頁 長谷部鋭吉先生の絵画展に就いて・岡橋作太郎(12)	
1977 昭和 52	ニュータウンの管理——千里のフォロー(03) コンクリートの品質管理と行政指導の方向(04) 身障者施設(06) 埋立地における構造問題——大阪南港と芦屋浜を例として(08) 座談会「デザインの動向——部分と全体」岩本博行・西沢文隆ほか(01) ミニ開発を考える・延藤安弘(10) お祭り広場大屋根の解体と部分保存・川口衛(10)	
1978 昭和 53	建築技術選書、学芸出版社より刊行開始 水(02) 電波障害と建築(05) 組合方式による集合住宅計画(06) CAD—設計とコンピュータ(09) ビル環境(12) 排除の歴史——近代建築思考・西沢文隆(01) 都住創(都市住宅を自分達の手で創る会)・中筋修(06) 新しい大阪市庁舎のデザイン構想案さきまる(10) 読者の頁 須磨離宮公園現代彫刻展開く(11)	
1979 昭和 54	転換期の再開発(01) コンクリートのひびわれ(04) 農村施設の変貌(07) 庄内のまちづくり—今日の到達点と課題(09) 80年代のインテリア(10) 建設業の労務事情——悪化とその打開への試み(11) 欧米の商業空間・commonsスペースの新しい動向・足立孝(03) 座談会：住民参加とまちづくりの展望を語る・高田昇ほか(09)	



大阪国際ビルディングと大阪大林ビルディング
(『建築と社会』1973年5月号)



特集：歴史的環境保全
(『建築と社会』1974年1月号)

	日本（関西中心）	海外	
	第一次オイルショック 円変動相場制へ移行 江崎玲於奈ノーベル物理学賞受賞 大阪大林ビルディング(大林組) 大阪国際ビルディング(竹中工務店) 瀬戸内海歴史民俗資料館(山本忠司)	ベトナム和平協定(パリ協定)調印 チリ・クーデター(ピノチェト政権樹立) シドニー・オペラハウス(J. ウッツォン) クリスチャン・サイエンス・チャーチセンター(I. M. ペイ)	1973 昭和 48
	佐藤栄作ノーベル平和賞受賞 倉敷アイビースクエア(浦辺鎮太郎) 東京海上ビルディング本館(前川國男) 顔の家(山下和正) 新宿三井ビル(日本設計) 群馬県立近代美術館(磯崎新)	ウォーターゲート事件(ニクソン米大統領辞任) バングラディッシュ国会議場(L. カーン) シアーズ・タワー(SOM) イェール大学英国美術研究センター(L. カーン)	1974 昭和 49
	沖縄海洋博覧会開幕 大分地震 大阪府立青少年海洋センター(大阪府、坂倉建築研究所) アクアポリス(菊竹清訓) 幻庵(石山修武)	サイゴン陥落によりベトナム戦争終結 宇宙船アポロ・ソユーズがドッキング インドシナ戦争終結 ミロ美術館(ホセ・ルイ・セルト)	1975 昭和 50
	ロッキード事件明るみに 住吉の長屋(安藤忠雄) ソニータワー(黒川紀章) 大阪マルビル(フジタ工業) 中野本町の家(伊東豊雄) 上原通りの住宅(篠原一男)	オリンピック・モントリオール大会開催 米ヴァイキング1号火星着陸 ワールド・トレード・センター(M. ヤマサキ) パシフィック・デザイン・センター(C. ペリ)	1976 昭和 51
	漁業専管水域200カイリ時代へ 日航機ハイジャック事件 ローズ・ガーデン(安藤忠雄) 阪急グランドビル(竹中工務店) 西日本総合展示場(磯崎新)	ポンピドー・センター(R. ピアノ、R. ロジャース) ブロンクス開発センター(R. マイヤー)	1977 昭和 52
	日中平和友好条約調印 新東京国際空港開港 西淀川公害裁判 国立民族学博物館(黒川紀章) 愛知県陶磁資料館(谷口吉郎) ラフォーレ原宿(入江三宅設計)	イギリスで体外受精児(試験管ベビー)誕生 イタリア広場(C. ムーア) センズベリー視覚芸術センター(N. フォスター) ベルリン州立図書館(B. H. H. シャロウン)	1978 昭和 53
	第二次オイルショック 日本電気(NEC)PC-8000シリーズ販売 カプセルイン大阪(黒川紀章) ハヶ岳美術館(村野藤吾) 小林ビル・ホリディン南海大阪(東畑建築事務所)	ソ連、アフガニスタンへ軍事介入 イラン革命 ゲーリー自邸(F. O. ゲーリー) ヴェネツィア・ビエンナーレ世界劇場(A. ロッシ)	1979 昭和 54



倉敷アイビースクエア



大阪マルビル



国立民族学博物館

	日本建築協会	
1980 昭和 55	見学会 菊正宗嘉宝蔵と記念館(02) 「大阪の近代建築ガイドマップ」頒布 80年代の都市と建築(01) 今後の省エネルギーの趨勢(02) 最近の防水工法(06) 都市景観とアメニティ(07) 水ぎわのまちづくり(09) 建築法規と行政に望むこと・白石博三(05) 鼎談 都市景観とアメニティをどう考える?・久保貞、向井正也、三輪利英(07)	
1981 昭和 56	見学会 KBS京都放送会館(03) 住友海上京都ビル(07) 職能論(01) ポートピア '81(03) 災害と法——安全な環境をめざして(06) 建築物と風——デザイナーのために(08) 障害者の暮らしやすい環境と設備(12) 鼎談 神戸のまちとポートピア '81・佐野雄一郎、清家清、陳舜臣(03) 追悼文 竹腰健造先生天寿をまっとうさる・津田久、福田朝生、大島靖、東畑謙三、塚本猛次(08)	
1982 昭和 57	福田朝生会長就任 見学会 大阪市庁舎(01) ザ・シンフォニーホール(09) ホテル日航大阪(08) 新たな商業空間の展開(01) 近畿の地盤と地質(04) 大阪市庁舎(第1期)(06) ホール建築と音(07) 大スパン構造(08) 地方の庁舎建築(11) 風土・空気と人間(12) 追悼文 木下順三郎さんを偲ぶ・尾亀清四郎(06) レポート モスクワ児童音楽劇場・松井昭光(09)	
1983 昭和 58	事務所移転(大阪駅前第3ビル21階) 見学会 電通大阪ビル(04) 関西の建築文化を考える(01) 大阪駅とターミナルビル(06) 東海の将来と文化を考える(08) 大阪城国際文化スポーツホール(11) 鼎談 なぜ、いま関西の建築文化か —— その先駆性と特質・小松益喜、玉置豊次郎、吉田光邦(01) 追悼文 森田慶一先生を偲んで(05)	
1984 昭和 59	佐野正一会長就任 21世紀への関西 —— 魅力あるまちづくりを問う(01) 関西の超高層ビル(02) 京都駅南口再開発ビル(アバンティ)特集(06) 消防設備のポイント(07) みどりとそれを取りまく人々(08) ディテールの思想(11) 光応用システムと建築(12) 見学記 オフィスビルの12年 —— 大阪大林ビルのインテリアについて・加藤力(10)	
1985 昭和 60	見学会 国立京都国際会館・イベントホール(03) 都ホテル大阪(08) 大阪湾物語(01) 建築物の基礎を考える(03) 大阪国際見本市新会場(07) 建築と水の演出(08) 都市と健康・スポーツ(09) 接合 —— 人体と建築にみる(10) 伊勢湾をめぐる東海の諸問題(11) 対談 安井武雄と自由様式・浦辺鎮太郎、佐野正一(03)	
1986 昭和 61	日本建築協会賞創設 Gallery —— まち・建築・ひと連載開始 「大阪の近代建築ガイドマップ(改訂版)」頒布 これからの住空間 —— 都市型集合住宅にみる(01) 大阪市庁舎(第2期)(06) 21世紀の住居と設備(07) CAD —— その応用と展開(09)	



『近代建築ガイドマップ』

	日本（関西中心）	海外	
	松谷邸(安藤忠雄) 正面のない家(坂倉建築研究所) 神戸ポートアイランド団地(坂倉建築研究所) 宝塚市庁舎(村野藤吾)	イラン・イラク戦争 光州事件 住宅第10号(P.アイゼンマン) マイクロメガス計画(D.リベスキンド) アトランティス(アルキテクトニカ)	1980 昭和55
	ポートピア'81 福井謙一ノーベル化学賞受賞 ニュートラム開通 西澤文隆自邸(西澤文隆) ナビオ阪急(竹中工務店) 神戸ポートピアホテル(日建設計) 小篠邸(安藤忠雄) 織陣・I(高松伸) ドムス香里(石井修)	スペースシャトル「コロンビア」打ち上げ チャールズ皇太子結婚 コーヘン邸(モルフオシス) ORF放送局(D.バイヒル) メルフイス創立(ソットサス他)	1981 昭和56
	東北・上越新幹線開通 大阪芸術大学塚本英世記念館(第一工房) 松陰女子大学(竹中工務店) 逆瀬台の家(出江寛) 先斗町のお茶屋(高松伸) 大淀のアトリエ(安藤忠雄) ザ・シンフォニーホール(大成建設)	フォークランド紛争 メルヘングランバック美術館(H.ホライン) IBM移動パビリオン(R.ピアノ) 香港ピークコンペ案(Z.ハディド) ラピレット公園案(B.チェミ)	1982 昭和57
	東京ディズニーランド開園 大阪城ホール(日建設計) ARK(高松伸) 神戸市立博物館(坂倉建築研究所) 都住創徳井町(ヘキサ) 電通大阪ビル(横文彦) 基督兄弟団西宮教会(出江寛) 九条の町屋(安藤忠雄) 六甲の集合住宅(安藤忠雄)	ポートランドビル(M.グレイブス) ロヨラ法科大学(F.ゲーリー) サンドニ病院(シリアニ) トルレス邸(イゲーラス)	1983 昭和58
	目神山の家8(石井修) シャルレ本社ビル(石井修) 茂木邸(安藤忠雄) ファラオ(高松伸)	ロサンゼルス五輪開催 シュツツガルト美術館新館(J.スターリング) AT&Tビル(P.ジョンソン) イリノイ州センター(H.ヤーン)	1984 昭和59
	つくば万博開幕 日航ジャンボ機墜落 阪神タイガース、リーグ優勝 TIME'S I(安藤忠雄) 都ホテル大阪(村野藤吾) インテックス大阪(東畑建築事務所) 西脇市岡之山美術館(磯崎新)	ランシーラ・ビル(M.ボッタ) サーマイペーターソン邸(F.ゲーリー) ゴルチェのプティック(R.アラッド)	1985 昭和60
	六甲の教会(安藤忠雄) 都住創淡路町(ヘキサ) 大淀の茶室(安藤忠雄)	ソ連チェルノブイリ原子力発電所事故 香港上海銀行(N.フォスター) マンハッタン・トランスクリプト(B.チュミ) ピカソアリーナ(ヤノヴィスキー)	1986 昭和61



インテックス大阪



宝塚市庁舎



神戸ポートピアホテル

1917
 1918
 1919
 1920
 1921
 1922
 1923
 1924
 1925
 1926
 1927
 1928
 1929
 1930
 1931
 1932
 1933
 1934
 1935
 1936
 1937
 1938
 1939
 1940
 1941
 1942
 1943
 1944
 1945
 1946
 1947
 1948
 1949
 1950
 1951
 1952
 1953
 1954
 1955
 1956
 1957
 1958
 1959
 1960
 1961
 1962
 1963
 1964
 1965
 1966
 1967
 1968
 1969
 1970
 1971
 1972
 1973
 1974
 1975
 1976
 1977
 1978
 1979
1980
 ↓
1986
 1987
 1988
 1989
 1990
 1991
 1992
 1993
 1994
 1995
 1996
 1997
 1998
 1999
 2000
 2001
 2002
 2003
 2004
 2005
 2006
 2007
 2008
 2009
 2010
 2011
 2012
 2013
 2014
 2015
 2016
 2017

	日本建築協会	
1987 昭和62	創立70周年記念号(附録「大阪モダニズムの精華」)(03) 見学会 梅田センタービル(03) 『昭和生まれの関西建築家50』出版 入浴物語(01) 室内の仕上床(06) 駅(07) 宝塚の街づくり——逆瀬川駅前地区市街地再開発事業(10) 記念論文 大阪モダニズム変容の70年・向井正也(03)	
1988 昭和63	『建築と社会』800号(11) 見学会 京都・都ホテル新宴会場(02) 『住宅近代化への歩みと日本建築協会』出版 ホテル物語(01) 建物の外装リフレッシュ(04) 21世紀への照明(07) 集合住宅のリフレッシュ(10) 読売テレビ(12) 巻頭論文「建築と社会」の歩みと将来の展望・浦辺鎮太郎(11)	
1989 昭和64 平成元	見学会 ホテルオークラ神戸(04) 兵庫県立こどもの館(07) 宝塚造形芸術大学(09) 夢を乗せる輸送設備(01) リゾート事情(02) 色の復権(03) 博覧会とまちづくり(06) 都市環境創造と設備Ⅰ(07) 最近の博覧会パビリオン(12) 追悼文 木下正利氏逝く・白井周二(02) 故設楽貞三さんを悼む・東畑謙三(02) 総論 色の復権・篠原一男・加藤力、北浦かほる(03)	
1990 平成2	見学会 南海サウスタワーホテル(02) クリスタルタワー(10) 商品化住宅のデザイン(01) ニュータウン・ルネサンス(02) 国際花と緑の博覧会(06) 高強度化——設計の多様化をめざして(08) 都市のナイス・プレイス(10) 和歌山県の展望と景観(11) 高級感——建物の顔:完成の時代を迎えての外装材(12) 座談会 21世紀のニュータウン・磯野新、加藤育生、柏原士郎、田中直人(02)	
1991 平成3	新しい都市空間づくりⅠ・Ⅱ(01・02) オフィス・プレジャー(02) 今、京都(05) 建築家のための設備知識(05) 建築をめぐるトラブルとその解決(08) 建築と土木——構造技術の世界(11) 21世紀の住まいを考えるシンポジウム(12) 座談会 どうなる?これからの都市づくり——初夢朝まで座談会(02) 追悼文 浦辺鎮太郎先生を悼む・佐野正一、原広司、高口恭行、藤田邦昭、前野慶太郎(08)	
1992 平成4	見学会:梅田スカイビル(07) 夢物語——人がかわる、街がかわる(01) こだわりのインテリア(02) 地球環境時代の建築(05) 木構造を使ってみませんか——集成材による構造(07) 屋台——仮設の魅力に学ぶ(10) 京のかたちと色(12) 追悼文:井出正雄氏を偲ぶ・河島勝三(03) 総論 地球環境時代と建築・末吉富太郎(05)	
1993 平成5	第1回茶室見学会(10) 『建築と社会』復刻版・『建築設計者のための設備知識』出版 東海的美術館・博物館(03) 市民劇場の舞台設備(04) 環境——限りある自然と建築とのかかわり(05) 都市のスカイライン(06) 福祉のまちづくり(10) 追悼文 岡田孝男先生逝く・東畑謙三、小林清、和田精一、山田博光(02)	



創立70周年記念号
(『建築と社会』1987年3月号)



(『建築と社会』800号)



昭和生まれの関西建築家50

	日本（関西中心）	海外	
	国鉄民営化 梅田センタービル(竹中工務店) 芦屋市立図書館(坂倉建築研究所) 宝塚造形芸術大学(A. ヴォジャンスキー) キリンプラザ大阪(高松伸)	ブラックマンデー アラブ世界研究所(J. ヌーヴェル) ルーヴル改造計画(I. M. ペイ) ロイズ・オブ・ロンドン(R. ロジャーズ)	1987 昭和62
	なら・シルクロード博 瀬戸大橋開通 播磨屋本店円山店(竹中工務店) 花山の病院(篠原一男) ダイキン OSAKA アトリオ(丹田悦雄) 新神戸オリエンタルシティ・C3(竹中工務店) 京都文化博物館(久米事務所)	ソウル五輪 ザ・コンストラクトラクティヴィスト展(P. ジョンソン企画)	1988 昭和63
	昭和天皇崩御 大津プリンスホテル(丹下健三) 光の教会(安藤忠雄) 神戸市立須磨海浜水族園(大建設) 森之宮スカイガーデンハウス(遠藤剛生) 神戸市新庁舎(日建設) ライカ本社ビル(安藤忠雄)	中国・天安門事件 ベルリンの壁崩壊 ヴィトラ家具博物館(F. ゲーリー) プライステ(B. プリンス) ルーヴル美術館改造計画(I. M. ペイ) ラビレット公園(B. チュミ)	1989 昭和64 平成元年
	国際花と緑の博覧会開催 松下 IMP ビル(日建設) K2ビルディング(篠原一男) 海遊館(ケンブリッジ・7・アソシエイツ) 大阪東京海上ビルディング(鹿島建設) クリスタルタワー(竹中工務店)	ドイツ統合 中国銀行香港支店(I. M. ペイ) サンジョルディ・パレス(磯崎新) アトランタ(J. ヘイダック)	1990 平成2
	バブル崩壊 ホテル川久(永田・北野) 奈良市写真美術館(黒川紀章) 新南座(杉山隆) 大阪国際平和センター(シーラカンズ) 千里国際学園(長島孝一) 姫路文学館(安藤忠雄) 神戸ファッションマート(昭和設計)	湾岸戦争 ソ連崩壊 音楽都市(C. ポルファーポルク) 香港工科大学(S. クワン) ユウゼン自動車博物館(モーフアシス)	1991 平成3
	丸亀市猪熊玄一郎現代美術館(谷口吉生) オーキッドコート(C. ムーア) 千里ライフサイエンスセンター(東畑建築事務所) 滋賀県立長浜ドーム(久米設計) 神戸ハーバーランドビル(日建設)	マーストリヒト条約(EC) セビリア万博日本館(安藤忠雄) ブラッケンハウス(M. ホプキンス)	1992 平成4
	けいはんなプラザ(日建設) オーガニックビルディング(G. ペッシュ) 大同生命大阪本社ビル(日建設、一粒社ヴォーリス) P&G 本社ビル(竹中工務店) 一心寺念仏堂(高口恭行) 梅田スカイビル(原広司)	情報スーパーハイウェイ構想 ウォータールー国際駅(N. グラムショウ) ミスターチャントールーム(A. チャン)	1993 平成5



光の教会



海遊館



梅田スカイビル

	日本建築協会	
1994 平成6	市川宏会長就任 見学会 大阪府立近つ飛鳥博物館(01) サントリーミュージアム(09) コピー文化の新時代(01) 伊勢・神宮式年遷宮と神宮界限(03) いま、医療施設は(06) 集合住宅団地リニューアル(11) 関西国際空港(12) 総論 水と建築のデザイン ― 水と人との関わり・瀧光夫(09)	
1995 平成7	見学会 同和火災フェニックスタワー(02) 光がつくる風合の世界(01) 音 ― 騒音から操音／創音へ(02) 飛騨・美濃(03) 新しい「都市・建築」の視点 ― 阪神大震災を教訓として(09) ライフラインと建築設備―阪神大震災を経験して(11) 総論 日本建築における光と空間・中村昌生(01)	
1996 平成8	見学会 大阪府立新図書館(03) 大阪府立門真スポーツセンター(04) 阪神大震災から学ぶ ― 21世紀へのメッセージ(01) 災害！非常時に生きる法体系(05) 住まいの未来像 ― 多面的な視点から考える(07) マルチメディアがつくる世界(08) キーコンセプトの新時代 ― OSAKA(09) 総論 キーコンセプトの新時代 ― OSAKA・橋爪紳也(09)	
1997 平成9	「建築と社会」900号／創立80周年記念号 建築のロングライフ化をめざして(01) 建築と私と社会 ― 80人の眼(04) 大阪ドーム(07) クロスワード都市 OSAKA(09) モザイク都市の住むかたち(10) 総論1 鉄ものがたり・金多潔(02) 追悼 竹中錬一氏を偲んで(04)	
1998 平成10	Concrete(02) 街並みの演出 ― 最近の外構材料(04) 地球環境保全と建築(06) 心と体を元気にするインテリア(07) 建築への証言 '98 ― 21世紀に向けて(09) 2001年の医療施設(11) 座談会 生活の場にみる安全・安心・奥野卓司、弘本由香里、田中直人、小浦久子(05) 追悼 東畑謙三先生天寿を全うされる・横尾義貫、佐野正一(07)	
1999 平成11	見学会 なら100年会館(01) “らしさ”のデザイン(01) 都市のパブリック(04) 大阪城天守閣平成の大改修(06) 改正建築基準法 ― まちづくり・すまいづくりへの展開(07) 総論1 日本の木造建築と木質構造・坂本功(10) 追悼文 恒成一訓氏を偲ぶ・清家清(12)	
2000 平成12	見学会 グランキューブ大阪(01) 淡路夢舞台(02) 21世紀のデザインの動向を見る(01) ところを癒す環境デザイン(04) スケルトン&インフィル(06) 100年後のメッセージ(08) 来世紀に引き継ぐ ― わざ、もの、ところ(09) 21世紀の高齢者の居住環境(11) 総論 建築の精神を引き継ぐ・西村征一郎(09)	



『日本建築協会80年史』



(『建築と社会』900号)



関西国際空港

	日本（関西中心）	海外	
	関西国際空港開港 関西国際空港旅客ターミナルビル(R. ピアノ) アジア太平洋トレードセンター(日建設計) 京都ホテル(清水建設) 松柏美術館(村野藤吾) ドーンセンター(安井建築事務所)	金日成死去 フランス国立図書館(D. ペロー) 無限の塔(J. ヌーヴェル) ウェスカの体育館(E. ミラー・ジェス) リヨンTGV駅(S. カラトラヴァ)	1994 平成 6
	阪神・淡路大震災(1.17) 地下鉄サリン事件 京都コンサートホール(磯崎新) 大阪ワールドトレードセンター(日建設計) ふれあい港館(P. ブランシェ) 大山崎山荘美術館(安藤忠雄)	ヘラクレスビル(E. O. モス) チャイナタワー(K. ヤング) サトラス駅(S. カラトラヴァ)	1995 平成 7
	大阪プール(東畑建築事務所) なみはやドーム(昭和設計) MIHO MUSEUM(I. M. ベイ) 大阪市立中央図書館(石本建築事務所) みやこめっせ京都市勧業館(川崎清) アクア堂島(竹中工務店) OAP タワーズ(三菱地所)	アトランタ五輪開催 『S、M、L、XL』(R. クールハース)出版	1996 平成 8
	京都議定書 京都駅(原広司) キッズプラザ大阪(安井建築設計事務所) 大阪ドーム(日建設計) ハービス OSAKA(竹中工務店) 熊野古道なかへち美術館(妹島和代) ゼンカイハウス(宮本佳明)	ビルバオ・グッゲンハイム美術館(フランク・O. ゲーリー) ゲティ・センター(R. マイヤー)	1997 平成 9
	明石海峡大橋開通 長野冬季五輪開催 なら100年会館(磯崎新) HEPFIVE(竹中工務店) 佐川美術館(竹中工務店) びわ湖ホール(佐藤総合計画) 真宗大谷派参拝接待所(高松伸、鹿島建設)	ペトリナスツインタワー(C. ペリ) ヘルシンキ現代美術館(S. ホール) チバウ文化センター(R. ピアノ)	1998 平成 10
	大阪府立国際会議場(黒川紀章) ワコール本社ビル(高松伸) 大阪城天守閣平成の大修理(大阪市) 堂島アバンザ(日建設計)	ユダヤ博物館(D. リベスキンド) ドイツ連邦議会新議事堂(N. フォスター) ミレニアムドーム(R. ロジャーズ)	1999 平成 11
	淡路夢舞台(安藤忠雄) HOOP(竹中工務店) 平等院ミュージアム(栗生総合計画事務所) なにわの海の時空間(P. アンドリュウ) 梅田ダイビル(日建設計)	シドニー五輪開催 大英博物館グレートコート(N. フォスター) テート・モダン(ヘルツォーク&ド・ムーロン)	2000 平成 12



京都駅



ユダヤ博物館

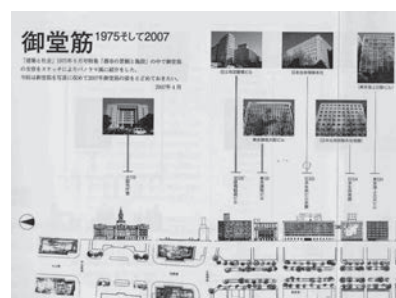


淡路夢舞台

	日本建築協会	
2001 平成 13	金多潔会長に就任 読者と選ぶ「建築と社会賞」開始 21世紀の建築設計教育(02) IT社会におけるきずな(04) 成熟社会をささえるまちづくり(06) 現代の日本の空間、文化を探る(07) 環境——近未来に向けて今できること(08) 建築の力 都市の力(09) 保存再生の根拠を求めて・石田潤一郎(09)	
2002 平成 14	日本建築協会ホームページ開設 再生・リサイクル(02) 塗装のいろいろ(05) いま、インテリアデザインは(07) 建築とボランティア(09) 時を超えて——サステナブルエンジニアリングの現在(10) 登録有形文化財の動態保存・畑田耕一(06)	
2003 平成 15	佐野吉彦会長に就任 青年技術者顕彰50年 九州の地域づくり・まちづくり(02) サスティナビリティ——次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン(04) 建築と五感(05) コンバージョン——インテリアから発信するまちなみ(07) 介護と建築・設備(08)	
2004 平成 16	事務所移転(OMMビル) 都市緑化(02) 愛・地球博(03) 省リスクな「まち再生」(04) リニューアルの技(05) 地域住民主体のまちづくりと支援制度(06) 銭湯——心地よさを求めて(08) 建築家とは何か(09) 巨大地震にそなえて(10) 21世紀の社会と建築家・馬場璋造(09)	
2005 平成 17	震災から10年(01) 建築の経済化(04) 住まい方の変化(05) 人工栽培(06) 次世代に伝える「木」の建築／「建築と社会」1000号記念(07) 火災から守る(09) 構造の過去から未来へ(10) 日本建築協会建築クラブ休会 「建築と社会」創刊号から1000号にみる住宅と暮らしの変遷・北浦かほる(07)	
2006 平成 18	都市環境デザインと参加のまちづくり(01) 「地方空港の時代」——まちと共存する空港づくり(02) 都市再生の本質——光と影のはざまで(04) 変容する家族形態とあたらしいライフスタイル(05) 設計図が伝えるもの(07) 建築物の安全・安心(08) 研究の風景(04～2011年07) 座談会 建築の未来像——100年後の世界をのぞいてみれば(11)	
2007 平成 19	創立90周年 光り輝く京都の景観まちづくり(01) 学校新時代(02) 創立90周年記念——この10年、これからの10年(04) あそび考(05) こだわりが創る住まいのカタチ(06) 住まいの設備と空間の移り変わり(07) 建築系雑誌が伝えるもの(08) 楽しい構造の世界(12) 大正から昭和へ、日本建築協会が果たした役割の一断面・坂本勝比古(04)	



「ネパールの学校とAAF」
（『建築と社会』2002年9月号）



「御堂筋1975そして2007」(『建築と社会』2007年4月号)

	日本（関西中心）	海外	
	狭山池博物館（安藤忠雄） 司馬遼太郎記念館（安藤忠雄） 兵庫県立美術館（安藤忠雄） 大阪歴史博物館（大阪市住宅局営繕部、日本設計、NTTファンリ ティーズ、C.ペリ）	米同時多発テロ ミルウォーキー美術館（S.カラトラバ）	2001 平成13
	日韓サッカーワールドカップ 国立国会図書館関西館（陶器二三雄） 大阪中央公会堂（坂倉・平田・青山・新日設計共同企業体） 兵庫県西播磨総合庁舎（設計組織ADH）	フォートワース現代美術館（安藤忠雄） ロンドン市庁舎（N.フォスター）	2002 平成14
	積層の家（大谷弘明） 梅田DTタワー（竹中工務店） 和歌の浦アート・キューブ（下吹越武人） 筑紫の丘斎場（遠藤秀平）	イラク戦争 セルフリッジ百貨店（フューチャー・システムズ） ウォルトディズニーコンサートホール（F.O.ゲーリー）	2003 平成15
	ハービスENT（竹中工務店） 関電ビルディング（日建設計） 国立国際美術館（C.ペリ） LVMH 大阪（隈研吾）	シアトル中央図書館（R.コールハース） ニューヨーク近代美術館（谷口吉生） 30 St Mary Axe（N.フォスター）	2004 平成16
	構造計算書偽造問題 京都迎賓館（日建設計） 兵庫県立芸術文化センター（日建設計） ストロングビルディング（竹中工務店） 鉄の教会（木村博昭） 奈良県立図書情報館（日本設計、梶谷設計）	バルセロナ・アグバー・タワー（J.ヌーヴェル）	2005 平成17
	大阪弁護士会館（日建設計） 三重県立熊野古道センター（建築研究所アーキヴィジョン） 南方熊楠顕彰館（矢田康順、堀正人）	トレド美術館ガラスパビリオン（SANAA）	2006 平成18
	なんばパークス（大林組、日建設計） Slowtecture 三木（遠藤秀平） 佐川美術館 樂吉左衛門館（樂吉左衛門、竹中工務店）	BMW ヴェルト（コープ・ヒンメルブラウ） ネルソン＝アトキンス美術館（S.ホール）	2007 平成19



兵庫県立美術館



和歌の浦アートキューブ



国立国際美術館

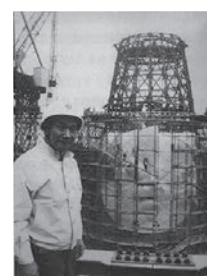
	日本建築協会	
2008 平成 20	中井進会長に就任 PFI事業、その後(02) まちづくり2011年宣言(04) 新ホテル物語(05) 設備に役立つ地震対策(06) 建築と景観(08) 木造住宅を巡って(10) 建築においてROBOTが活躍する日は来るのか?(11) 自然と戦う構造(12) 大阪を中心とした郷土建築座談会(03) 総合地球環境学研究所——設計者の立場から・岡本隆(02)	
2009 平成 21	水の都 にぎわいのある未来に向けて(02) 楽しい福祉(04) 体感するインテリア(05) 建築空間が求める空気環境(06) 建築と水(07) 実用レベルで展開される施工管理のIT化(08) 地域の歴史資産を活かしたまちづくり(10) 構造家日記——頭の中をのぞいてみたら(12) 再読 関西近代建築(04~2015年03) 水のインスピレーション・鈴木博之(07) 「関西の建築界／群像」(09~2015.06)	
2010 平成 22	大阪歴史博物館主催「シンポジウム関西建築界のあゆみを語る」 建築とエコ技術(02) 食と建築・都市(04) ホスピタリティのあるケア空間(05) 太陽光発電(06) 建築と石(07) 再生・受け継ぐ・繋がる(08) 建築ストック社会の形成への展望(10) LED照明の活用・将来を考える——人・地球への思いやり(11) 京都の近代和風建築の魅力・中村昌生(10)	
2011 平成 23	ストック活用時代の夜明け(01) BIMは設計を変革するか?(02) まちなかのサードプレイス(04) 変遷する“身の置きどころ”(05) 建築と土(07) 鉄道駅に注目する(08) 火災に強い建築を考える(10) コンクリートという素材(11) 構造教育と社会(12) 「サードプレイス」考・舟橋國男(04) 3.11関西からのメッセージ(09~12)	
2012 平成 24	香西喜八郎会長に就任 自然災害に立ち向かう力を求めて(01) 今、私が思う『和』(02) 中国市場に挑む(05) ZEB ネット・ゼロ・エネルギー・ビルを目指して(06) 建築と窓(07) 巨大地震に備える(08) 超高齢社会に求められる住まい(10) 歴史的建造物の保存活用(11) 身のまわりの世界の「構造」を探る(12) 『想定外』を繰り返さない・河田恵昭(08)	
2013 平成 25	一般社団法人に移行 脱成長の時代を考える(01) “らしくない”空間(02) 無駄から見える節電(06) 素材としての建築(09) 建築に携わるものに求められること(11) 木の街をつくる(11) 実験(12) 建築を見る写真家のまなざし・村井修(09) 座談会「素材と技術が生み出すデザイン」(10)	
2014 平成 26	エリアマネジメントの新展開に向けて(01) 融合する空間——新たな試み(02) オフィスビル設備の変遷とこれから(05) オフィスのこれから(06) 建築と時間(08) 省エネ・低炭素のこれまでとこれから(09) でっかいものはすごいぞ(11) 建築と時間・内藤廣(08)	



「再読 関西近代建築」
(『建築と社会』2012年8月号)



読者と選ぶ「建築と社会」賞入賞発表
(『建築と社会』2014年7月号)



「太陽の塔」岡本太郎の最高傑作
(『建築と社会』2014年11月号)

	日本（関西中心）	海外	
	朝日放送（隈研吾、NTTファシリティーズ） La Porte心斎橋（プランテック総合計画事務所）	北京オリンピック リーマンショック 北京国家体育場（ヘルツォーク&ド・ムーロン） オスロ・オペラハウス（スノヘッタ）	2008 平成 20
	世界遺産 熊野本宮館（香山壽夫） ロレックス中津ビル（槇文彦） 京都大学稲盛財団記念館（日建設計、三信建築設計事務所）	CCTV（R. コールハース）	2009 平成 21
	大阪富国生命ビル（D. ペロー、清水建設） 六甲枝垂れ（三分一博志） 中川政七商店新社屋（吉村靖孝） ユニクロ心斎橋（藤本荘介） 龍谷ミュージアム（日建設計）	ローザンヌラーニングセンター（SANAA） ポンピドゥー・メス（坂茂）	2010 平成 22
	東日本大震災 大阪ステーションシティ（西日本旅客鉄道、安井建築設計事務所） 高野口小学校校舎改修（本多友常） 六甲の住居（島田陽）	ロンドン・アクアティクス・センター（ザハ・ハディッド）	2011 平成 23
	中之島フェスティバルタワー（日建設計） 梅田阪急ビル（日建設計） Loopecture A 淡路人形座（遠藤秀平）	ループル・ランス（SANAA）	2012 平成 24
	大阪木材仲買協同組合（竹中工務店） ダイビル本館（日建設計） グランフロント大阪（日建設計、三菱地所設計、NTTファシリティーズ、大林組、竹中工務店） セトレマリーナびわ湖（芦澤竜一） ヤンマーミュージアム（日本設計）	デンマーク国立海洋博物館（BIG） 深圳証券取引所（R. コールハース） 4ワールド・トレード・センター（槇文彦）	2013 平成 25
	あべのハルカス（竹中工務店） ザ・リッツ・カールトン京都（日建設計） 竹中大工道具館新館（竹中工務店） 京都国立博物館 平成知新館（谷口建築設計事務所） 京都の集合住宅（妹島和世）	台中国家歌劇院（伊東豊雄） 1ワールド・トレード・センター（SOM）	2014 平成 26



高野口小学校



グランフロント大阪



あべのハルカス

1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017

	日本建築協会	
2015 平成 27	フォー・オールの時代に向けて(01) 場をつくる——プログラムの挑戦 リノベーションのリアル(02) あかり・文化・創造(05) これからの学びのかたち(06) 建築の価値(08) 空き家と向き合う(09) 職人がいなくなる!! オリンピックと10年後に備えて(10) 形態にあらわれた構造(11) 座談会「建築と文化・建築と社会」のこれまでとこれからについて(03) 「建築と社会を考える」(10～)	
2016 平成 28	100周年記念 プレ展示会 at 生きた建築ミュージアムフェスティバル 100周年記念 近代建築見学会——大阪の都市景観再見(12) 公開討論 「関西の建築界」は今、どこにあるのか? 大阪歴史博物館主催「郷土建築へのまなざしと日本建築協会」 人の移動・物の移動・情報の移動(05) 人口減少社会のまちづくり(09) 「再読 関西近代建築——論考・記事編」 座談会 都市の記憶をたどって(01) 建築・都市のユニバーサルデザイン・田中直人(01)	
2017 平成 29	創立100周年記念式典(03.30) 100周年記念 近代建築見学会——大阪の都市景観再見(01) 日本建築協会100年の歩みをたどる『100年史』刊行(03) 『建築と社会』100周年記念特集号(03)	



創立100周年記念式典ポスター

	日本（関西中心）	海外	
	市立吹田サッカースタジアム（竹中工務店、安井建築設計事務所） 太子町新庁舎（坂本昭） 草屋根（藤森照信、中谷弘志） 同志社京田辺会堂（柏木由人、柏木浩一）		2015 平成 27
	ロームシアター京都（香山壽夫） 枚方 T-SITE（竹中工務店）		2016 平成 28
			2017 平成 29



市立吹田サッカースタジアム



枚方 T-SITE（提供：株式会社竹中工務店）

■年表作成
（折り込み年表とも）

安達英俊
酒井一光
豊田充広
吉永規夫
和田康由

1917
1918
1919
1920
1921
1922
1923
1924
1925
1926
1927
1928
1929
1930
1931
1932
1933
1934
1935
1936
1937
1938
1939
1940
1941
1942
1943
1944
1945
1946
1947
1948
1949
1950
1951
1952
1953
1954
1955
1956
1957
1958
1959
1960
1961
1962
1963
1964
1965
1966
1967
1968
1969
1970
1971
1972
1973
1974
1975
1976
1977
1978
1979
1980
1981
1982
1983
1984
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994
1995
1996
1997
1998
1999
2000
2001
2002
2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017

第4部

日本建築協会
活動の記録

日本建築協会活動の記録

◆委員会活動

現在活動中の常設委員会は、編集、事業、教育、出版の4委員会である。発足当初より時代の要求に応じて各種委員会が開設され、また終了している。その主な活動を以下に列記する。

■編集委員会

会誌『建築と社会』は、会員相互の建築情報誌として本会の中心的役割を果たしてきた。現在、編集委員会は小委員会が設けられ、月1回の全体会議によって毎号の特集内容が検討され、収支状況が報告されている。

2017年（平成29）3月には、創立100周年記念号（Vol.98、通巻1140号）を発刊した。

編集委員会——特集小委員会

- ・計画系分科会（計画系、建築計画系、インテリア・住宅系）
- ・構造分科会
- ・設備分科会
- ・施工材料分科会
- ・法令分科会

——作品作風小委員会
——広告企画小委員会

■事業委員会

創草期、展覧会や講演会、見学会を企画・開催していたのは運営委員会であった。

昭和に入ると協会の組織運営は役員（常務）会をはじめ、第一部（法制）委員会、第二部（教化）委員会、第三部（資料）委員会、第四部（災害）委員会を設置し、これら委員会に分科会を設け、講演会、見学会などは、これら各委員会活動の過程において、委員会単独か合同で適宜計画され実施された。

講演会、見学会等を所管する組織が設置されたのは、1940年（昭和15）2月に設置された「会勢幹事会」であると考えられる。この会勢幹事会も1947年12月5日に「会勢委員会」と改称されているが、1949年2月には「事業委員会」という名称の委員会も設置され、会勢委員会は会員増強のほか主として見学会を、事業委員会は講演会、懇親会、見学会等を開催している。

この会勢委員会は、1956年4月の理事会において改組を承認決定され、事業の企画実施を主とする委員会の名称は「事業委員会」とし、所管する事業の内容は見学会、映画会、講演会、展示会、懇親会、各種説明会、若い会員の集いのほか、他の委員会が所管しない事業を企画実施することとされた。そして、従来の会勢委員会の名称は「会勢審議会」となった。

1971年4月、事業委員会の見直しが行われ、「見学会小委員会」、「広報小委員会」および「若い会員の集い小委員会」の3小委員会に整理統合され、広報小委員会は1998年（平成10）4月に「情報小委員会」と改称された。2004年4月には見学会小委員会、情報小委員会が統合され「情報見学小委員会」となり、2006年には若い会員の集い小委員会も統合され、現在も活発な活動を展開している。

また2013年よりおおむね35歳以下の若手建築技術者の活動の場として「U-35小委員会」を立ち上げ、若手自らの企画による催しを行い好評を博している。

■教育委員会

1954年（昭和29）より、建築教育の調査・研究、講座等を企画・実施する。現在は工高生教育小委員会が工高生デザインコンクールを、講習会小委員会が建築工事実務講習会を運営し、毎年開催している。

工高生デザインコンクールは、1954年11月、今後の工高教育について語り合う場として、座談会「これからの建築教育はどうあるべきか」が開催され、そこで建築デザインの基本教育として「自分の考えを自在に表現できる技術の習得が肝要」との意見があり、全国の工業高校建築科学生の設計技術の向上と奨励のため、1955年度より実施されている。毎年全国から多数の優れた作品の応募があり、審査委員会による入選作が選出され、充実した表彰式が行われている。

実務講習会は経験豊富な実務家の会員を擁する協会ならではの企画であり、大阪、名古屋、広島で開催し、毎年多数の参加者が受講している。

また2012年より、大阪府、大阪府建築士事務所協会、大阪府建築士会、日本建築家協会近畿支部等で構成する大阪府住まい・まちづくり普及協議会に参画し、諸行事に協力している。

■出版委員会

1951年（昭和26）7月、朝日ビルで「出版委員会」が開催された。同年9月号の『建築と社会』会務欄によれば、「奥山委員外6名出版委員長に小林清氏を互選事業企画意見交換法規のインデックス作成を議す」（原文）とある。同号以前の会務欄には「出版委員会」の記載がなく、この会合が同委員会としての最初の会議ではないかと推測される。当時の出版物は、「主として青年技術者を対象とした実際に直ぐに役立つ簡易要諦のパンフレット」として企画された。

1964年度に四つの専門部会が設置された。

「構造部会」・「意匠計画部会」・「設備原論部会」・「施工部会」で、それぞれに部会長と幹事を配し部会単位に編集委員会が設けられ、専門書の企画が行われた。これにより「有益で廉価な図書」が相次いで出版され、建築各界に好評を博した。

1971年11月、「図書の委託出版について」協議された。図書の発行を「自前」から専門の「出版社」に委託し、図書の流通販売は飛躍的な変化を遂げることとなる。このことにより企画の中にもよりいっそうの「市場性」が求められる結果となった。1978年7月、「建築技術選書」の第1巻『茶室の話』（岡田孝男著）刊行。企画：日本建築協会、発行：学芸出版社。建築技術選書は協会創立60周年記念出版として企画されたシリーズであり、同選書の姉妹編として企画された〈プロのノウハウ〉シリーズと創立70周年記念事業として企画された「選書特装版」を含め、一大企画となった。

出版委員会では図書の企画とともに、著者を講師とした「講座」も実施されている。2016年（平成28）年度現在、延べ38回開催され、読者と著者の交流という独特の企画として定着している。

■100周年関連事業委員会

2007年（平成19）4月、100周年に向けて協会の理念である「建築を通じ広く社会に貢献する」活動を10年継続して行う目的で「10年委員会」が設置された。学生が直接“ものづくりの現場”に触れられる「学生のための見学会」や「大阪ええとこ創生プロジェクト」等のアイデアコンペを行った。

また、2009年4月には100周年に向けた記念企画の実行委員会として「関西の建築界／群像」と「史料研究会」（連載「再読 関西近代建築」）が設置された。

「群像」は、関西の建築界を取り巻く様々な分野の方々を紹介するページを若手会員の参画を得て、会誌『建築と社会』に掲載、100周年時に新規原稿とともに編纂し『関西の建築界／群像』として発刊した。

史料研究会は、関西における歴史的な建築や会誌に掲載された論考について個々に取り上げて解説し会誌へ連載、100周年時に新規原稿とともに編纂し『モダンエイジの建築『建築と社会』を再読する』として発刊した。

この他、活動を終了した常設委員会、特別委員会活動などについては資料を添付CDに収録している。

■表彰と顕彰

日本建築協会賞

本賞は、1986年（昭和61）の協会創立70周年を記念して創設された。建築のあらゆる分野において社会に貢献している個人または団体を顕彰し、基本的には建築物等の作品を除き、主として業績を対象としている。

青年建築家・青年技術者

組織、グループ等から推薦された人、自薦の人を選考委員会で選考し、会誌『建築と社会』の青年建築家（後に「青年技術者」）特集で顕彰している。

有能な若い建築家に勇気を与え、社会に押し出し、既成建築家との交流の場を与え、建築の歴史的発展と建築家の人間的成長の一助にしたいとの願いのもとに、1953年度の編集委員会で企画され、1954年よりスタートし、今日に至る。

工業高校・高専等の優秀卒業生の表彰

1952年度から、全国の工業高校の優秀卒業生に対し、本会より表彰状を授与している。

なお添付CDには資料不足により1952年度から1972年度までの表彰件数の記載はない。

添付CD収録 記録データ

※一部『日本建築協会80年史』より転載

- 日本建築協会会則
- 日本建築協会定款
- 役員名簿
 - 歴代会長・副会長・理事・常務・幹事等
 - 名誉顧問・名誉会長
 - 名誉正会員
- 評議員総会・評議員会・理事会の開催
- 支部規定
- 支部役員
- 会員数・収支決算の推移
- 常設委員会（歴代委員長、主な活動内容等一覧）
 - 編集委員会
 - 事業委員会
 - 教育委員会
 - 出版委員会
- 活動を終了した常設委員会（歴代委員長、主な活動内容等一覧 『80年史』より）
 - 建築データシート編集委員会
 - 法制委員会
 - 法規委員会
 - 住宅委員会
 - 都市計画委員会
 - 災害委員会
 - 災害調査委員会
 - 設備委員会
 - 都市武装促進委員会
 - 建材委員会
- 特別委員会
 - 会勢審議会
 - 会勢（理事）委員会
 - 企画委員会
- 出版図書一覧
- 講習会等
- 実務講習会等
- 博覧会・展覧会
- 建議・陳情・意見書
- 日本建築協会賞
- 読者と選ぶ『建築と社会』賞 受賞者一覧
- 青年建築家・青年技術者 受賞者一覧
- 工高生デザインコンクール過去テーマおよび受賞者一覧
- 工業高校・高専等の優秀卒業生の表彰

香西喜八郎（こうざい・きはちろう）

1944年倉敷市生まれ。大阪大学工学部構築工学科建築コース卒業、同大学院修士課程修了。現在、株式会社東畑建築所代表取締役社長。一般社団法人日本建築協会会長。

石田潤一郎（いしだ・じゅんいちろう）

1952年鹿児島市生まれ。京都大学工学部建築学科卒業、同大学院博士後期課程研究指導認定退学。工学博士。現在、京都工芸繊維大学教授。専門は日本近代建築史・都市史。主な著書に『関西の近代建築』（中央公論美術出版）など。

石川祐一（いしかわ・ゆういち）

1967年東京都生まれ。岡山大学文学部史学科卒業。京都府立大学大学院生活科学研究科修士課程修了、京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士課程学位取得、学術博士。現在、京都市文化財保護課（建造物担当）に勤務。専門は近代建築史、住宅史。単著に『近代建築の夜明け——京都熊倉工務店・洋風住宅建築の歴史』（淡交社）、『京都の洋館』（光村推古書院）、共著に『民芸運動と建築』（淡交社）など。

平井直樹（ひらい・なおき）

1984年奈良県生駒市生まれ。京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科卒業、同大学院工芸科学研究科造形工学専攻および造形科学専攻修了。博士（学術）。京都工芸繊維大学ベンチャーラボラトリー研究員を経て、現在、清水建設株式会社技術研究所研究員。日本の近代建築や近代化遺産に関する歴史的研究とその保存・活用を専門領域とする。

玉田浩之（たまだ・ひろゆき）

1973年生まれ。京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。同大学文化遺産教育研究センター特任助教を経て、現在、大手前大学メディア・芸術学部准教授。博士（学術）。アメリカ建築史、近代建築史を専門領域とする。訳書に『近代建築保存の技法』（鹿島出版会）など。

三宅拓也（みやけ・たくや）

1983年豊中市生まれ。京都工芸繊維大学大学院博士後期課程修了。博士（学術）。現在、京都工芸繊維大学デザイン・建築学系助教。専門は近代建築史、博物館史。主な著作に『近代日本〈陳列所〉研究』（思文閣出版）、『松ノ井寛治の建築ドローイング——ニューヨークで学んだボザール建築』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）など。

坂本勝比古（さかもと・かつひこ）

1926年中国青島市生まれ。旧制神戸工業専門学校（現神戸大学工学部）建築学科卒業。工学博士（東京大学）。神戸市教育委員会主幹、ICOMOSローマセンター留学、千葉大学工学部教授等を経て、現在、神戸芸術工科大学名誉教授。建築史、デザイン史専攻。おもな著書に『明治の異人館』（朝日新聞社）、『西洋館』（小学館）、『阪神間モダニズム』（共著、淡交社）など。主として近代建築史を研究。

佐野吉彦（さの・よしひこ）

1954年神奈川県生まれ、西宮市に育つ。東京理科大学工学部建築学科卒、同大学院修了。現在、株式会社安井建築設計事務所代表取締役社長、東京理科大学大学院客員教授、米国建築家協会名誉フェロー会員。日本建築協会元会長。主な作品に「東京汐留ビルディング」「小林聖心女子学院小学校校舎」など。

山形政昭（やまがた・まさあき）

1949年大阪市生まれ。京都工芸繊維大学工芸学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。工学博士。現在、大阪芸術大学芸術学部建築学科教授、建築史、建築計画専攻、とりわけ日本の近代建築、住宅建築を専門領域とする。主な著書に『ヴォーリスの建築』（創元社）、『ヴォーリス建築の100年』（創元社）など。

設楽貞樹（しだら・さだき）

1949年神戸市生まれ。神戸大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。1973年株式会社安井建築設計事務所入社。現在同社常務取締役執行役員。再開発事業や都心の開発プロジェクトに多く携わる。主な作品に京阪守口駅前再開発、大阪市中央卸売市場本場再整備事業、大阪駅サウスゲートビル（旧アクティ大阪）増築など。

和田康由（わだ・やすし）

1948年大阪市生まれ。大阪工業大学建築学科卒業、同大学院工学研究科建築学修士課程修了。現在大阪市立都島工業高等学校建築科非常勤講師、博士（工学）。近代住宅史を専攻、とりわけ大阪の長屋と郊外住宅地を専門領域とする。主な著書に『まちに住まう——大阪都市住宅史』（共著、平凡社）『近代日本の郊外住宅地』（共著、鹿島出版会）ほか。

上田篤（うへだ・あつし）

1930年大阪市生まれ。建築学者・建築家。京都精華大学名誉教授、上田篤都市建築研究所主宰。京都大学大学院工学研究科修了後、建設省、京都大学工学部助教授、大阪大学工学部教授、京都精華大学美術学部教授等を歴任。1970年の日本万国博覧会でお祭り広場を設計し日本建築学会特別賞を受賞。歴史や文化に関する著作も多い。著書に『日本人とすまい』（岩波書店）、『流民の都市とすまい』（駁々堂出版）など多数。

鳴海邦頼（なるみ・くにろ）

1944年青森県生まれ。京都大学大学院修士課程修了。工学博士。兵庫県技師、京都大学助手を経て大阪大学教授。現在大阪大学名誉教授、関西大学客員教授。都市計画、都市環境デザインが専門。日本都市計画学会元会長、サントリー学芸賞、不動産協会賞等を受賞。主な著書に『都市の自由空間——道的生活から』（中公新書）、『都市の魅力アップ』（編著、学芸出版社）、『都市のリ・デザイン——持続と再生のまちづくり』（編著、学芸出版社）他多数。

小林都雄（こばやし・いくお）

1944年名古屋生まれ。神戸大学卒業、大阪市立大学大学院修士修了。株式会社都市・計画・設計研究所、株式会社コー・プラン、神戸山手大学教授を経て、現在、人と防災未来センター上級研究員、兵庫県立大学特任教授。地域計画、市街地整備から住民主体のまちづくりまで広い分野の都市プランナー。主な業務に、神戸港ポートアイランド基本設計、神戸ハーバーランド整備計画、HAT神戸基本構想など。

天野直樹（あまの・なおき）

1949年大阪府生まれ。京都大学建築学科卒業、同工学研究科修士課程建築専攻修了。1975年株式会社竹中工務店入社、2004年設計部長、現在、取締役専務執行役員。「宝塚大劇場」「播磨屋本店生野総本店」などを設計。

大井昇二（おおい・しょうじ）

1949年大阪市生まれ。大阪市立大学工学部建築学科卒業、同年大林組入社。大阪本店設計部長、統括部長、本社執行役員設計副本部長、現在同社顧問。1995年～2005年大阪市立大学工学部建築学科非常勤講師。主な作品に「ホテルモントレ大阪（マルイト西梅田ビル）」「ホテルモントレ仙台」「なんばパークス商業棟」「志摩観光ホテルベイスイト」「毎日放送新館」等。

橋爪紳也（はしづめ・しんや）

1960年大阪市生まれ。京都大学工学部建築学科、同大学院工学研究科修士課程、大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。現在、大阪府立大学21世紀科学研究機構特別教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長。建築史、都市文化論専攻。日本ディスプレイデザイン研究賞大賞、日本観光研究学会学会賞など受賞。著書に『明治の迷宮都市——東京・大阪の遊楽空間』（平凡社）、『広告のなかの名建築 関西編』（加島出版会）、『生きた建築 大阪』（140B）など多数。

鈴木毅（すずき・たけし）

1957年愛知県豊橋市生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院博士課程単位取得退学。博士（工学）。現在、近畿大学建築学部教授。建築計画、環境行動研究、特に人の居方からの環境デザイン、計画住宅地の再構築を専門領域とする。主な共著に『建築計画読本』（大阪大学出版会）、『まちの居場所——まちの居場所をみつける／つくる』（東洋書店）など。

本多友常（ほんだ・ともつね）

1948年東京都生まれ。1972年早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。1972～1998年竹中工務店（1977～1979年 A A School of Architecture 卒業）、1998年～2013年和歌山大学教授。現在、摂南大学教授、建築計画・設計。主な著作に『ゆらぐ住まいの原型—自然発生的建築を探る』（学芸出版社）、『建築ノート』（共著、新建築社）、主な設計に「樹林の家」「高野口小学校修復」がある。

安原幹（やすはら・もとすけ）

1972年大阪市生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院博修士課程修了。山本理顕設計工場を経て2008年 SALHAUS 共同設立。現在東京理科大学理工学部准教授。主な建築作品に「群馬県農業技術センター」「西麻布の集合住宅」「陸前高田市立高田東中学校」など。

横山俊祐（よこやま・しゅんすけ）

1954年福岡県生まれ。1985年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。熊本大学工学部建築学科助手、大阪市立大学大学院助教授等を経て、2005年より大阪市立大学大学院教授。建築学、都市計画・建築計画。著書に『住まい論』（放送大学教育振興会）、『これからの集合住宅づくり』（晶文社）など。主な作品に「大阪市立大学高原記念館」「水上村立湯山小学校」「八代市菅西片町団地」など。

篠原佳則（しのはら・よしのり）

1964年愛知県生まれ。名古屋大学工学部建築学科卒業、同前期修士課程修了。現在、株式会社安井建築設計事務所名古屋事務所副所長兼企画部長。日本建築協会東海支部長、特定非営利活動法人子ども健康フォーラム理事。主な作品に、あいち小児保健医療総合センター、豊橋市ほいっふ、下呂温泉病院、岐阜県立希望が丘こども医療福祉センター及び岐阜希望が丘特別支援学校ほか。

高松隆夫（たかまつ・たかお）

1948年東広島市生まれ。広島大学工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了、Texas A&M University 大学院博士課程修了。Ph.D。現在、広島工業大学工学部建築工学科教授、建築構造力学、建築構造学専攻。とりわけ、構造解析、鋼構造、耐震構造を専門領域とする。主な著書に『鋼構造』（共著、森北出版）など。

長瀬博一（ながせ・ひろかず）

1941年京都市生まれ。京都工芸繊維大学工芸学部建築工芸学科卒業。現在、有限会社長瀬建築研究所代表取締役。設計活動のかたわら大阪工業大学空間デザイン学科非常勤講師として 6 年間、設計演習を担当。主な作品に「京都市武道センター本館」「ロイヤルオークホテル」（以上独立前担当）、「YMC 技術開発センター」「国際文化教室」（ビッツバーク大学内）、茶室「嘎庵」ほか。著作に『生谷家住宅主屋保存修理工事報告書』（文化庁提出）。

安達英俊（あだち・ひでとし）

1974年、京都工芸繊維大学建築工芸学科卒業、渡邊節建築事務所入所。1980年、安達英俊建築研究所主宰、京都工芸繊維大学大学院造形工学修了、工学修士、一級建築士、「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）。2015年、日本建築学会業績賞受賞。著書に『村野藤吾建築案内』（共著、TOTO 出版）など、建築作品に「ギャラリー・アーティスロン」（京都市）など。

酒井一光（さかい・かずみつ）

1968年東京生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒業、東京大学大学院工学系研究科博士課程中退。大阪歴史博物館学芸員。専攻は建築史。著書に「窓から読みとく近代建築」（学芸出版社）。共著に「大阪名所図解」（140B）など。担当した展覧会に特別展「村野藤吾　やわらかな建築とインテリア」、特集展示「郷土建築へのまなざしと日本建築協会」など。

豊田充広（とよだ・みつひろ）

1961年大阪市生まれ。1984年京都工芸繊維大学工芸学部建築学科卒業。同年株式会社高松組（現高松建設株式会社）入社。現在、高松建設株式会社東京本店設計本部部長。近畿建築士会協議会「ひろば」編集委員、一般社団法人日本建築協会情報見学小委員会小委員長、『建築と社会』編集委員を歴任。

吉永規夫（よしなが・のりお）

1980年大阪府生まれ。和歌山大学システム工学部環境システム学科卒業、同大学院修士課程修了。工学博士。2008年から本多環境・建築設計事務所。2012年から Office for Environment Architecture 主宰。現在、摂南大学・京都造形芸術大学非常勤講師。主な建築作品に「陶器まつりのある家」「ヨシナガヤ」「樫野燐灯台旧官舎改修」など。

日本建築協会100年史 1917-2017

Centenary History of
The Architectural Association of Japan

2017年3月30日 第1版第1刷発行

編集・発行 一般社団法人日本建築協会
〒540-6591
大阪市中央区大手前1丁目7番31号
OMMビル7階B室
電話 06-6946-6981
FAX 06-6946-6984
<http://www.aaj.or.jp>

印刷・製本 株式会社中島弘文堂印刷所

©日本建築協会 2017

日本建築協会創立 100 周年記念事業 賛助会員

ご賛助いただきましたみなさま、まことにありがとうございました。

■ 団体会員

株式会社 I A O 竹田設計

株式会社浅沼組

株式会社朝日工業社大阪支社

浅海電気株式会社

株式会社アスウェル

アスワン株式会社

アズビル株式会社ビルシステムカンパニー関西支社

株式会社新井組

株式会社安藤・間大阪支店

株式会社市浦ハウジング&プランニング

株式会社イトーキ

インビスタジャパン合同会社

株式会社浦辺設計

王建工業株式会社

大阪ガス株式会社

オーケーレックス株式会社

大阪工業技術専門学校

株式会社大阪城口研究所

大塚オーミ陶業株式会社

株式会社大林組

株式会社岡村製作所

株式会社小笠原設計

株式会社奥村組

鹿島建設株式会社関西支店

ガムスター株式会社

株式会社カワサキライフコーポレーション

関西電力株式会社

元旦ビューティ工業株式会社

キムラ硝子建材株式会社

旭日電気工業株式会社大阪支店

株式会社きんでん

株式会社熊谷組関西支店

栗原工業株式会社

株式会社建研大阪支店

株式会社建築資料研究社 日建学院

株式会社鴻池組

コーナン建設株式会社

株式会社佐藤総合計画関西事務所

三機工業株式会社関西支社

サンセイ株式会社

三宝電機株式会社

三和電気土木工事株式会社

清水建設株式会社関西支店

株式会社昭和設計

須賀工業株式会社

住友電設株式会社

株式会社精研

株式会社総合設備コンサルタント大阪事務所

株式会社双星設計

総合資格学院関西本部

株式会社大建設計

大成温調株式会社大阪支店

大成建設株式会社関西支店

大鉄工業株式会社

太陽工業株式会社

タキヤ株式会社

株式会社竹中工務店

田島ルーフィング株式会社大阪支店

株式会社地域計画建築研究所大阪事務所

T O T O 株式会社

株式会社東畑建築事務所

東リ株式会社

株式会社トーエネック大阪本部

戸田建設株式会社大阪支店

ナブコドア株式会社

南海辰村建設株式会社

西松建設株式会社西日本支社

株式会社日刊建設工業新聞社

株式会社日刊建設産業新聞社

株式会社日刊建設通信新聞社

株式会社日建設計

日新工業株式会社大阪支店

株式会社日積サーバイ

日本 E R I 株式会社

日本コンクリート工業株式会社大阪支店

株式会社日本設計関西支社

野村建設工業株式会社

株式会社ハーテック

阪急設計コンサルタント株式会社

パナソニック株式会社

株式会社平田タイル

ヒロセ株式会社大阪本店

藤井建設株式会社

株式会社藤木工務店

不二熟学工業株式会社

フジモリ産業株式会社

文化シャッター株式会社関西支店

前田建設工業株式会社関西支店

株式会社前田商会

株式会社松村組

丸五基礎工業株式会社

三井住友建設株式会社

望月建設株式会社

森村金属株式会社

八木惣株式会社

株式会社安井建築設計事務所

八千代電設工業株式会社

山岡建設株式会社

株式会社ヤマネ

株式会社山本組

株式会社ユニオン

龍建設工業株式会社

有限会社柳々堂

Y K K A P 株式会社

■ 個人会員

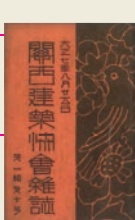
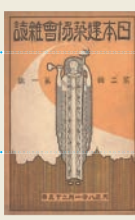
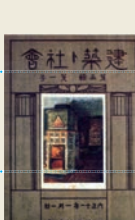
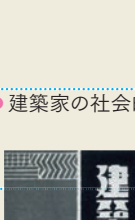
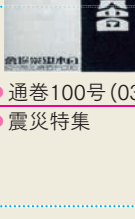
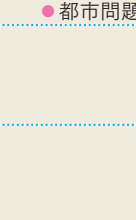
赤木 隆
浅井 謙
居内 章夫
板垣 美一
伊藤 俊志
伊藤 俊夫
稲垣 和江
稲毛 政信
井上 雅嗣
井上 雅祐
上原 正行
大井 昇二
大賀 浩輔
太田原 克則
大村 鐵太郎
越智 文篤
尾野本 悟
梶山 卓二
加藤 武範
河合 止揚
川島 克也
河田 克博
河原 輝雄
久我 洋一
久保 清一
桑井 弥平
黒川 暢一郎
黒田 征四郎

桑原 悠樹
香西 喜八郎
河野 学
小山 将史
坂本 勝比古
坂本 啓子
佐々木 栄
佐藤 東亜男
佐野 吉彦
澤田 純一
澤田 宗久
設楽 貞樹
柴野 晶子
昇 勇
杉本 浩
瀬戸本 淳
僊石 友秋
高田 光雄
高松 隆夫
多胡 進
玉置 卓男
玉水 新吾
千種 幹雄
恒成 恒
寺岡 宏治
土井 敬三
徳岡 昌克
豊田 充広

中井 進
中尾 勝悦
中島 健二
永島 敏郎
永田 久子
長友 理津子
中西 広樹
夏原 晃子
西田 忠光
西村 清志
二宮 利治
沼田 亘
野口 桂三
野村 浩之
橋寺 知子
長谷部 朔郎
林 新一
平井 勇
平尾 和洋
藤城 義丈
藤山 宏
舟橋 國男
本多 友常
前川 治彦
前田 衛
馬渡 勝昭
溝神 宏至朗
美濃 吉昭

村上 幸三郎
村重 保則
元廣 清志
森 肅之
森 暢郎
森口 雅文
盛田 輝勇
森本 勉
門谷 和雄
山形 政昭
山下 修司
山本 俊輔
横田 隆司
吉田 勝美
吉永 規夫
芳山 明久
和田 康由

(敬称略 50音順)

日本建築協会の動静		会 誌	社 会
・参考資料:『大阪都市住宅史年表』1987年3月／島田勝次編『近代建築史年表』『建築と社会』1959年1月／日本建築協会『日本建築協会60年史 1917－1996』1999年3月 ●1889 設案貞雄、工手学校造家学科卒			●1868 明治維新 ●1870 工部省設置 ●1873(1877?) 工部大学校開校 ●1875 工学寮に造家学科設置 ●1877 第1回内国勸業博覧会 ●1879 工部大学校造家学科第1回卒業 ●1882 世界経済恐慌 ●1886 造家学会創立
1867～ 慶応3			
1877～ 明治10			●1877 第1回内国勸業博覧会 ●1879 工部大学校造家学科第1回卒業 ●1882 世界経済恐慌 ●1886 造家学会創立
1887～ 明治20	●1889 設案貞雄、工手学校造家学科卒		●1887 造家学会『建築雑誌』発行。工手学校創設 ●1889 大日本帝国憲法発布 ●1894 日清戦争(～95) ●1896 淀川大洪水
1897～ 明治30	●1897 片岡安、武田五一、東京帝国大学工科大学造家学科卒 ●1903 武田五一、京都高等工芸学校教授 ●1904 池田實、東京帝国大学工科大学造家学科卒 ●1905 大阪に辰野片岡建築事務所開設	 	●1897 造家学会を建築学会に改称 ●1898 E.ハワード、田園都市構想 ●1900 セセッション展 ●1904 日露戦争(～05)
1907～ 明治40	●1907 設案建築工務所開設 ●1910 波江俤夫、東京帝国大学工科大学建築学科卒 ●1912 おさな会・大正会・建坊会などから関西建築協会設立へ	  	●1909 北の大火。大阪府建築取締規則公布 ●1911 建築業協会・建築士会創立 ●1912 南の大火
1917 大正6	●関西建築協会設立 ●災害委員会・編集委員会発足	●『関西建築協会雑誌』創刊	●大阪都市計画調査会設置 ●都市研究会設立 ●日本建築士会正式発足 ●ロシア革命 ●小住宅改良要綱答申 ●米騒動
1918 大正7	●片岡安ら市街地建築物法・都市計画法に尽力		●市街地建築物法・都市計画法・道路法公布
1919 大正8	●日本建築協会に改名 ●大阪住宅経営株式会社からの改良住宅懸賞募集及び審査の委嘱を受託	●『日本建築協会雑誌』に改題 ●『建築と社会』に改題	
1920 大正9	●改良住宅設計博覧会	 	●大阪市社会部・都市計画部設置 ●生活改善同盟会発足 ●分離派建築会発足 ●国際連盟成立 ●借地・借家法・住宅組合法公布
1921 大正10	●法制委員会・材料委員会発足 ●住宅改造博覧会に向けて改良住宅設計図案懸賞募集を3回実施	●第1輯第1号 ●第1輯第11号	●分離派建築会、関西で作品展 ●内務省都市計画局設置
1922 大正11	●桜ヶ丘住宅改造博覧会		
1923 大正12	●都市計画委員会・教化委員会発足 ●関東大震災調査 ●帝都復興案検討	●建築家の社会的地位・片岡安(06)	●関東大震災 ●關一第7代大阪市長に就任(～35)
1924 大正13	●通俗建築大講演会		●土地区画整理開始 ●財団法人同潤会設立
1925 大正14	●構造計算調査委員会発足	●不良住宅地区改良法公布 ●日本インターナショナル建築会・建築展 ●金融恐慌	
1926 大正15 昭和1	●日本建築協会社団法人認可	●通巻100号(03) ●震災特集	●大阪市第二次市域拡張 ●大阪都市協会設立 ●大阪記念博覧会(天王寺公園、大阪城) ●治安維持法・普通選挙法公布 ●伯路社建築創作所結成 ●御堂筋建設開始
1927 昭和2	●片岡安会長就任	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1928 昭和3	●建築知識普及展覧会		●国家総動員法公布
1929 昭和4	●住宅委員会発足 ●貸家建築に関する展覧会	●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1930 昭和5	●震災・大震災大講演会 ●婦人と住宅展覧会 ●『婦人の住宅知識』出版	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1931 昭和6	●鈴蘭台・香里園生活改善住宅展覧会	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1932 昭和7	●紋章決定 ●大美野田園都市住宅博覧会	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1933 昭和8	●設備委員会発足 ●上野芝・千里山花壇附近住宅博覧会 ●「安く住み良い住宅」の博覧会	●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1934 昭和9	●都市武装促進委員会発足	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1935 昭和10		●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1936 昭和11		●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1937 昭和12	●防空と建築展	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1938 昭和13		●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1939 昭和14		●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1940 昭和15		●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1941 昭和16	●会旗制定 ●菖蒲池厚生住宅展覧会	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1942 昭和17	●『菖蒲池厚生住宅展図譜』出版 ●女性と住生活展覧会 ●菖蒲池厚生住宅完成	●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1943 昭和18		●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1944 昭和19	●建築学会との合併は延期	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1945 昭和20		●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1946 昭和21	●片岡安会長死去 ●竹腰健造会長就任	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1947 昭和22	●京都・広島・兵庫・九州・東海支部発足 ●『明日の都市復興』及び『大阪市区公館地区復興設計』出版	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1948 昭和23		●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1949 昭和24	●これからの住宅展覧会	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1950 昭和25	●和歌山支部発足 ●伸びる住宅展覧会 ●神戸博覧会	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1951 昭和26	●出版委員会発足	●創立25周年(05) ●通巻300号(10)	●第二次世界大戦勃発 ●偽格統制令・地代家賃統制令・国民徴用令公布
1952 昭和27	●法規委員会発足 ●35年記念事業「羽衣住宅展」開催 ●ノイトラ講演会	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1953 昭和28	●創立35年記念史	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1954 昭和29	●教育委員会発足 ●青年技術者賞創設	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1955 昭和30	●第1回工高生デザインコンクール(以下毎年開催)	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1956 昭和31	●建築士会、建築家協会の事務を協会が受ける	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1957 昭和32	●住宅委員会、住宅相談所設置 ●第1回現場実務講習会	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1958 昭和33	●尾崎久助会長就任	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1959 昭和34	●建材委員会・近代建築調査委員会発足	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1960 昭和35		●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1961 昭和36	●毎日放送テレビ番組「建築の広場」に協力 ●45周年	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1962 昭和37	●『ふるさとのすまい』出版、1962年度毎日出版文化賞受賞	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1963 昭和38	●南海電鉄沿線に建つ新住宅設計コンクール	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1964 昭和39	●東畑謙三会長就任 ●工高生デザインコンクール10周年記念作品展	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1965 昭和40	●「住宅よろず相談所」開催、会場阪神百貨店	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1966 昭和41		●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1967 昭和42	●関西の建築50年回顧展	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1968 昭和43	●『建築データシート』出版	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布
1969 昭和44	●超高層建築講習会	●『建築と社会』休刊、「終刊号」(03) ●4月号以降「建築雑誌」を配布	●日独伊三国軍事同盟調印 ●大政翼賛会発会
1970 昭和45	●第2回日本建築家を万博お祭り広場で挙行 ●『架構・空間・人間』出版	●表紙コンペ1等	●日中戦争勃発 ●御堂筋道路完成 ●パリ万国博覧会
1971 昭和46	●塚本猛次会長就任	●創立35年記念史」特集	●土地区画整理法公布

1972 昭和47	●講演会「千日デパート火災に学ぶ」 ●建築クラブ復活								●通巻600号記念(02) 	●冬季オリンピック札幌大会開催 ●沖縄返還 ●日中国交正常化
1973 昭和48	●『建築と社会』のシリーズ「都市の開発的保存」SD選書として刊行									●都市緑地保全法公布 ●第一次オイルショック ●円変動相場制へ移行 ●江崎玲於奈ノーベル物理学賞受賞 ●国土利用計画法・生産緑地法公布 ●佐藤栄作ノーベル平和賞受賞 ●国立公害研究所、筑波に発足
1974 昭和49										
1975 昭和50	●旧四会連合工事請負契約約款の改正									●沖縄国際海洋博覧会開催 ●大分地震 ●ベトナム戦争終結
1976 昭和51	●『建築と音楽』クセナキス・吉阪隆正・高橋悠治講演									●オリンピック・モントリオール大会開催
1977 昭和52	●『建築データシート』ハンドブック版出版								●日本建築協会創立60周年記念号 ●通巻660号(03) 	●漁業専管水域200カイリ時代へ ●日航機ハイジャック事件
1978 昭和53										●日中平和友好条約調印 ●新東京国際空港開港 ●西淀川公害裁判
1979 昭和54										●第二次オイルショック ●東京サミット ●米中国交正常化
1980 昭和55	●『大阪の近代建築ガイドマップ』出版									●イラン・イラク戦争 ●光州事件
1981 昭和56										●ボートピア'81開催 ●福井謙一ノーベル化学賞受賞 ●スペースシャトル「コロンビア」打ち上げ
1982 昭和57	●福田朝生会長就任									●新耐震基準施行 ●大阪21世紀協会発足 ●東北・上越新幹線開通
1983 昭和58										●東京ディズニーランド開園
1984 昭和59	●佐野正一会長就任									●ロサンゼルス五輪開催
1985 昭和60										●男女雇用機会均等法成立 ●つくば万博(国際科学技術博覧会)開幕 ●日航ジャンボ墜落
1986 昭和61	●日本建築協会賞創設 									●ソ連チェルノブイリ原子力発電所事故
1987 昭和62	●『昭和生まれ関西の建築家50』出版 ●第1回日本建築協会賞表彰(第7回まで継続) ●『住宅近代化への歩みと日本建築協会』出版									●景気バブル期に突入 ●国鉄民営化
1988 昭和63										●日本オゾン層保護法公布、施行 ●瀬戸大橋開通
1989 昭和63 平成1										●昭和天皇崩御 ●佐賀吉野ケ里遺跡で国内最大級の弥生時代環濠集落確認 ●中国天安門事件 ●ベルリンの壁崩壊
1990 平成2										●国際花と緑の博覧会大阪で開催 ●ハブル崩壊はじまる ●東西両ドイツ統一
1991 平成3	●創立75周年									●湾岸戦争 ●ソ連崩壊
1992 平成4	●『建築と社会』復刻版出版(～1995)									●地球サミット ●日本世界遺産条約批准
1993 平成5	●第3回日本建築協会賞表彰 ●『建築設計者のための設備知識』出版									●環境基本法制定 ●北海道南西沖地震 ●チェコとスロバキアが分離
1994 平成6	●市川宏会長就任									●関西国際空港開港 ●純国産大型ロケットH II 1号機打ち上げ成功
1995 平成7										●阪神・淡路大震災(1.17) ●地下鉄サリン事件
1996 平成8										●広島市原爆ドーム世界遺産に指定 ●アトランタ五輪開催
1997 平成9	●建築クラブ『話のはなし』出版									●京都議定書採択 ●環境影響評価法成立 ●イギリス領香港、中国に返還
1998 平成10										●明石海峡大橋開通 ●冬季オリンピック長野大会開催
1999 平成11	●『日本建築協会80年史 1917～1996』出版 ●第1回読者と選ぶ建築と社会賞創設									●ダイオキシン対策特別措置法成立 ●台湾大地震
2000 平成12										●循環型社会形成推進基本法成立 ●介護保険制度開始
2001 平成13	●金多潔会長就任									●国土交通省発足 ●米同時多発テロ(9.11)
2002 平成14										●都市再生特別措置法公布 ●土壌汚染対策法・自然再生推進法成立 ●日韓サッカーワールドカップ
2003 平成15	●佐野吉彦会長就任 ●青年技術者顕彰50年									●日本郵政公社発足 ●十勝沖地震 ●イラク戦争
2004 平成16	●近代建築シリーズ(協会と阪急電鉄との共同企画、4回)									●景観法公布 ●新潟県中越地震 ●スマトラ島沖大地震
2005 平成17										●構造計算書偽造問題 ●ロンドン同時多発テロ ●愛知万国博覧会開催
2006 平成18										●石綿被害救済法公布
2007 平成19										●エコツーリズム推進法公布 ●新潟県中越沖地震
2008 平成20	●中井進会長就任									●歴史まちづくり法公布 ●オリンピック北京大会開催 ●リーマンショック
2009 平成21										●裁判員制度導入
2010 平成22	●「シンポジウム関西建築界のあゆみを語る」主催：大阪歴史博物館、後援：日本建築協会									●小惑星探査機はやぶさ帰還
2011 平成23										●東日本大震災(3.11) ●東京電力福島原子力発電所事故
2012 平成24	●香西喜八郎会長就任									●東京スカイツリー開業
2013 平成25	●一般社団法人へ移行									●2020年オリンピック東京開催決定 ●和食、無形文化遺産に登録
2014 平成26										●あべのハルカス開業 ●御嶽山噴火
2015 平成27										●マイナンバー(個人番号)通知開始 ●スポーツ庁・防衛装備庁設置
2016 平成28	●「郷土建築へのまなざしと日本建築協会」主催：大阪歴史博物館、後援：日本建築協会									●熊本地震 ●北海道新幹線開通 ●オバマ米大統領、広島訪問
2017 平成29	●日本建築協会創立100周年									

日本建築協会100年史

1917-2017

Centenary History of
The Architectural Association of Japan
1917-2017

